

Architecture and Society

建築と社会

特集　建築の力　都市の力

―建築、都市の再生・転生・創生―

日本建築協会

2001 9 Sep.

模型のヤマネ

——— 夢をかたちに———



MODEL&TOTAL DISPLAY
YAMANE

産業模型のコンサルタント
株式会社 ヤマネ

〒561-0832　大阪府豊中市庄内西町4-3-11
TEL(06)6332-0157　FAX(06)6332-7086
E-mail：yyamane@osk2.3web.ne.jp
ＵＲＬ：http//www2.osk.3web.ne.jp/~yyamane

MODEL
建築・土木・橋梁・社寺佛閣・城郭・古建築・模造品・複製品
機械装置・単体機器・工場全景・製造工程計画模型・完成船舶
機関室・ポンプ室・電飾パネル・インタラクティブ装置

DIGITAL VIDEO
模型・ＣＧＶＰ企画制作
合成シミュレーション(MCP)
2D・3DCGアニメーション

文化遺産としてのモダニズム建築
関西展記念講演会

「関西のモダニズム建築を語る」

石田潤一郎
東　孝光
佐野吉彦
（再掲）



写真提供
大阪ガス（株）
昭和８年

「文化遺産としてのモダニズム建築関西展　in芦屋」では、ドコモモ（＊1）の趣旨を踏まえ、またドコモモジャパン（＊2）の活動に連動しながら関西地区で独自に選定されたモダニズムの遺産20件が紹介されます。

この展覧会の開催に合わせて、20選の選定をとりまとめた建築史家・石田潤一郎氏に作品選定の経過と概要についてのご講演をしていただき、あわせて関西の20選にも選ばれた「旧・枚岡市庁舎」の設計を坂倉建築研究所時代に担当された建築家・東孝光氏をゲストにお迎えしての対談を企画しました。そして、コーディネーターを会場となる大阪ガスビルを設計された安井建築設計事務所の取締役社長・佐野吉彦氏にお願いしました。

関西のモダニズム建築は、独自の歴史と文化を背景に、建築家の個性においても表現手法においても幅広い展開を示し、その多くが今もなお関西の都市文化を支える重要な位置を占めています。20選の選定プロセスの中から浮かび上がってきた関西のモダニズム建築の特質を明らかにしながら、これらを後世に残していく意義や方法を探ります。会場となる大阪ガスビルをはじめとする関西のモダニズム建築の魅力を再確認するとともに、建築の美しさや楽しさを味わい社会的な価値を考える機会になることと思います。ふるってご参加下さい。

＊1 ドコモモ：DOCOMOMO(The Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of the Modern Movement)「近代運動にかかわる建物および周辺環境の記録調査および保存」のための国際組織（ＮＧＯ、本部；オランダのデルフト工科大学内）の略称で、モダン・ムーブメント（近代運動）やその理論的基盤であるモダニズム（近代主義）に歴史的価値を認め、それにかかわる建物や資料を保存する意義を訴えることを目的としています。

＊2 ドコモモジャパン：2000年設立のドコモモの日本支部、代表・鈴木博之東京大学教授、事務局長・藤岡洋保東京工業大学教授。

日　時　2001年**9**月**17**日（月）
18:30―21:00（開場18:00）
会　場　大阪ガスビル　3階ホール
大阪市中央区平野町4-1-2
講　師　石田潤一郎／建築史家・京都工芸繊維大学教授
ゲスト　東　孝光／建築家・大阪大学名誉教授
コーディネーター　佐野吉彦／建築家・安井建築設計事務所取締役社長
定　員　200名＊当日先着順
参加費　無料
問合先　(社)日本建築協会事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
TEL.06-6348-0633
FAX.06-6348-0634
主　催　(社)日本建築協会事業委員会
若い会員の集い小委員会
十文化遺産としてのモダニズム建築関西展実行委員会
担当主査：米井　寛／東畑建築事務所

講演会

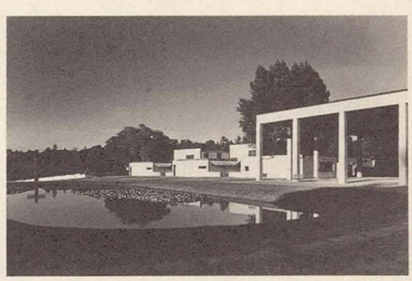
設計者のための写真術
パートⅣ

吉村行雄
世界の巨匠の名作を
いかに撮影し
設計に生かすか

アスプルンドの代表作「森林墓地」を題材に語る

建築家でもある建築写真家の吉村行雄講師の「設計者のための写真術（講演会・撮影会）」が4回目を数えます。
講師の「世界の巨匠の名作」の作品を、スライドで解説していただけることは、受講者にとって、その感性を高める絶好のチャンスかと思われます。
多数のご参加をお待ちしています。

日　時　2001年**10**月**23**日（火）
18:30―20:30
会　場　日本建築協会サロン
＊大阪駅前第3ビル21階
講　師　吉村行雄
一級建築士、建築写真家
定　員　30人
＊申込者多数の場合は抽選
参加費　会員 1,000円、一般 1,500円
＊税込
申　込　10月16日（火）までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
①催し名：設計者のための写真術
②氏名
③個人会員・団体会員・一般の別
④職場・学校名
⑤参加証郵送先
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を10月17日（水）に発送します。
申込先　(社)日本建築協会事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
TEL.06-6348-0633
FAX.06-6348-0634
〒530-0001
主　催　(社)日本建築協会
事業委員会情報小委員会
担当主査：酒井重治





スウェーデン近代建築を代表する建築家、E.G.アスプルンドの代表作、ストックホルム郊外の「森林墓地」を素材に、巨匠の名作をスライドでご覧いただきます。
そのなかで、撮影する際に心がけるべきこと、設計に役立つ撮影の手法を、ご紹介します。さらに、個々の具体的な写真に解説を交えながら、設計への生かし方を考えたいと思います。一つの建築を丹念に鑑賞して写真に記録することにより、撮影した写真から、デザインするための方法論に始まり、具体的にディテールに至るまでの数々を学び取ることができると思います。
全景からディテールに及ぶ多様なカットを見て、ランドスケープデザインから建築・家具・什器にいたる多彩な建築家のデザインエッセンスを感じ取っていただき、建築家として学ぶべきポイントをご一緒に発見できれば幸いです。
（吉村行雄）

吉村行雄（よしむら　ゆきお）
1946年大阪市生まれ
71　武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業
竹中工務店入社
設計部にて建築設計に携わる
85　本社広報にて広報制作業務
現在　本社広報 部長
一級建築士、建築写真家
写真個展活動
1975　個展“Image Europe”（大阪）
80　個展“Image Europe Part-2”（大阪）
90　個展“建築の貌”（東京・銀座）
93　個展“建築の光と空間-ストックホルム市庁舎”（東京・銀座）
94　個展“光と影-ストックホルム市庁舎”（東京・大阪・福岡・名古屋）
98　個展“Light/Space/Architecture-Stockholm City Hall”（New York）
2000　個展“Light/Space/Architecture-Stockholm City Hall”（東京・銀座）
2001　個展“Light/Space/Architecture-Modern Architecture in Sweden”（東京・スウェーデン大使館）
その他、合同展多数開催。また、建築をテーマとするプライベートカレンダーを毎年製作（30年間継続中）。
日本建築写真家協会会員、北欧文化協会正会員

奈良県立

万葉文化館見学会

（再掲）

飛鳥古京として多くの遺跡や歴史的遺産を今に伝える明日香村に、県立万葉文化館が９月にオープンする運びとなりました。

当館は三つの機能を備えています。調査研究機能として、万葉集をはじめ古代文学を中心に広く日本古代の精神文化を研究しその成果を国内外に発信します。展示機能として、万葉集に詠まれた歌をモチーフに我国を代表する画家が描いた創作日本画の展示のほか、ジオラマ映像などの手法で万葉の世界を楽しく紹介する一般展示や、各種の展示、シンポジウム開催にも利用できる企画展示室を設けています。また図書情報サービス機能として、万葉集に関する様々な情報が得られる万葉百科システムや図書により、専門家だけでなく一般の人々にも情報を提供します。

建物は、地下１階、地上２階建てで、「管理研究棟」と「展示棟」の２棟で構成されています。日本古来の建築様式をデザインに取り入れるなど、周辺の景観に配慮した計画としています。また、事前の発掘調査に伴い発見された遺構は、現状保存したうえ一部中庭部分等に復元展示されるほか、冨本銭等の出土品を特別展示室で公開するなど遺跡との共存を図っています。

敷地周辺には、日本最古の寺院である飛鳥寺や、謎とロマンに満ちた酒船石、そのすぐ近くで昨年発見された亀形石等、人々を惹きつける遺跡がたくさんあり、足をのばせば石舞台、高松塚など、初秋の一日、県立万葉文化館を中心に明日香を散策してみませんか。



●建築概要

所在地	奈良県高市郡明日香村大字飛鳥10
建築主	奈良県
設計監理	奈良県企画部万葉ミュージアム建設室 安井建築設計事務所
施工	竹中・森本・村本・仲川・藤井JV
敷地面積	38,363.93㎡
建築面積	6,233.71㎡
延床面積	11,090.47㎡
構造規模	SRC（一部S）、B1・2F
工期	1998年10月～2001年３月(建築本体)
オープン	2001年９月15日（予定）

日　時　2001年**9**月**29**日(土)
13:00―16:30

講　師　岡本　淳／奈良県企画部万葉ミュージアム建設室室長補佐
永島敏郎／安井建築設計事務所
設計部統括主任

集　合　現地／奈良県明日香村飛鳥10
＊近鉄線「橿原神宮前」駅よりバス約15分

定　員　50人
＊申込者多数の場合は抽選

参加費　会員 1,000円、一般 1,500円
＊含、入館料・税

申　込　９月19日(水)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
①催し名：万葉文化館見学会
②氏名
③個人会員･団体会員・一般の別
④職場･学校名
⑤参加証郵送先
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を９月20日(木)に発送します。

申込先　㈳日本建築協会事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
TEL.06-6348-0633
FAX.06-6348-0634
〒530-0001

主　催　㈳日本建築協会
事業委員会見学会小委員会
担当主査：森田芳次／安井建築設計事務所

岸和田市立

浪切ホール見学会

（再掲）

日　時　2001年**10**月**5**日(金)
13:30―16:30

講　師　江副敏史／日建設計大阪設計室長
増田宗忠／大林・南海辰村・才門JV理事所長

集　合　現地／岸和田市港緑町111-3
＊南海線「岸和田」駅より徒歩約15分

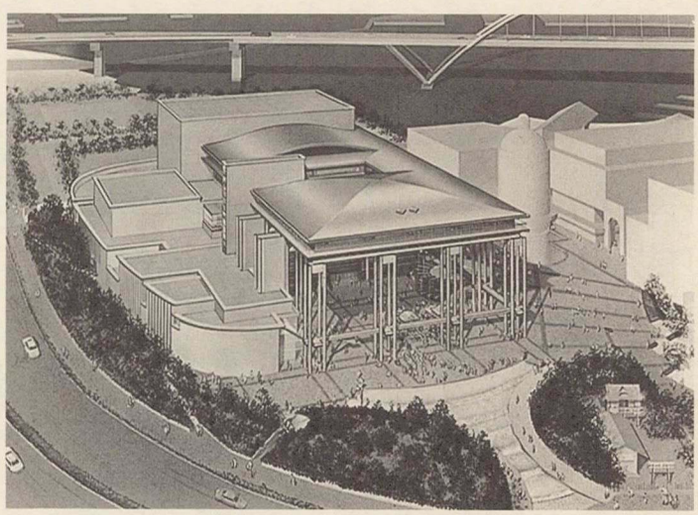
定　員　50人
＊申込者多数の場合は抽選

参加費　会員 500円、一般 1,000円
＊税込

申　込　９月27日(木)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
①催し名：浪切ホール見学会
②氏名
③個人会員･団体会員・一般の別
④職場･学校名
⑤参加証郵送先
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を９月28日(金)に発送します。

申込先　㈳日本建築協会事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
TEL.06-6348-0633
FAX.06-6348-0634
〒530-0001

主　催　㈳日本建築協会
事業委員会見学会小委員会
担当主査：久保田秀男／日建設計
坂本良高／大林組



岸和田市は勇壮なだんじり祭りで知られ、豪快に走るだんじりを眼下に見下ろす岸和田のベイエリアのシンボル施設として、新しい文化創造と交流の場を提供する施設づくりをめざしました。祭りのエネルギーを象徴するように、高さ19ｍのピロティ「祭りの広場」を建物正面に設けました。大ホールは日本の伝統芸能に重点を置いた多目的ホールで、本花道迫り・すっぽん迫りを持ち、２・３階席が前にせり出した客席と舞台が非常に近いホールです。小ホールはエンドステージから平土間まで自由に転換できる昇降床・自動客席収納機構を採用しています。最上階は会議・交流ゾーンで、岸和田市街を一望できる展望フロアとしています。

（江副敏史）

●建築概要

所在地	岸和田市港緑町111-3
建築主	岸和田市
設計	日建設計大阪
監理	岸和田市港湾振興室・日建設計
施工	大林・南海辰村・才門JV
敷地面積	14,939.20㎡
建築面積	8,727.66㎡
延床面積	27,021.39㎡
構造規模	S・一部SRC、4F 大ホール 1552席、小ホール 284席
工期	1999年９月～2001年10月
オープン	2002年４月（予定）

対談

花田佳明 ＋ 三澤文子 「つながるということ」

渦森台ハウスの共同設計で見えてきたもの

三澤文子さんは、「民家型構法」と呼ぶ独自の木造架構システムを開発し、また「山と都市をつなぐ」産直システムを早くから実践している、いわばシステムの建築家です。花田佳明さんが渦森台ハウス（自邸）の設計を三澤さんといっしょに行いたいと考えたのは、三澤さんのシステムを重視する設計手法に共感したからだといいます。つまり、この共同設計では建築の「かたち」の背後にある「システム」が二人をつなぎ合わせる媒体となりました。

建築家が他者と積極的につながる姿勢が建築をつくるプロセスに新しい可能性を導き、あるいは、「つながる」というキーワードが建築の領域を拡張する契機になるかもしれません。

今回の対談では、渦森台ハウスができあがるプロセスを紹介していただくとともに、共同設計を通して見えてきた「つながる」ことの意味や今後の可能性を話し合っていただきます。ふるってご参加下さい。

花田佳明（はなだ　よしあき）
1956年愛媛県生まれ
1980　東京大学工学部建築学科卒業
1982　同大学院修士課程修了
1982−92　日建設計設計部勤務
1992　神戸山手女子短期大学生活学科専任講師
1996　同助教授
1997　神戸芸術工科大学芸術工学部環境デザイン学科助教授
著書
1997年『再読／日本のモダンアーキテクチャー』（共著、彰国社）
1999　『建築MAP大阪／神戸』（共著、TOTO出版）
2001　『素顔の大建築家たち』（共著、建築資料研究社）
2001　『建築設計資料集成 総合編』（共著、丸善）
主な建築設計
1996年H邸（BH-1）
1997　Y邸（BH-2）
2001　渦森台ハウス

三澤文子（みさわ　ふみこ）
1956年静岡県生まれ
1979　奈良女子大学理学部物理学科卒業
1980　大阪工業技術専門学校建築学科卒業
1982　現代計画研究所
1985　夫・三澤康彦とともにMs建築設計事務所設立
1996　木構造住宅研究所共同設立
2001　岐阜県立森林文化アカデミー教授
作品
天美我堂の家、庵治の家、弓削家など数多くの住宅
1993年大阪府都市景観建築賞奨励賞受賞
著書
1987年『民家型構法の家』（共著、建築資料研究社）
1994　『木造住宅の可能性』（共著、INAX出版）
2000　『住宅に空間力を・住まいかたと住むくふう』（彰国社）

日　時　2001年**10**月**19**日(金)
18:30—21:00
会　場　日本建築協会サロン
＊大阪駅前第３ビル21階
講　師　花田佳明
神戸芸術工科大学助教授
三澤文子
Ms建築設計事務所
定　員　30人＊申込多数の場合は抽選
参加費　会員1,000円、一般 1,500円
学生500円引　※税込
申　込　10月12日(金)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
①催し名：対談／花田十三澤
②氏名
③個人会員・団体会員・一般の別
④職場・学校名
⑤参加証郵送先
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を10月15日(月)に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
TEL.06-6348-0633
FAX.06-6348-0634
〒530-0001
主　催　㈳日本建築協会
事業委員会若い会員の集い小委員会
担当主査：米井寛／東畑建築事務所

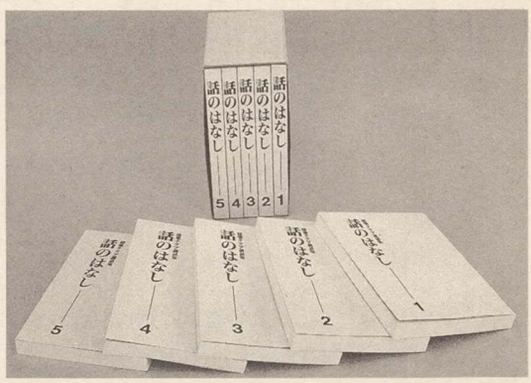
講演記録集 「話のはなし」残部頒布します!

昭和47年6月に発足した「建築クラブ」（日本建築協会会員有志の集まり）は1997年、朝食会の第300回を記念して、講演速記録を集約し、最終的に118回分を5冊1セット（1冊平均約320ページ）の本にして発行いたしました。

「話のはなし」の講話の内容はとても多彩で、「おもしろい話」「貴重なはなし」「裏ばなし」などがいっぱい詰まっています。

1セット・5,000円（消費税別途）でおわけします。ご希望のかたは電話またはFAXでお申し込み下さい。

申込先：日本建築協会事務局
TEL06-6348-0635　FAX06-6348-0634



B6判　5分冊

■元副会長・岡本行善氏の訃報

病気療養中であった(社)日本建築協会の元副会長・岡本行善氏(昭和設計名誉会長)は、８月28日(火)に逝去され、葬儀が８月30日(木)11：30〜13：00に執り行われました。お別れの会は、９月26日(水)三井アーバンホテルで行うことが予定されています。

(社)日本建築協会

読者と織りなす

たて糸よこ糸

「建築と社会」では、読者の声を誌面づくりに役立てるために、皆様の意見と、編集担当者の声を掲載していきます。

■癒し

戦場さながらの職場に身を置いていると、時折、何もかも投げ出して逃げ出したくなることがある。心理学でいうところの逃避行動であろうか。そのようなとき音楽の世界に逃げ込むことにしている。とりわけパイプオルガンの音色が好きである。天地を地響きで揺るがすかのような重低音の響きから、虫の吐息のごとく消え入りそうなか細い音色まで、様々な音の分子が五臓六腑に隙間なくしみわたり、疲れ切った体をリフレッシュさせてくれる。おそらく脳内はワイドレンジのα波で満たされることとなり、辛いこと嫌なことを一時的にしろ忘れさせてくれ、そのような忌まわしいできごとを記憶の縁から遠ざけ、リセットしてくれる。また不思議なもので、暑いときには一服の清涼剤として、寒いときにはポカポカ体を温めてくれる暖炉のような役割も果たしてくれる。

猛暑の続く今年の夏などは、特にこのような「音楽療法」が有効かもしれない。最近はコンサートホールで聴く機会がなかなかなく、専ら電子媒体に頼らざるを得ないが、便利な世の中になったもので、CDやMDによって通勤の電車内でも手軽に自分だけの時空間をつくり出すことができる。しかしながら、やはり音楽はアコースティックな音をライブで聴くに限る。殺人兵器のように容赦なく襲いかかる業務に日々堪えながらも、今日もひたすら音の世界に身を任せている。

（編集委員　S・Y）

■外国人の住まいに思わぬ発見

神戸に住む外国人の住まいを訪ねると、思わぬものを思わぬ使い方をしているのにぶつかりますし、私たちの目には、もう古くて使えない、と決め込んでいるようなものを、こよなく愛して、いろいろに工夫して住んでおられます。

古道具屋で、ただ同然の値段で買ってきたという、紫檀の机（足が一本なく、もう一本もグラグラだったものをご自分で修理されたそうです）などは、今どきのティーテーブルなどよりその姿も美しく、どっしりと落ち着いた風格がありました。

また、ご近所で捨てられた古びたすだれを頂き、横にしてカーテンとして使っていたのは、見た目にも涼しげで、私には思いもよらない使い方でした。

巷では「リ・サイクル」と呼ばれていますが、サイクルに乗せなくて良いものもまだまだあると思います。今までの日本の家や道具、家具を私たちは、もっと誇りを持って大切にすべきだと、つくづく思いました。

（編集委員　R・S）

切り取り線

「建築と社会」読者アンケート

「建築と社会」では、読者の方々のご意見を参考に、充実した誌面づくりをめざしております。今月号で、とくによいと思われた作品、記事、その他についてのご意見をFAXでご送付下さい。
なお、このご意見は、読者と選ぶ第2回『建築と社会賞』の1次選考に反映されます。

□とくによいと思われた作品

よいと思われた理由

□とくによいと思われた記事

よいと思われた理由

□その他、本誌についてのご意見や、取り上げてほしい内容などがありましたらご記入下さい。

2001年9月号

送付先：
㈳日本建築協会
「建築と社会」

FAX 06-6348-0634

お名前 _____

□ご意見は、“たて糸よこ糸”欄に取り上げさせていただくこともありますが、その場合はイニシャルのみを掲載させていただきます。

勤務先 _____　TEL _____

建築と社会 9 2001

ARCHITECTURE AND SOCIETY
JOURNAL OF THE ARCHITECTURAL ASSOCIATION OF JAPAN

1917年創刊　第82集／通巻954号

今月の表紙

デザイン／笹村欽也、今垣内千恵
建築写真／河合止揚

●旧京都中央電話局上分局

設　計／逓信省（吉田鉄郎）
施　工／清水組
竣　工／大正13年1月
所在地／京都市上京区丸太町通河原町東入

●賀茂川からアングルを探していると、丸太町橋の下に7〜8体のホームレスの家を発見。ダンボールや木、ブロックの基礎を用い、かなり本格的である。ランダムに空けられた窓にはセロファンが張られ、その造形はロンシャンの教会のようである。これはひょっとして若手のゲリラ建築展か、それともここの住人はホームレスの建築家なのか？80年前の建築の横には、ダンボールハウスが…。この取り合わせに不思議な感じを抱きつつ京都を後にした。　（河合止揚）

■特集予告
10月号／緊張
11月号／私の空間作法
12月号／第48回青年技術者

編集委員会（平成13年度）

■副会長
佐野　吉彦
奥謝野　久
■編集理事
井上　豊
内田　直樹
岡田　聿之
小島　雄
竹中　統一
畠山　祐治
広原　盛明
松村　慶三
◎宮田　照久
山田　修
■特集小委員会
□計画分科会
★計画系
伊縫　憲幸
梅田　善愛
小浦　久子
鈴木　克彦
田中　直人
紅谷　昇平
細田　浩史
松田奈緒子
松本　正行
吉村　英祐
★建築計画系
江副　敏史
※菅野　忠司
小林　優子
児玉　敬志
佐藤不二男
迫　淳海
桜井　則雄
笹村　欽也
塚本　史郎
所　千夏
野田　隆史
服部　光宏
★インテリア・住宅系
石川　佳子
加藤　力
北浦かほる
小梶　吉隆
佐藤　勝紀
田中　浩介
高野　直樹
※西田　和子
ペリー史子
本山　仁
□構造分科会
大氏　正嗣
金田　興熙
河野　隆史
※木下　隆嗣
佐治　明志
白沢　吉衛
住田　隆二
田中　剛
竹内　秀紀
松村　和夫
向井　洋一
吉川　真次

□設備分科会
梶井　宏修
河井　康人
河津　隆之
※近藤　国夫
近藤　正一
田ノ畑好幸
西岡　道雄
桝井　貴廣
村上幸三郎
谷津　和久
山根　敏和
□施工材料分科会
植田　実
小椎八重猛
竹中　秀文
※太刀川丈爾
能美　敏男
増田　信久
吉田　正友
□法令分科会
伊勢　照男
薄木　三男
衣笠　春幸
黒木　省二
※中島　和也
森下　嘉弘
■作品作風小委員会
△赤木　隆
淺尾　宏
朝倉　一晃
居内　章夫
井上　雅祐
川上比奈子
倉渕奈千子
寺岡　宏治
中村　文紀
林　孝司
前川　治彦
増田　敬彦
増田　俊哉
山田　俊紀
■会員企画小委員会
稲木　裕子
大谷由紀子
河崎　敦子
清水　麗子
△髙岡　伸一
髙田　光雄
辰巳　清一
塚口　明洋
辻川ひとみ
福田　瑞穂
■広告企画小委員会
小幡　義明
小山　昭
斉藤　治久
田渕　博昭
千葉　耕作
中島　猛
△林　一彦
平松　勉
古畑　健一
前田　衛
渡邊　浩文

◎委員長　△副委員長　※幹事

印　刷　2001年8月25日
発　行　2001年9月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
大阪市北区梅田1-1-3-2100
電　話　06-6348-0635
振替口座　00910-9-39975
印刷所　青葉印刷株式会社
日本データネット株式会社
定　価　1200円〔本体価格1143円〕

CONTENTS

特集●　**建築の力　都市の力—建築、都市の再生・転生・創生—**

［総論Ⅰ］　保存再生の根拠を求めて●石田潤一郎 —— 26
［総論Ⅱ］　ドイツの都市と歴史環境の保存●足立裕司 —— 28
［各論Ⅰ］　地域の保存・再生の試み
大阪市／HOPEゾーン事業—「平野郷地区」「住吉大社周辺地区」—●寺尾章 —— 32
西陣地域に見る草の根まちづくり●高木伸人 —— 34
地域の保存・再生の試み—神戸旧居留地地区の事例—●倉橋正己 —— 36
［各論Ⅱ］　建築の再生事例
NTTの所有する近代建築の再生—京都新風館—●河田正／佐藤敦／横田和伸 —— 38
大阪市民のシンボル的建築の保存再生—大阪市中央公会堂—●橋本健治 —— 40
古民家の移築再生の技法●木下龍一 —— 42
舞鶴市赤煉瓦建築物の保存・再生—赤煉瓦倶楽部舞鶴—●馬場英男 —— 44

会告　記念講演会「関西のモダニズム建築を語る」．講演会「吉村行雄—世界の巨匠の名作をいかに撮影し設計に生かすか—」．奈良県立万葉文化館見学会．岸和田市立浪切ホール見学会．対談・花田佳明＋三澤文子「つながるということ」．読者と織りなす“たて糸よこ糸” —— 1

作品作風　ユニバーサル・シティウォーク大阪 —— 6
ホテル近鉄ユニバーサル・シティ —— 9
ホテル京阪ユニバーサル・シティ —— 10
ユニバーサル・シティ和幸ビル —— 11
大阪市環境事業局舞洲工場 —— 12
鹿島市生涯学習センター“エイブル” —— 16
JTBビル —— 18
紀の川大堰管理棟 —— 20

gallery　寺内町及びその周辺の活動●横関正人（寺岡宏治） —— 22

建築の眼　西安・書院門街（創造的復原）●本多昭一　朝比奈さんのブルックナー●坂　雅勝
ゴトン・ロヨンの街づくり●上田信也　屋上探偵団●木村宗光 —— 24

素材と技術が生み出すデザイン　「器」●塩見浩一郎×大氏正嗣 —— 46

法令コーナー　建設リサイクル法「解体業登録制度」●神田孝志 —— 48

構造の頁　高強度コンクリート使用RC部材における曲げひび割れ時引張鉄筋応力ジャンピング問題●六車　熙 —— 49

設備の頁　オープン化システム—BAC netとLonWorks●藤村文雄 —— 52

REPORT　空間性能による精神の可変性を研究してきて●藤井　明 —— 53

information　文化遺産としてのモダニズム建築展in芦屋〈関西のモダニズム20選〉．「日本におけるイタリア2001年」にちなむ展覧会—ATCで—．前沢知子個展．四国・高松に「HONANE」．秘土巡礼展—土はきれい、土は不思議—．2001年児童画展『こんなお店があったらいいな』．A/E/C SYSTEMS JAPAN 2001．「ニューアース2002」（地球環境技術展）出展募集．「建築・設備総合管理技術者」講習会．船場げんき提案募集．近代建築ナイトツアー参加者募る．公開講演会「部屋の空気と私たちの暮らし」．「京の建具文化の魅力を再確認する!」．第10回国際デザイン・コンペティション入賞作品決定．第10回国際デザイン・アオードは三宅一生氏に．ギャルリー・タイセイ展覧会．住宅性能表示基準の講習会 —— 54

月間の動き　平成13年7月分 —— 57

作品風作

全体計画■
日建設計

ユニバーサル・シティウォーク大阪



世界で最もエキサイティングなテーマパーク「ユニバーサル・スタジオ・ジャパン（USJ）」が感動と興奮のなかで３月末オープンした。話題性や社会的反響もたいへん大きく、関西のみならず日本全国から、また海外からもたくさんの人々が訪れている。

「国際集客都市」をめざす大阪にとって大きな目玉施設となり、さらには景気回復の起爆剤となることが大いに期待される。

「ユニバーサル・シティウォーク大阪」はUSJのエントランスとJR新駅「ユニバーサルシティ駅」を結ぶ約250mのプロムナードを構成する店舗、ホテル、オフィスなどからなる複合商業施設である。

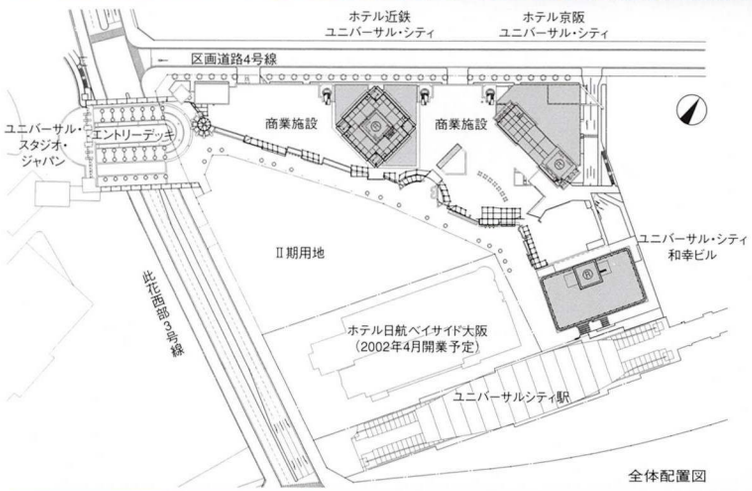
平成10年、公開事業コンペに住友商事を代表とするグループとして応募し、当選した計画案をもとに設計を進め、このたび第１期として複合商業施設がオープンした。

テーマパークと一体となった、ハリウッドの街並みをつくることをコンセプトに、エンターテイメント性の高い施設内容と訪れる人々が楽しさや驚き、感動などを体験できる街とすることを大きなテーマとした。訪れる人々に非日常空間を提供し、日本ではあまり見られなかったカラフルな色彩の外壁や立体看板、アールデコのディテールなどはまさにアメリカンテイストを感じさせるものとして積極的に採用した。そして、街のシンボルタワーとして独自のテーマ性をもった高層のオフィシャルホテル２棟とオフィス棟が本年７月オープンし、まさに24時間楽しさあふれる街となった。

ハリウッド、フロリダのシティウォークを参考としながら、またユニバーサル・スタジオ社のアドバイスを受け、大阪独自のシティウォークとすることに心がけた。

諸事情もあり、第一期工事のみのオープンとなったが、今後の状況をみながら早期の第二期工事の着手が実現するものと期待している。

（野田泰弘／日建設計）



全体配置図

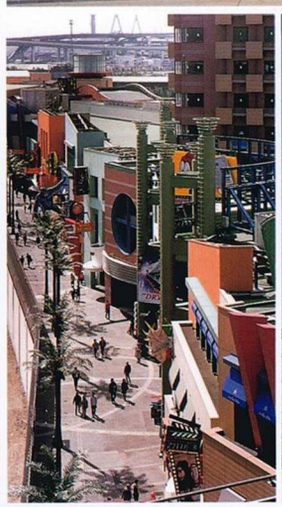


付近見取図

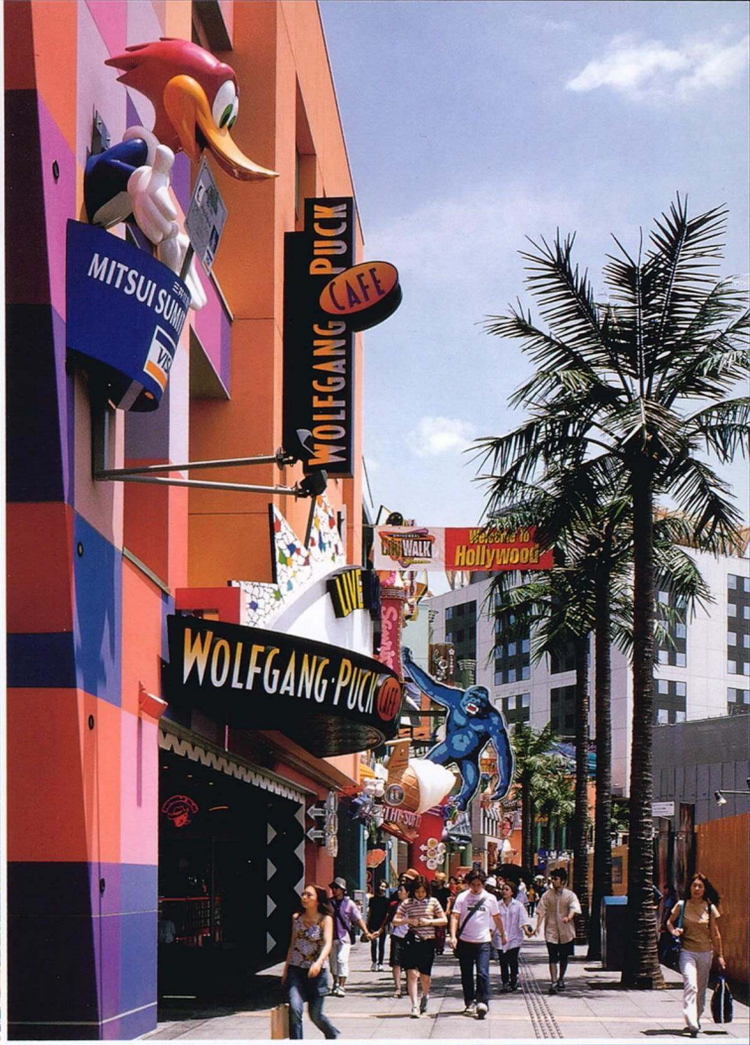


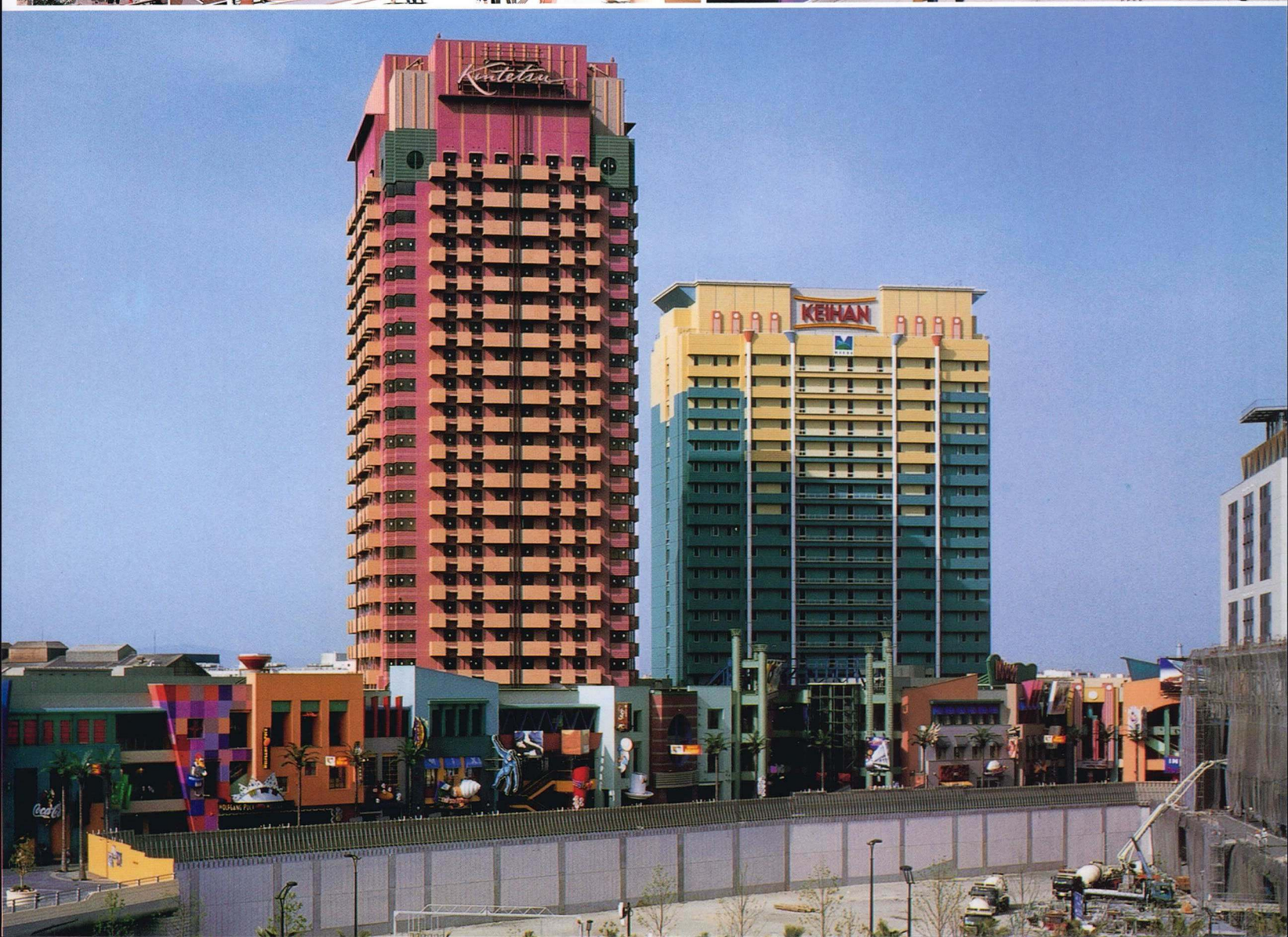
所 在 地 ——大阪市此花区島屋6-40-1
敷地面積 ——17,570.07㎡
建築面積 ——14,636.66㎡
延床面積 ——94,059.09㎡
最 寄 駅 ——JRユニバーサルシティ駅
撮　　影 ——柄松　稔
永峰克文／伸和（航空写真のみ）



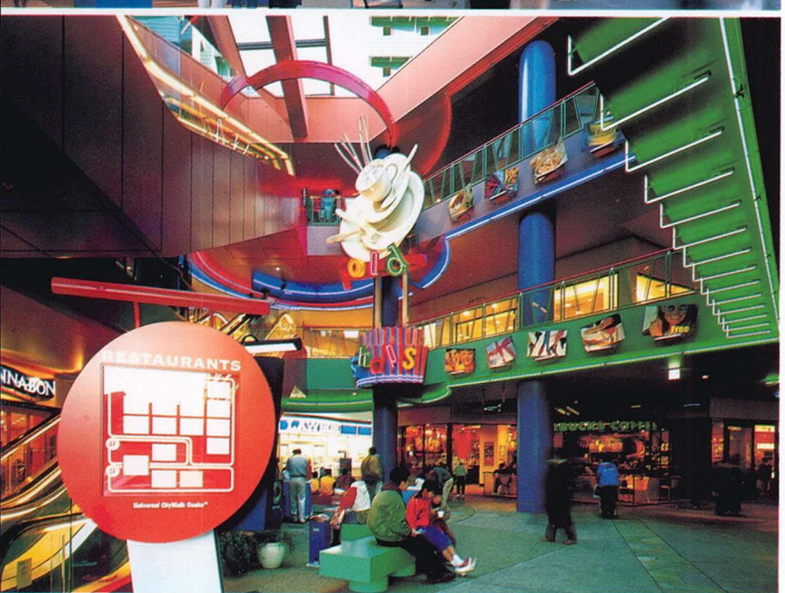



WALK


WOLFGANG PUCK
CAFE
WOLFGANG·PUCK
Hollywood


Kintetsu
KEIHAN





作品
作風

設計■
日建設計・大林組

監理■
日建設計

協力■
環境デザイン　乃村工藝社

施工■
大林組・戸田建設・竹中工務店・前田建設工業
大日本土木・熊谷組・錢高組・住友建設共同企業体

ユニバーサル・シティウォーク大阪
（商業施設）

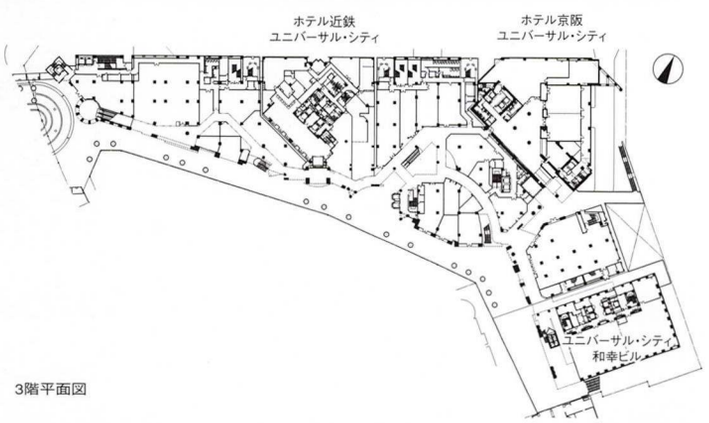
ユニバーサル・シティウォーク大阪の商業施設はJRユニバーサルシティ駅からUSJのエントランスへ至るウォークをメインレベルとして展開され、テーマ性をもつレストランや個性的な物販店舗で構成されている。

USJのオープンに先立ち、本年３月、ホテル・オフィス棟を除く商業店舗部分がオープンした。

USJへの門前町として、ハリウッドの街並みをイメージし、これから訪れるUSJへの期待感を盛り上げ、帰宅する人々にはUSJでの楽しさの余韻を感じさせると共に、ここに来ただけでもハリウッドの楽しさが味わうことのできるようエンターテイメント性あふれる空間づくりと演出につとめた。

ウォークに面するファサードは３層の商業施設でありながら個々の建物の集合体としてまとめ、ハリウッドのシティウォークで使用されているカラフルな色彩を施し、動きのあるサインやネオン、グラフィック、立体看板などを設け、また全体として商業環境調整を行いながらもショップフロントは店舗側設計とし、それぞれの店舗の個性ができる限り出せるよう誘導した。

（萬浪富弘・菊田靖久/日建設計）



3階平面図

建築面積 —— 9,240.53㎡
延床面積 ——34,377.20㎡
構造規模 ——S、一部SRC、RC、5F、P1
工　　期 ——1999年12月～2001年2月
撮　　影 ——柄松　稔

電気設備工事：きんでん・日本コムシスJV
空調設備工事：きんでん・日本コムシスJV
衛生設備工事：きんでん・日本コムシスJV
昇降機設備工事：三菱電機・松下電器産業



作品風

設計・監理■
竹中工務店

施工■
竹中工務店・大林組・大日本土木共同企業体

ホテル近鉄ユニバーサル・シティ

ホテル近鉄ユニバーサル・シティは、USJに最も近いホテルとして建設された。周辺は祝祭性と非日常性に溢れた異環境を創出することが強く意図されている。

ホテル内外のデザインは「余韻と予兆」と言うテーマに貫かれている。パークのエキサイティングな体験の余韻とホテル内での新しい体験への予兆が訪れる人々の中で絶えず併存するように多彩なシーンが展開されることを目標とした。

6色のタイルで覆われたタワーは、アールデコの華やかさを力強く現代的に翻案し、エリアの象徴となることを目指した。

ロビーは3層吹抜けのリニアな構成とし、ゲストが一歩足を踏入れた瞬間に全く異なったムードに包み込まれるよう意図された。客室は、4色をテーマカラーとし大胆な色彩構成を心がけ、他方エレベーターと浴室は一切の色を排除した透明な世界とした。

また、建築主からの命題であるローコストオペレーションに対し、個別空調方式の採用等によりランニングコストの低減を実現している。

連日大勢の人々で賑わうそのエリアの中で、ホテルが絶えず余韻と予兆を感じさせる特別な場所として生長し続けることを深く念じたい。

（薄田　学・納見　聡／竹中工務店）



3階平面図　1：1000

建築面積 —— 1,597.85㎡
延床面積 ——23,995.34㎡
構造規模 ——S、25F、P1
工　　期 ——1999年12月～2001年7月
撮　　影 ——古川泰造／竹中工務店

設備工事：近畿工業
昇降機設備工事：日本オーチス・エレベータ













作品
作風

設計■
日建設計・前田建設工業

監理・施工■
前田建設工業

ホテル京阪ユニバーサル・シティ

当ホテルはUSJ来場者のファミリー客・団体客をメインに集客する宿泊特化型のアーバンリゾートホテルである。
外観イメージは1930年代のハリウッドのアール・デコをデザインモチーフとしている。色彩は海の色をイメージしたブルーグリーンと、やわらかい光の色をイメージしたイエローを主体で構成し、すべてやわらかなパステルカラーでまとめた。
内部はハリウッドをテーマにした遊び心のある空間を構築した。
ロビーのテーマは「HOLLYWOOD＆聖林」。HOLLYWOODはHOLY（聖なる）・WOOD（林）・LEGEND（伝説）の３つの言葉が融合して生まれたという思いを込めて「ハリウッドの伝説」を表現。内装材は「聖林」をイメージし、清潔感の漂う木質調の壁を採用した。
客室のテーマは「Over The Rainbow」。 虹の彼方「ハリウッドの国」にある客室をイメージ。エレベーターから、客室に至るまでの内装をストーリー展開し、宿泊客は「ハリウッドの国」を体験する。
当ホテルが、子供の心をもった大人達と子供達に、想い出という名の映画づくりの場となることを願っている。

（野田泰弘・甲　勝之／日建設計）



3階平面図　1：1000

建築面積 —— 1,721.09㎡
延床面積 ——17,252.71㎡
構造規模 ——S、一部SRC、20F、P2
工　　期 ——1999年12月～2001年6月
撮　　影 ——山崎浩治・野口兼史／伸和

電気設備工事：きんでん
空調設備工事：高砂熱学工業
衛生設備工事：高砂熱学工業
昇降機設備工事：三菱電機

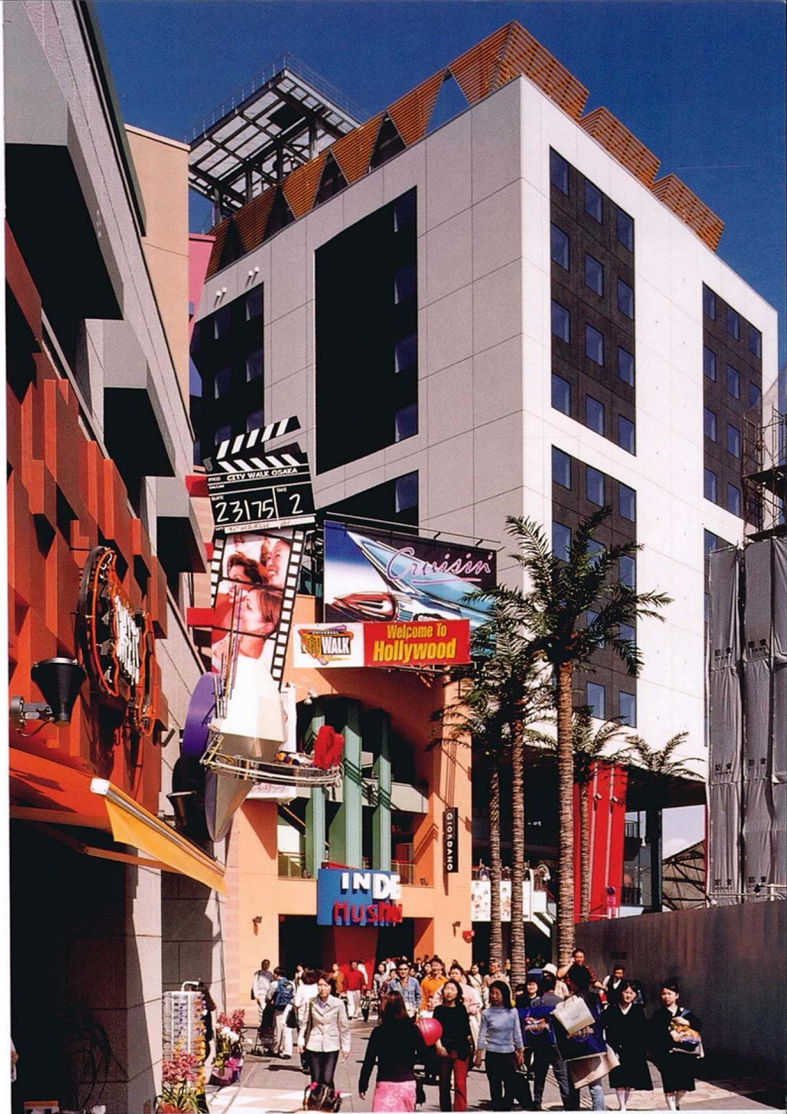
作品風作

設計・監理■
日建設計

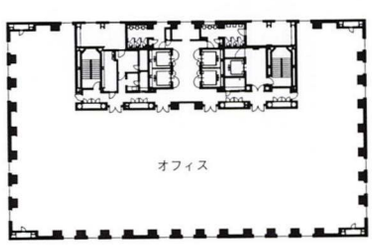
施工■
大成建設

ユニバーサル・シティ和幸ビル

USJでのひと時に興じたヴィジターは帰りがけ、シティウォークで「もうひとつのハリウッド」に興じ、最後にこのビルディングを訪れて一日の思い出を完結させる。トレンディで独創性の高い商業ゾーンの一翼を担いつつ、高い基本性能をもったオフィスでなければならない。そしてでき得るなら、ここで働く人々にとって、心躍るようなものを感じていただける建築を創り出せれば、と考えた。
モノクローム映画に想いを馳せ、Black & White のセラミックタイルをグラフィカルにコーディネイトし、、クールでダンディな表情を作る。そしてシティウォークに連続する３層をかかげあげたピロッティの独立柱には、艶やかなRedを持ちこんだ。ハリウッド女優の真っ赤なハイヒールをイメージして？マリリン・モンロー！？オーヴァーヘッド・スクリーンのYellowはブロンドヘアー！！
ビル足元に、関係したメンバーのネームプレイトがインレイドされた。私達の名前も刻まれている。素晴らしいクライアントの皆様に恵まれ、パワフルなチームワークで一気に成し得た仕事であった。あとは訪れる方々が、この建築の歴史を紡いでくださることと信じている。
（吉田伸章・岡田耕治／日建設計）







基準階平面図　1：1000

建築面積 —— 2,077.19㎡
延床面積 ——18,433.84㎡
構造規模 ——S、一部SRC、13F、P2
工　　期 ——1999年12月～2001年3月
撮　　影 ——永峰克文／伸和

電気設備工事：きんでん・日本コムシス・住友電設・近畿工業
空調設備工事：ダイダン・三機工業・日比谷総合設備
衛生設備工事：大成設備・宮田工業
昇降機設備工事：日本オーチス・エレベータ





作品
作風

設計・監理■
大阪市住宅局営繕部
昭和設計
外観デザイン：フリーデンスライヒ・フンデルトヴァッサー

施工■
建築：竹中・大成・錢高特定建設工事共同企業体

大阪市環境事業局舞洲工場

本工場のサイトである舞洲においては、市制100周年記念事業のひとつとして、130ヘクタールの敷地を活用した市民の健康増進や余暇活動のためのスポーツアイランドとして、大規模なスポーツ・レクリエーション施設等の整備が進められている。

舞洲工場は、これまでの焼却工場以上に環境に配慮して計画され、最新技術導入による公害防除設備はもちろん、エネルギー回収による余熱利用を行っている。建築においては、トップライトによる自然採光と散水やトイレ洗浄水に雨水の再利用を行っている。

環境への配慮は機能面のみならず、デザイン面においても考慮され、環境保護建築プロジェクトの第一人者であるウィーン幻想派の巨匠フリーデンスライヒ・フンデルトヴァッサー氏を起用した。

従来のごみ焼却場を一新するデザインには、自然との共生をテーマに「自然界に直線や同一物はない」というフンデルトヴァッサー氏の言葉通り、曲線を多様している。更に建築は屋上や壁面にさえ木々を植えるなどして多くの緑で囲まれている。壁面に立ち上がる赤と黄色のストライプは燃焼のプロセスを象徴し、建物内で都市の廃棄物を燃やす炎を表現している。また煙突は、頂部にユニークな形をした黄金色の球形構造物を置き、側面には張り出したマウンテンビレッジと呼ぶ小舎をランダムに設けており、ウェーブ状に盛り上がった石畳の大地から伸びあがる６本のセラミック製飾り柱に支えられダイナミックな表現となっている。本工場は技術・エコロジー・芸術との融和のシンボルであり、大阪の人々にとって注目すべき新しいランドマークを作り出している。

（畠中喜代一／昭和設計）



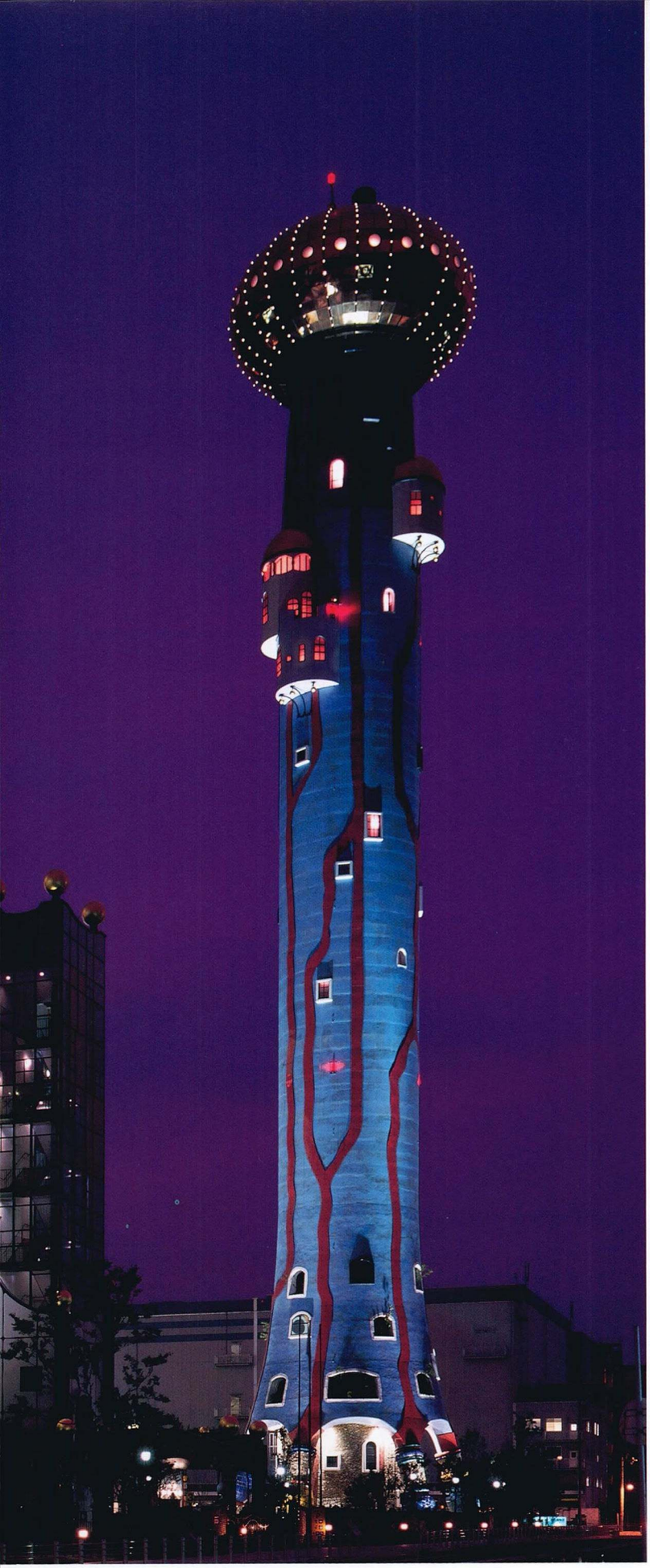
配置図　1：600

所 在 地 ——大阪市此花区北港白津1-1
敷地面積 ——33,017.08㎡
建築面積 ——16,774.20㎡
延床面積 ——56,958.66㎡
工　　期 ——1997年3月～2001年4月
最 寄 駅 ——JRゆめ咲線桜島駅からバス5分、此花大橋西詰下車
撮　　影 ——河合止揚

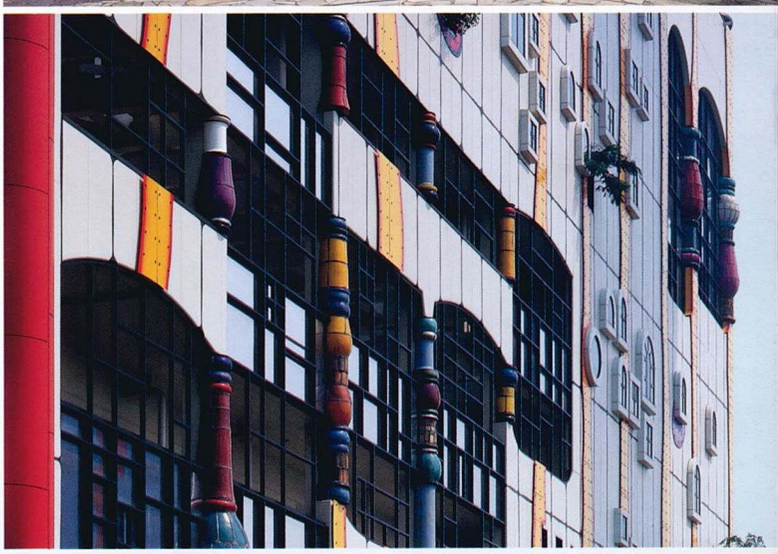














国道からのアプローチ

▼キャノピーディテール



▼光庭見上



▼南側正面外観



作品風

設計・監理■
安井建築設計事務所

施工■
建築：前田建設工業・栗山組建設共同企業体
機械：朝日工業・兼茂特定建設工事共同企業体
電気：九電工・佐電工電気設備共同企業体

鹿島市生涯学習センター”エイブル”

鹿島市は佐賀県西南部に位置し、古きよき歴史を今日まで有す地である。祐徳稲荷や鹿島城址の遺構があり多良山系と有明海を望む自然にも恵まれ、固有の歴史的文化と風土を持つ中核都市である。
豊かな人間性を育み創造性を培う市民交流の場、市民の健全な生活を支援する場を旨として建設されたこの建物は、図書館、多目的ホール、情報センターと保健センターからなる複合施設である。
計画は、隣接する市庁舎・市民会館・福祉会館からなるシビックゾーン全体の良好な環境形成、西側の河川景観と河岸地特有の高低差ある地形を積極的に活かす構成づくり、中心市街地への繋がりとともに交通喧騒をもたらす北側国道との接続処理、そして周辺の住宅地への配慮を課題として行った。
建物は、外部との繋がり・内部の様々な利用形態を受け入れられるよう、平面形・断面形を徹底して整理・統合した。各施設を用途・管理区分毎のブロックに分節し、それらを結び付けるコアとなるエントランスホールは市民を招き入れる大広間となるよう３層吹抜の空間とし、全体として施設相互の一体感やコミュニケーションに有効な空間づくりとしている。また、建物の表情をつくる素材は、おおらかさや骨太さをもって街と結びつくかたちが当地の生涯学習の場として相応しいと考え、スチール・無釉タイル・コンクリート打放・木に絞りそれらが持つ特性・質感が活きる箇所・形態を割り当て、親しみある素朴さや飾らない端正さのあるものとしている。これらは素直で目的に合い、施設内外に立ち現れる人々の様々なアクティビィティーが主役になるような建築を目指したものである。

（小林直紀／安井建築設計事務所）



2階平面図　1：1600

所 在 地 ――佐賀県鹿島市大字納富分2700-1
敷地面積 ――5,759.43㎡
建築面積 ――3,028.12㎡
延床面積 ――5,206.37㎡
構造規模 ――RC、3F
工　　期 ――1999年6月～2000年12月
最 寄 駅 ――JR長崎本線・肥前鹿島駅
撮　　影 ――寺崎　健／エスエス九州


エントランスホール


多目的ホール


図書館入口廻り


▼ルーフテラス



作品風作

設計・監理■
竹中工務店

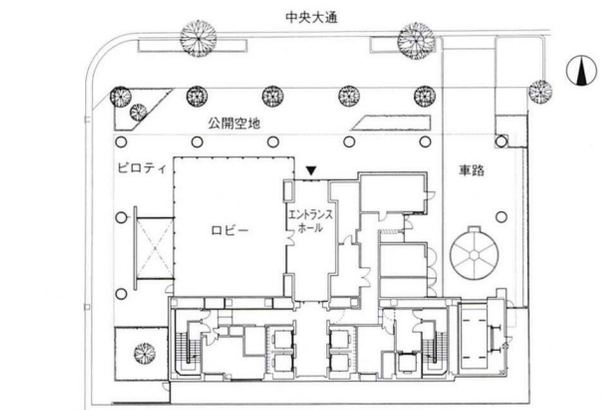
施工■
竹中工務店

JTBビル

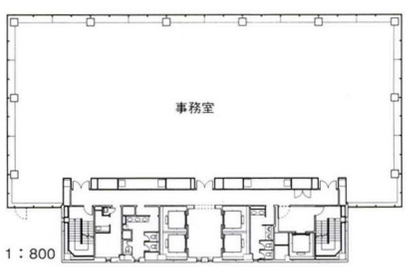
西日本の新たな拠点としてJTB及び関連各社が入居する事務所ビルです。片側コアの平面形＋ガラスカーテンウォールのシンプルな構成ですが、長寿命で安全性の高い建築であるために、更新が可能な小型ブレースによる制震構造、エネルギー消費とCO_2排出を抑える全蓄熱空調システムや加圧防排煙などを備えています。

外装はLow-eペアガラスの透明感とアルミ合金発色材の質感を生かしたモノトーンな色調でまとめながら、淡々と繰り返される水平材を楔型の断面にして全体のアクセントにしています。北向きのファサードは船場地区のなかでは比較的間口も広く、存在感のある落ち着いた外観になりました。

上層階の単純な形態とは対照的に、１階には街角に大きく開く２層吹抜、ガラス張りの打合せロビーを設けています。前面の公開空地やピロティとともに、過密気味な周囲の街並みにまとまったスペースと視覚的な「抜け」を形成して、歩道レベルの環境を大きく変化させています。ビル内外の接点となり、メッセージ交換の場として活用されるよう願っています。　（河﨑敦子／竹中工務店）



１階平面図　１：800



基準階平面図　１：800

所 在 地 ―― 大阪市中央区久太郎町2-1-25
敷地面積 ―― 1,503.31㎡
建築面積 ―― 1,602.89㎡
延床面積 ――16,187.39㎡
構造規模 ――SRC、S、B3F、13F、P1F
工　　期 ――1999年２月～2001年２月
最 寄 駅 ―― 大阪市営地下鉄堺筋線・堺筋本町駅
撮　　影 ――松村芳治















作品
作風

基本構想■
近畿地方整備局
東京建設コンサルタント
クリエイティブフォーラム

基本設計・実施設計・監理■
近畿地方整備局、小西設計

施工■
大林組

紀の川大堰管理棟

紀の川は、大台ヶ原を水源に幹線流路延長約136kmの一級河川で、流域は古代飛鳥人に愛された吉野川、弘法大師の高野発見にちなむ丹生川をはじめ、名作文学の舞台になるなど、長い歴史や奥深い文化を持つ。

紀の川大堰は、河口から6.2kmの地点、紀の川が緩やかに湾曲する地点に河川を横断する形の堰長542m、堰高7.6m、径門数７門の全国でも有数の大規模可動堰である。

管理棟は、大堰の管理運用のための操作室・機械室・無線室・発電室などの事務所、見学者のための展示ホール・展望スペース、保守点検のためのゲート庫（別棟）などで構成され、大堰が目視確認できる左岸堤防上に建設されている。

周辺の堤内地は、古い集落と農地や新興住宅地が混在し、町並み景観が混乱しつつあるが、集落全体のスカイラインは堤防高に達しておらず、和泉山脈や紀伊山地が遠望できる伸びやかな空間をもっている。堤防上に建設される管理棟は、低いスカイラインの町並み景観の中に、唐突にそびえることになり、建物の高さを感じさせない外観づくりが課題であった。また、大堰全体の統一的景観形成を目指して、「空と水が出会う堰」という景観形成コンセプトのもとに、堰柱やゲート、操作室など大堰の長大構造物と一体の施設となるように、環境色彩データに基づく外観色彩、金属製のアール屋根、周囲の景色を映し込むガラス壁、壁面に表情をつけるグリットなど、デザインモチーフを共通にしている。

管理棟内部については、堰の監視を重視し操作室、事務室は２階に設け、展示室は一般解放する為、バリアフリーに配慮の上１階に設けた。



1階平面図　1：500

所 在 地 ―― 和歌山県和歌山市 有本地先
敷地面積 ――6654.26㎡
建築面積 ――1211.64㎡
延床面積 ――2081.08㎡
構造規模 ――RC、一部S、2F
工　　期 ――2000年4月～2001年3月
最 寄 駅 ――JR阪和線・六十谷駅
撮　　影 ――河合止揚、伸和（右頁下）

左頁上より：正面外観／エントランス（左下）／展望スペースより紀の川を望む
右頁上より：北側ガラス壁／可動堰より建物を望む／玄関ホール







gallery

寺内町及びその周辺の活動

設計

横関正人

富田林市寺内町は戦国時代に自治都市として発展し、周囲には土居や堀、町の出入口は4カ所のみと、城塞の様に町は守られていた。辻の各所ではあて曲げと呼ばれる半間程ずらした道があり、敵の侵入を防ぐ工夫が見られる。重文旧杉山家住宅、府指定仲村家を初めとする町家や三階蔵など、歴史的な景観を今に伝えている。

昭和62年「富田林寺内町地区町並み保全要綱」が施行され、97年10月末大阪府下ではじめて「重要伝統的建造物群保存地区」に指定された。

この重伝建地区で、外部は町並みになじませながら現代に対応した住まい方を提案した住宅の設計を行った。景観保全の手法を積極的にとりこみつつも、内部の開放的で明るい空間は重伝建地区でも新しい住み方ができるという評価を得ることができた。

この住宅の設計を進めていく中で、市や地元の「建物の保存だけでなく、まちで生活する人、訪れる人に息づいたまちにしていこう」という姿勢に共感し、今後の寺内町とその周辺地域の活性化に建築家の立場で支援していくこととなり、蔵を改装したギャラリー・本町通のゲート・100年前の町屋を改修した陶芸工房飛鳥の設計を行った。





(※)

横関正人（よこぜきまさと）
1962　兵庫県生まれ
1984　福井工業大学工学部建設工学科卒
　　（有）コンコード建築設計事務所
1991　横関正人建築研究所設立
1994　（有）NEO GEO設立

撮　　影―絹巻　豊（※印以外）
企画編集―寺岡宏治（作品作風小委員会）



陶芸工房飛鳥

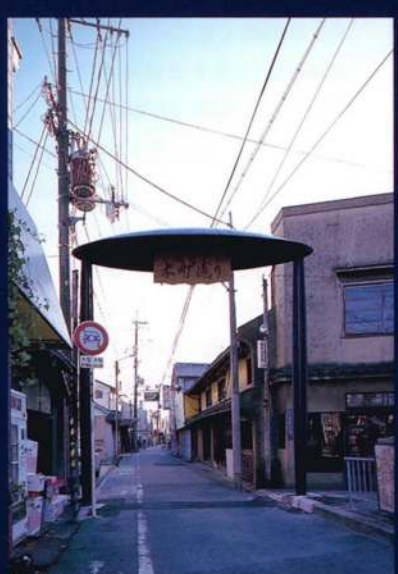


寺内町の家





ギャラリー蔵・天下一



本町通商店街ゲート

ARCHITECT's EYE

西安・書院門街（創造的復原）

本多　昭一

中国の古都西安（かつての長安）の中心部は明代の城壁に囲まれている。

南門（明徳門）を入ると中央北向きの大通りが南大街で、正面に鐘楼の建物が見える。南門を入ってすぐ右手（東向き）が書院門街である。入口に唐華塔という古い仏塔があり、中間には関中書院という昔の学校、さらに奥には有名な碑林博物館があるという伝統的・文化的街路である。ここは十年ほど前に明代の建築デザインを用いて建設された商店街で、書画・骨董・文具などの店が多い。日本でいう街並復原とはちょっと違う。ここに昔存在した街並を忠実に復原したのではなく、明・清代の建築様式を用いて、いわば創作した街並である。事業以前はスラム的状態であったが、場所柄むかしから書画・文具を製造販売する職人が住んでいた。その人々の住宅改善の事業としてRC３～４階建で建設された街である。戦前からの住民が明代様式の建物に住み、営業しているが、観光客も多く商売も繁盛しているようである。「文化的でなく商業的過ぎる雰囲気になってしまった」と中国の若手建築家の一人は嘆いていたが、住民の住環境が改善され生計も立って、生き生きとしている点で案外成功しているように思えた。

街並（外観）は既に、明代の城壁に馴染んできている。

京都府立大学人間環境学部環境デザイン学科教授

朝比奈さんのブルックナー

坂　　雅勝

今年２月には、ブルックナーの交響曲第８番、５月には同７番と連続して朝比奈隆指揮大阪フィルの演奏会が開かれた。また、11月には同３番が演奏される予定だ。

これまでのいずれの公演も、大入り満員。定番の名曲に、いまやブルックナーとベートーベンを演じて世界一の定評ある巨匠と熱演のあまり時にオーバーヒートするオーケストラの組み合わせとあって聴衆は常に満足。

音楽評論家の宇野功芳さんの受け売りをすれば、ドイツで３大Bといえばバッハ・ベートーベン・ブラームス、大阪は朝比奈さんのブルックナー・ベートーベンと近鉄バッファローズだ。

ところで、ブルックナーの交響曲は、大作とはいえ、１時間半ほどで演奏会は終了する。

夜はまだ早いので、中之島の遊歩道を散策して家路につくもよし、堂島川の川風に吹かれながらオープンカフェでビールを飲むもよし。

これは大阪に住む者にとって大いなる楽しみの一つであるが、さらに都心に居住していれば、もっと多様な時間が費やせる。

既存の様々な都市施設を最大限に活用した新たな都心居住のあり方が今求められている。

大阪市住宅局理事

ゴトン・ロヨンの街づくり

上田　信也

先日、数年振りにインドネシアの友人M.D.君から手紙を受取った。建築家の彼は、大事務所のトップの職やジャカルタ市の都市デザインパネルの長を務め、加えて本来の任務であるITB=バンドン工科大学にて教鞭をとるという超多忙の身である。いや、正確には「であった」。

1997年のアジア一円を襲った通貨危機を迎える迄は、この南国では高層ビルの建設ブームのため、我々外国人を含め建築関係者は極めて忙しく、デザイン審査に当る彼もバンドンとジャカルタを往来する日々を送っていた。P.RudolfやSOMに引き続き、I.M.Peiの超高層が着工したばかりの頃、突然起ったルピアの暴落、スハルト体制の崩壊、華人資本の引揚げなど瞬時の社会変動により、建築活動は急停止を余儀無くされ、その結果、無残な鉄骨風景と彼の十分な研究時間が生まれた。

この皮肉な組合せに思案しつつ、高原の大学都市バンドンに今は腰を落ちつける彼は、ジャワ社会の底流にあるゴトン・ロヨン=相互扶助の精神によるコミュニティづくりの構想を練るという。思えばこの地は、独立の父スカルノにITB建築教育を授けたり、今尚その意義の失われていない第一回アジアアフリカ会議を開くなど、進取の気性に富んでいるところである。M.D.君とかつて共に学んだバークリーヒルの風景に妙に重なる。

大建設計取締役京都事務所長

屋上探偵団

木村　宗光

ある研究会が13年程前に始まった。そこでは建築、住宅の未利用空間である屋上をどのように使えば良いのか、その利用方法を研究し普及させようと言うのである。その手始めに屋上の利用実態を調査する屋上探偵団を結成した。首都圏の事務所、商業施設、集合住宅の屋上の調査をしたのである。残念ながらその利用実態は極めてお粗末なものが多かった。

最近、東京晴海の再開発で事務所、商業施設、集合住宅等のコンプレックスが完成し、それを見る機会があった。それらを繋ぐ低層棟の屋上は緑化がされ遊歩道があり、そこは地上と変わらない光景が展開していた。ビルの屋上もずい分変わってきたものである。設備機械でいっぱいであったがそれらを隠し美観上の配慮をしたり、建築的空間として利用するようになってきた。集合住宅にあってはもともと屋上を利用する事は少なく、最近になり屋上緑化や庭園を（マンションのセールスポイントとして）提案するようになってきた。戸建て住宅分野にあっても同様で今後より廉価なシステムの開発が必要である。

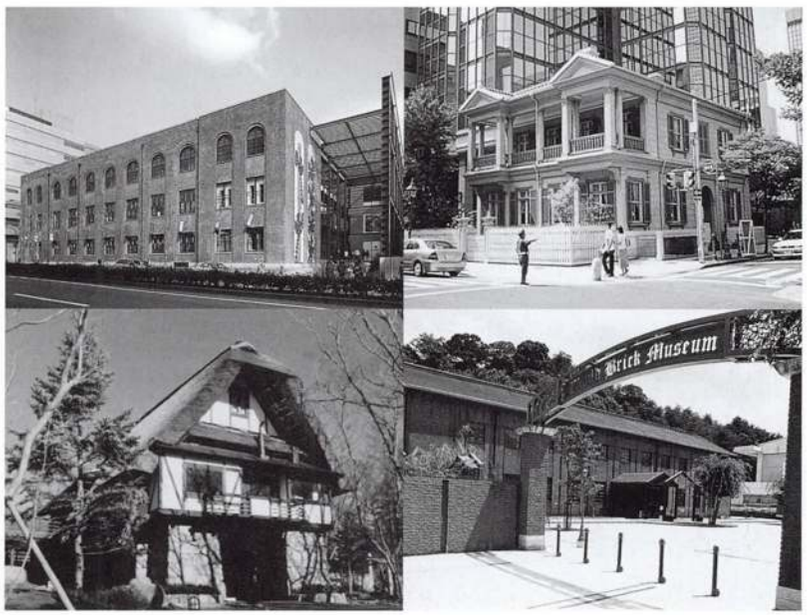
屋上緑化は屋根面の熱の輻射を低減させると共に断熱性能が向上し、建物の省エネルギー性に貢献する優れものである。これらはヒートアイランド化の防止とCO_2の削減になり、ひいては地球温暖化防止に繋がる。今年の夏の猛暑はこの問題を改めて考えさせてくれた。

大和ハウス工業㈱取締役

建築の眼

建築の力　都市の力

建築、都市の再生・転生・創生



総論Ⅰ．保存再生の根拠を求めて
石田　潤一郎
総論Ⅱ．ドイツの都市と歴史環境の保存
足立　裕司
各論Ⅰ．地域の保存・再生の試み
大阪市／HOPEゾーン事業―「平野郷地区」「住吉大社周辺地区」―
寺尾　章
西陣地域に見る草の根まちづくり
高木　伸人
地域の保存・再生の試み―神戸旧居留地地区の事例―
倉橋　正己
各論Ⅱ．建築の再生事例
NTTの所有する近代建築の再生―京都新風館―
河田　正／佐藤　敦、横田　和伸
大阪市民のシンボル的建築の保存再生―大阪市中央公会堂―
橋本　健治
古民家の移築再生の技法
木下　龍一
舞鶴市赤煉瓦建築物の保存・再生―赤煉瓦倶楽部・舞鶴―
馬場　英男

企画　建築系分科会

保存再生の根拠を求めて

石田潤一郎
京都工芸繊維大学教授

保存再生の難しさ

建築史の分野に足をつっこんでから20年以上たつ。今日まで幾度も、歴史的建造物、あるいはそれによってつくられている街区が消滅する場面に直面させられた。そのうちのいくつかに対しては、それを保存し、再生を図るよう要望もした。そのたびに、なんと困難なことを行なっているのだろう、という感慨にとらわれる。要望がまったく聞き入れられないからではない（その場合が多いのはたしかだが）。わたしたちの意向がある程度かなえられたときにも、幸運に恵まれた特殊解にすぎないという印象を持たされる。つまり、原理的に無理なことを企てているのではないか、という罪障感に近い感覚がつきまとうのである。

村野藤吾は1933年に『日本における折衷主義建築の功禍』という講演を行なった。村野はそこで、彼自身否定したいと考えている様式折衷主義建築について、それにはなんら否定すべき点がないということを証明してみせた。わたしもここで、日本におけるスクラップ・アンド・ビルドには「批難をなし得る余地は無いやうに考へられます」とまず言ってみよう。そのうえで「好意ある結論を投げ掛けてきましたけれども、この結論に対して私自身非常な不満を懐いております」と結ぶための論拠を確保したいと思うのだ。

たとえば、このような意見がある。「さまざまな種類の建物が乱雑に立ち並んでいる町よりは、どれもよく似た建物が整然と並んでいる町のほうがきれいに見えるかもしれない。……しかしそのような美的価値は、財産所有者が自分の欲する仕方で財産を使えないという、目に見えない負担によってまかなわれているのである」（森村進『自由はどこまで可能か』（講談社））。こうした見解を下品だといって済ませられる人は、容積率800パーセントの敷地にたつ3階建ての洋館の保存を求める困難を知らない人である。デベロッパーが得られる（と信じている）数百億円の利益を目減りさせる論拠は、実際問題、簡単に見つけられるものではない。もう少し穏やかな例を挙げると、袖看板が都市景観を阻害していることは自明である。しかし、新参の店舗にとっては、店の存在を知らせる看板を規制されることは、死活にかかわる不公平である。宣伝の自由がもたらす商業活動の健全さよりも景観規制が優先すべきかどうかは自明とはいえない。「自由」が問題になるのは経済活動にかかわる局面だけでない。明敏な読者はお気づきと思うが、設計者もまた、あたうかぎり完全な自由を求める。建築家は風致条例に対して必ずこういう。「何の根拠があってこんな規制を受けるのか」。そう、たしかに庇の出が25センチではダメで、30センチならOKといった規則には本質的な根拠はないのである。もちろん、土地の高度利用で儲かるというのは幻想だといってデベロッパーに翻意を促すことはできる。屋根のかたちを決められても、ほかにデザインの余地はいくらもあるじゃないかといって建築家を説得することもできる。しかし、それでは本質に触れない。自分の占有する空間は自由に使えるべきだ、設計は依頼を受けた建築家が自由に実現すべきだ、ほかの人間がそれを妨げるいかなる理由もない——という近代社会の基底にある観念を揺るがしえないからだ。

都市の「近代化」と「個人」の自由

こうした発想が、建築・都市の領域において明瞭になってきたのは、近代、というよりも戦後になってからであろう。京都で明治維新以降、主要街路が拡幅されたことは3度ある。明治末の三大事業、昭和初期の都市計画法に基づく整備、昭和20年の防火線確保のための強制疎開である。前2者によって広げられた街路の沿線は、地域的な差はあるにせよ、京町家が連坦する従来と変わらない町並みが再生した。その理由は次のように考えられる。一つには在来木造が



心斎橋そごう——なぜ残すべきか、いかに残すべきか


町家の脇にそそり立つマンション群

性能面でも価格面でも最もすぐれていて(或いは確実に供給されて)、他の構法が選択されにくいという技術的条件があった。二つには土地の高度利用を促すような、或いは不燃化を促すような社会的条件が存在しなかった。三つ目には商行為や住生活が町家という枠に収まっていて、他が求められないという生活様式における固定性があった。そして、これらがもたらす安定的な都市・建築像が成立していた。そこからはみ出した存在、たとえばベーレンス張りのセセッションで登場した西陣織物館は「マッチ箱」と呼ばれてバカにされた。

これに対して、戦時中に広げられた御池・堀川・五条の各通りが戦後復興したときには、木造モルタル塗り2階建ての民家か鉄筋コンクリート造の中層オフィスビルで埋まる。京町家の技術は建築基準法によって否定され、都市化は高層化をうながし、生活様式は町家を置き去りにして「近代化」していく。戦前に存在した条件は、制約もインセンティブもともに消滅していたのである。

戦後の社会は、歴史的蓄積を継承させようとする、あるいはせざるをえなくなる諸条件を懸命に薄弱にしてきたといえる。それが成し遂げられるにつれて、「個人」の絶対的自由が空間として具現化しはじめる。そして、そのことの実利的恩恵をわたしたちはこうむってきたといわざるをえない。日本の都市がスクラップ・アンド・ビルドを繰り返すようになったことで、建設業界はうるおい、建築学科は拡充された。わたしのように建築史を専門にしていてもメシが食えるのはひとえにこのおかげである。永遠のフロー都市は、まったく自由の実現のためにも、そしてわたしたちの職業のためにも、むしろ望ましい状態ではないのだろうか。建設廃棄物問題？　でも、コンクリートや鉄筋の再利用技術が開発されているではないか。

空間の同一性の保持

――と書いてきたが、こんな結論に納得できるものではない。しかし、相手も手強いのである。そこで、経済学者として景観を問題にしている松原隆一郎氏の議論を援用しよう。氏は、自己所有権の絶対性が景観を破壊していることを重視し、景観を守るために、この近代社会の原則が景観には完全には適用できないことを証明しようとしている。わたしなりに敷衍するとこうである。「自分のものは意のままに処分してよい」という原理はたしかに確立しているが、そこでは「わたし」が時間を通じて同一性を保持していることが条件付けられている。つまり、自分を奴隷として売るといった行為は別人といえるほどの変化を与えるから認められないのである。とすると、「自宅の外観などは意のままに処分して奇抜なものとするならば、それによって構成される景観も激変する。一方、「わたし」の同一性や身体感覚は「わたし」を取り囲む空間の同一性に依存するであろうから、それを変化させてしまうような土地や建造物の自由な交換や処分は認められないことになるだろう」(「設計主義市場論・批判」(『大航海』1999年2月号))。

原理に対して原理で応えようとするこのややこしい論理は、そのままではたとえばデベロッパーを説得することはできないだろう(長々と引用しておいて、松原先生、申しわけない)。しかし、建築家の琴線には触れるはずである。建築の設計はまずもって空間と身体感覚の関係性を解きほぐし、編み直すことだからだ。だとすれば、次のことが期待できるだろう。建築家は建築の自律性を信じることで成り立つ職能であり、それだけに他律的なファクターを極力排除しようとするし、社会的規制はもっとも他律的な存在と見なされがちである。しかし、松原氏の言に従えば、空間の同一性の保持という社会的要請は建築の本質的問題として考えられるようになるだろう。少なくとも、隣地の町家とまったく無関係なデザインを行なうとき、その町家がいつまで建っているか判らないからといった理屈ではすまなくなるはずである。

私的所有権の絶対性を公的に規制する（あるいは税金を投入して誘導を行なう）根拠はまちがいなく在ると言えるならば、次の問題は「公共」の質ではないか。官僚機構の形式主義は、歴史性あるいは景観の内実に触れないまま、キャッチフレーズとしての「保存再生」で能事終われりとしがちだからだ。「レプリカ保存」や「かさぶた保存」の問題がここで浮上してくるのだが、これについて具体的に論じるにはもはや紙幅が許さない。ただ、この形式主義に対しても、「空間の同一性」という基準は強力な解毒剤にならないだろうか。「わたし」が「わたし」でありつづけられるかどうかを問うところからはじめたいのである。つきつめた議論を通じて、わたしたちは、景観の或いは歴史的価値の内実をようやく問題にすることができる。こうした合意形成の公共性こそが、私的所有権を制限し、空間を市場原理から引き離すことを許す根拠となるものであろう。

(いしだ　じゅんいちろう)



京都三井ビル――これが望んだ姿ではなかったはずなのだが


第一勧業銀行京都支店――なぜこの典雅な建築が無意味な死を遂げなければならなかったのか

ドイツの都市と歴史環境の保存

足立裕司
神戸大学工学部建設学科建築系教授

学園都市アーヘン

もう5年前のことになるが、在外研究員としてドイツのアーヘンという都市に10ヶ月ほど滞在したことがある。歴史の好きな人には、フランク王国カロリング朝のカール（仏名シャルマーニュ）大帝の好んだ町として記憶されているのではないだろうか。その時に建てられたカロリング朝時代を代表する建築、宮廷礼拝堂がこの都市を世界に知らしめている以外にそれほど取り立てて紹介するものもない、静かな学園都市である。大聖堂で有名な隣町のケルンや商業都市デュッセルドルフに比べると観光客やビジネスマンも少なく、もちろん日本人もそれほど見かけることはない。それでもこれだけ滞在すると不思議と愛着もあり、今回の都市と歴史の関係というテーマを頂いたとき、あちこち通りすぎたヨーロッパやアメリカの町より、やはりこの町から考えてみるのが私にはふさわしいと思われた。

この町は人口20万人を超えるくらいだが、ドイツでは比較的大きい方に属する。ヨーロッパの他の町同様にこの町も中世に造られた城壁を壊して外周道路としているが、今も城門だけは2棟残っており、それが当初の町の規模を語ってくれる。鉄道駅は外周部にあり、そこから町の中心まで歩いても20分もあればよい。おおよそ主要な道はこの宮廷礼拝堂へと伸び、その後に建てられた旧市役所と広場（市の立つマルクトプラッツは礼拝堂との間にある）とともに同心円上の中世都市の要となっている。しかし、中心部をよく見ると一部の道は直交軸を持っている。この町はすでにローマ時代に温泉のでる中継基地として知られ、その時に造られた碁盤状の道路が中世を経て残っているためである。こうした古代都市と中世都市の重複した構造は、やはりローマの前進基地として栄えたモーゼルワインの町トリアに顕著にみられる。

このように一度つくられたものは意図的に壊さない限り残存していく。古代、中世、あるいは近世も含めて、歴史が眼に見える形で残っている都市は少なくない。ヨーロッパではこの当たり前のような歴史の重層性を日本人が実感するだけでも多少の滞在期間を要する。

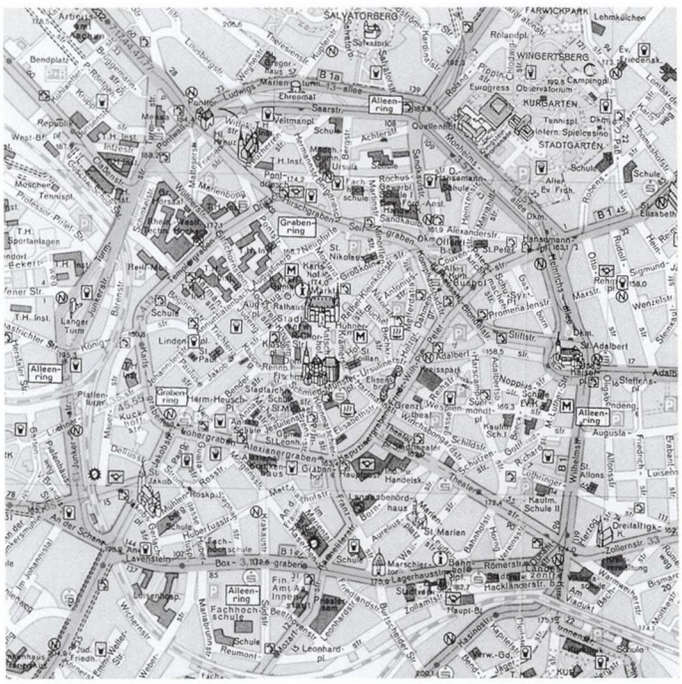
もうひとつ、このアーヘンで面白いことは、西に歩いていくとすぐにベルギーかオランダに出てしまうことである。鉄道はもちろんのこと、自転車でもあっという間に突き抜けてしまう。すでに国境がなくなって久しいのだから、当然といえば当然なのかもしれないが、国境を思わせるものがないので、国を越えたという実感がまったくない。そのつもりで注意深く探すと、木が刈り込まれた見通しのよい場所がベルト状に続いていることに気づくが、それよりも国を越えたという実感は建物を見ていると感じられる。オランダに入るためのアーヘンからの支線を数駅過ぎるとダッチゲーブルと呼ば



宮廷礼拝堂　中央のドームはゴシック風に変わっているが、内部は当初の姿が残る



アーヘンの城門のひとつ（Ponttor）



アーヘンの地図
中央に碁盤目状の道路が残る。なお、円形の中世都市の城壁はアーヘンから1時間ほどの町、ゾーストによく残存している

れる特徴のある段状の破風をもつ民家が急に目に付くようになる。そして終着の駅に降りるとそこはオランダ語の世界になる。ここでは距離で影響を計るということはほとんど意味がなく、歴史が形成してきた民族、言語、文化、習慣が目に見えない線によって区切られているといえる。

その見えない線を越えて、空間的には自由に行き来しながら、実際買い物をするにはオランダの方が野菜も安く、開店時間も長いので便利だと、多くのアーヘンの市民が土曜にもなると車で隣町に出かけていく。そこで日常的に生じると思われる異文化、他言語の障壁を彼らは当たり前のようにして生活している。それは、頭では理解できても均質な社会で育った私には物珍しいことであった。

歴史的形成として地域がもつ多様性

このアーヘンで感じた常なる異質さとの邂逅というものを理解するには、やはり空間的な認識は限界がある。それは国家や法律といった制度で律されてはいるが、歴史的な形成としてそれぞれの地域がもつ多様性と考えた方が分かりやすい。事実、私たちがドイツの文化と考えているビアホールなどの多くの習慣は単にバイエルン地方のものであるし、ベルギーではもっと極端なことに一つの村に2つの集会所や学校が設置されていることがある。それは歴史的に違った言語・習慣をもつワロンとフラマンという集団に二分されているからである。まるでロミオとジュリエットのような世界が今も狭い地域の中で共存しているのである。

こうした歴史的形成になる地域という考えは、江戸時代までは日本でも多少は存在していた。山ひとつ、川ひとつ越えると他藩になり、民家の造りが異なるということがみられた。それを均質化したのが明治維新であり、近代化が均質化を招いたと一般にはいわれるのだが、ドイツを見て歩くかぎりでは、どうも近代化と均質化はそれほど正確には一致しない。それは、すでに歴史的に形成されたものの上に、近代が重なるだけなので、どこまでも地域性というものが残っていくからである。

マルセル・モースというフランスの文化人類学者はパンを見るとヨーロッパの民族の歴史（構造化）が読みとれるといった。確かにヨーロッパを旅するとパンの種類の多いことに驚かされるが、パンに限らず建物にもそのことはいえる。大きな歴史の変遷のなかで建築様式は変化していくが、その新たな様式の創造と移入には常に地域性というものが反映し重なっていく。それが長い歴史の中で様々なバリエーションを生みだし、その場所に蓄積されていくことになる。こうして醸成された地域性は歴史的な環境、目に見える環境として大事に維持されてきた。

時間が作り出した秩序と人間が一時的に作り出した秩序の違い

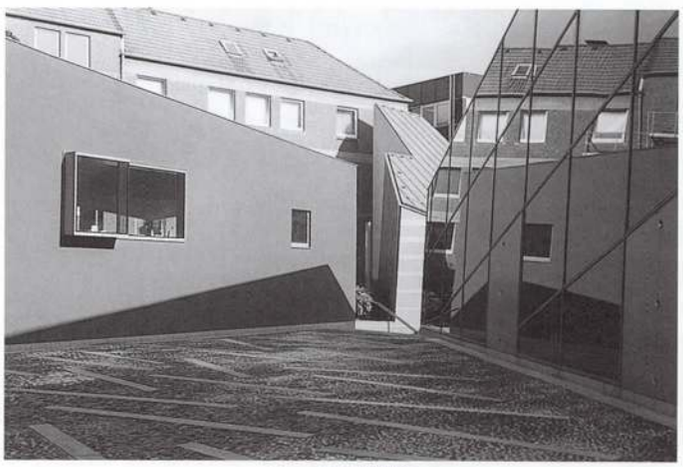
ドイツでは前後2回の世界大戦で、このかけがえのない歴史的環境を大きく失うことになった。彼らがそれを惜しむ気持ちは、それぞれの都市に行くと必ずといっていいくらい売られている昔の絵ハガキが表している。古い教会でも昔の姿を掲げているところが多い。



戦争による被災地図
ほとんどの都市が第二次世界大戦によって被害を被っている（円グラフの黒の表示　出典　D.Reinborn "Städtebau im 19.und 20. Jahrhundert"1996年）



広場に続くアーヘンの商店街　前方の尖塔が旧市庁舎



アーヘンの新建築
デコンストラクティビズム風の新建築も広場周辺に建てられている

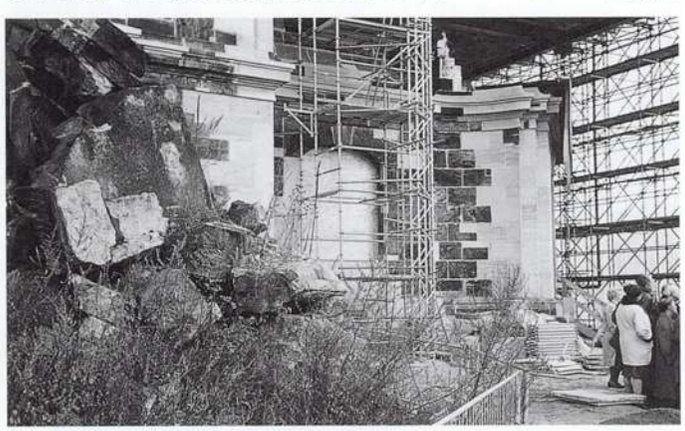
昔はこんなにすばらしい町だったという気持ち、そしてすばらしい街や建築を傷つけたという後悔ーそれは時にアングロサクソンの蛮行への非難というあらぬ方向にも向かうのだが、そうした歴史への配慮が今のドイツの都市を立ち直らせる原動力になっているのだろう。

アーヘンの広場を取り囲む町並みも、先の戦争で大きく破壊され、今は別に取り立てていうこともないごく普通の建物が再建されている。建物の幅は敷地上限られているとしても、何故か高さもそれほど違和感のないかつての高さを維持している。日本なら当然場違いな高さの建物が建っていても不思議ではない一等地が別に法的規制もなく維持されたと聞く。もちろん今では歴史的環境の保護のために厳しく高さが制限され、多少とも歴史のある建物全てに保護がなされているのだが、同じような歴史を辿りながら、都市の快適さ、個性の維持ということでは、なぜこれほどまで日本の都市は水をあけられてしまったのだろう。

その遠因と思われることをドレスデンで見かけた。ヨーロッパを代表する歴史都市として戦前まで栄えたドレスデンは、中央駅の前に日本でも見かけるような整然とした高層集合住宅、商店街が広がる。戦後、共産圏として都市計画がなされ、あきらかにこの地のもつ歴史性が一度リセットされたことが、無表情な建物の様子から見て取れる。積極的な都市改造をなした東側の都市の寂しさと、取りあえずあり合わせのところから出発した西側の都市の今の快適さを考えあわせると、先の疑問の一端が理解されるように思われる。それは、一つには時間が作り出した秩序と人間が一時的に作り出した秩序との違いであり、自律的な調整と他律的な調整の違いという風にいろいろ思い当たる。それはC.アレクザンダーやA.ラパポートなどが唱えているところと共通している。

フラウエン・キルへの再築

ドレスデンでは世界的に一級のツヴィンガー宮殿やゼンパー劇場は残したが、それを取り囲む周辺の歴史的な環境は二流のものとして無視された。歴史的に形成されてきた都心を取り囲む現代建築は今は見る影もない。この惨憺たる結果を、彼らは謙虚に受け止めているようだ。少なくとも宮殿に接する歴史的建造物の修復を、この都市の再生に賭けているかのように熱心に進め、かつての体制では無視されたであろう開発のための敷地の発掘調査も丹念に行っているからだ。その象徴とも言えるのが、フラウエン・キルへの再築で



フラウエン・キルへ　まだ地上は残骸の山だが、地下はすでに完成し、日曜ごとにチャリティのコンサートが開かれている



ドレスデンの駅前
無表情の高層住宅が建つ（出典　H.Quinger"Dresden"1991年）



在りし日のフラウエン・キルへ　規模の大きいことに注意

あろう。戦争中、出火で倒壊したプロテスタントとしては異例なバロック様式のこの大教会を、戦争の記憶として残骸で残してきた。それを何故か今になって巨費を投じて再建しはじめている。実は、建築史や修復を専門とする人たちも多くがその行為を冷ややかにみている。しかも、どこかの国のお城の再建のように形だけの再建ではなく、残骸となった石の欠片を可能な限り寄せ集めて再建しようというのだから驚かされる。その試みはどうみてもそれほどの経済的効果が見込めるわけでなく、また都市を活性化させるにもあまりにもかけ離れた試みにみえる。しかし、この途方もない行為に、私は逆に日本の都市が失っていくものを教えているように思え興味をひかれた。

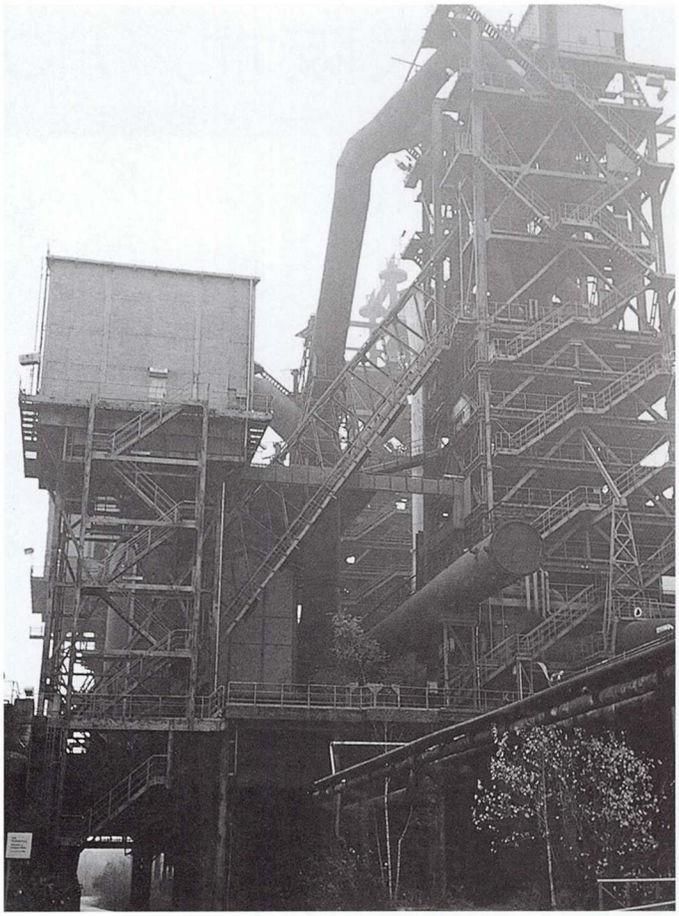
都市を新しく建て直すことは可能であり、その方が機能的には効率がいいはずである。逆に、道路や街区であろうと実際の建造物であろうと、歴史的な環境を残し、もちろん再建するとなると一層大変なことだが、現実上でも効率上でもいろいろ問題が生じる。しかし、歴史的環境には建築家や都市計画家には、やろうとしてもできない時間の蓄積があり、時間の経過の中で調整されてきた人間関係や物理的整合性というものが存在している。時間の中で形成されてきたものには、何よりも人々をつなぎ合わせる記憶という強い味方がある。ライプチヒやドレスデンの失敗はこの場所の持つ力を利用せず、自分たちの創造の力を過信しすぎたことによるのではないだろうか。

歴史的環境の利用

歴史的環境の利用は何も古い市街地とは限らない。デュイスブルクの製鉄所は、19世紀以来ドイツの近代化を推進する原動力であった。製鉄をやめた後、彼らはこの工場の歴史を大事にし、工場を公園化して残すことにした。エッセン工業地帯にはこれほど大々的でなくともこうした産業遺産を生かした施設が多い。なかにはガスタンクまで改修して利用している。モダニズムを生んだ国なのに、この国の人々はただ古いものが好きなだけであろうか。

実は彼らにとって歴史を守るということはそれほど大層なことではなく、もっと当たり前のことのようだ。それは環境問題先進国としての無駄をしないという姿勢にも現れているのであろうが、ある程度時間がたって評価できるものは使い回していくという姿勢がある。私のいたアーヘン工科大学には全面にガラスを利用したなかなかいいデザインの校舎があったが、エネルギーを食い過ぎるということで今は法律上、夏場しか利用していない。日本なら改修できなければ壊してしまいそうなのだが、いずれ手直しして利用するのだろう。とにかく壊してから考えるということをしない国民性は本当に見習うべきである。

不良なものを建て直し、いいものを残していくというドイツの地道な活動は戦争で失った遺産を徐々にではあるが取り戻しつつある。時間の経過は失われたものを補いながら傷を修復していくからである。ドレスデンの隣町ライプチヒも東西統一以降方針が転換した。この町ではヨーロッパの歴史遺産を守るため、1年おきに修復の素材や技術を集めた見本市を開いている。その関連のシンポジウムに参加して、オランダのDOCOMOMOの活動の報告を聞いた。驚いたのは、保存を手がけるドイツの人たちから、なぜモダニズムを別格に見るのかという質問がでたことである。ドイツ人研究者はモダニズムを全く区別せずに重要と考えている。つまり彼らの論理ではあらゆる建築の価値は等しく、手仕事も機械仕事もなく現代まで続いているということになりそうである。あるのは多分、残していく何らかの価値があるかどうかだけなのだろう。



デュイスブルクの製鉄所
施設を一部劇場として利用している。撤去に費用を要すということもあるのだろうが、八幡製鉄のように一部分ではなく工場施設全体の保存を行っている

この一見無謀なようにみえる論理は、保存か取り壊しかという水掛け論に終始する日本では有効である。まだ利用できるかどうかという冷静な判断にたった保存の方策の検討こそ必要であり、都市を重層化していく足がかりとなるからである。しかし、保存という行為は必要ではあるが必ずしも保存だけが道ではない。よく言われるように将来を見据えた、保存に足るような建物を造ることも必要である。あらゆる存在はその誕生した段階から時間の流れに飲み込まれていくのだから、新しい創造活動も例外ではない。現在の創造と地域を結びつけるのは時間であり、歴史の蓄積である。歴史の蓄積は創造を排除するのではなく、調整を求める。新しい創造には場合によっては周りの歴史の形に合わせるという、一見消極的な態度が求められることがある。しかし、逆に知らず知らずの影響や創造の母胎となる知恵の集積も歴史にはある。

日本の都市も成長から成熟へと向かうことを真剣に考える時期にきているのだが、まだ論理だけで空転しているようにみえる。もう少し実践的に、ディテールとしても身近にある歴史的環境の保存方法、手法が理解されるといいのだが、日本の建築家や都市計画家にはまだ新しいものを志向しすぎるのか、古い建物や環境にことさら目を向ける人は少ないようだ。

（あだち　ひろし）

大阪市／HOPEゾーン事業

―「平野郷地区」「住吉大社周辺地区」―

寺尾　章

大阪市住宅局住環境計画課課長

大阪市のHOPEゾーン[※1]事業は、市内において歴史的なまちなみや景観などの地域の特性を活かし、魅力ある住宅地の形成を図る施策の一つとして進めている事業である。すなわち、「地域性・歴史性の発展継承と居住地の魅力づくり」に向け、特色ある居住環境を形成すべきゾーンを設定し、地域住民と協力しながら、アメニティ豊かな住宅・住環境の形成と誘導を図るものである。

1．事業の概要

この事業は、国土交通省の「街なみ環境整備事業」の補助制度を活用し、現在、「平野郷地区」と「住吉大社周辺地区」の２地区において実施している。

平成８年度から、歴史的・文化的雰囲気を残す地域として「平野郷地区」と「住吉大社周辺地区」を選定し、事業化に向けて現況調査や整備方針の検討、地域住民の意向把握等を行ってきた。

事業の実施にあたっては、そこに住み働いておられる住民の方々が参加し、その意見を代表する地元協議会が設立され、住民と行政が連携して、あるべき地区の「まちなみガイドライン」を定めて進めている。

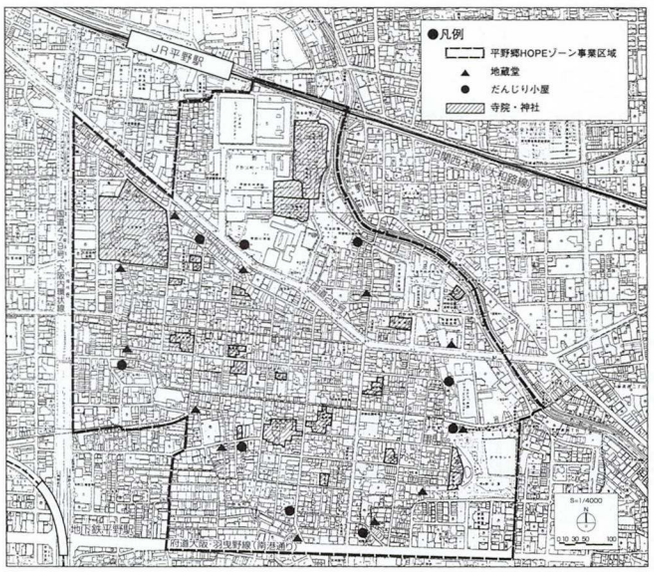
具体的には、建物や門・塀等の改修や新築についての「修景ガイドライン」を定め、これに沿った建物等の改修工事費の一部に補助を行うとともに、道路・公園などの公共施設の修景整備を行い、歴史的なまちなみを活かした、良好な住宅地整備を進めようとするものである。

2．「平野郷地区」

平安時代から開けた平野郷は、交通の要衝として商業が発展し、戦国時代には自衛のため、まちを環濠で囲み、町民合意でまちを運営する自治都市として、堺とともに日本の近世史にその足跡を残している。まちを歩くと、環濠集落であった往時を偲ばせる地蔵堂や環濠跡、そして様々な様式の町家を目にすることが出来る。現在においても、夏祭りや住民による様々な活動が盛んであり、歴史的・文化的に豊かなまちである。これまで親しまれて来た平野のまちなみの良い点を受け継ぎ、魅力ある住宅地の形成をめざして、住民参加で「まちなみガイドライン」を作成した。この中で「平野らしさ」を具体的に表わすまちなみ・住まいづくりのテーマを、祭りの際に道路に面した深い軒先に吊るされるちょうちんをイメージして、

『祭りちょうちんが似合うまちなみ』

とし、これに基づいて、新築や改修に際しての考え方や補助事業の基準である「修景ガイドライン」をまとめている。



平野郷地区



平野郷地区のまちなみ

まちを取り囲んでいた環濠のほとんどは埋め立てられているが、濠を埋め立てて形成された曲線形の道路や、環濠の入口であった十三口の木戸門跡付近に残る地蔵堂など、当時の面影が今もなお残っている。

・「平野郷地区」の経過

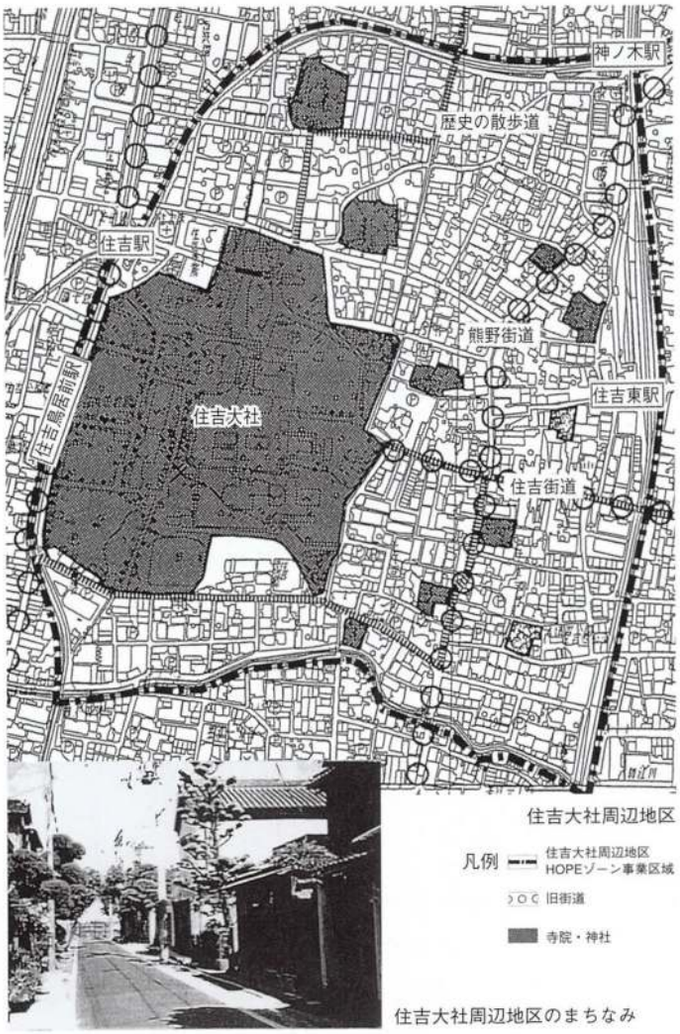
平成８～11年度	整備方針策定調査
平成11年５月	平野郷HOPEゾーン協議会設立
平成12年６月	「まちなみガイドライン」策定
	まちなみ修景補助事業開始

・まちなみ修景補助事業の実績

平成11年度	１件（修景モデル事業；店舗の改修）
平成12年度	４件（住宅の改修；1件、住宅の新築；1件、店舗付住宅の新築；1件、住宅の塀の新設；1件）

3．「住吉大社周辺地区」

大阪市南部の住吉大社周辺は、古くから海上と陸上の交通の要衝として栄えたまちで、旧熊野街道と旧住吉街道の交点にあたる位置にあり、古くからの町家と、社寺やまちかどの豊かな緑が、歴史的な雰囲気を今に伝えている。特に、住吉大社境内の豊かな樹林、かきつばた苑・卯の花苑の花や実、まちかどの古木や鉢植えなどが、



住吉大社周辺地区

住吉大社周辺地区のまちなみ

お祭りなどの年中行事を通じて花鳥風月を楽しむ土地柄とともに、四季折々の風情を感じさせるまちなみを形成している。ここでも平野郷地区と同様に、これまで親しまれて来た住吉のまちの良い点を受け継ぎ、魅力ある住宅地の形成をめざして、住民参加で「まちなみガイドライン」を作成した。この中で「住吉大社周辺らしさ」を具体的に表わすまちなみ・住まいづくりのテーマを、

『住吉の歴史と人が育む　四季に映えるまちなみ』

とし、これに基づいて、新築や改修に際しての考え方や補助事業の基準である「修景ガイドライン」をまとめている。特に、緑のしつらいの修景基準を追加している。

・「住吉大社周辺地区」の経過

平成８～11年度	整備方針策定調査
平成12年12月	住吉大社周辺HOPEゾーン協議会設立
平成13年６月	「まちなみガイドライン」策定
平成13年８月	まちなみ修景補助事業開始

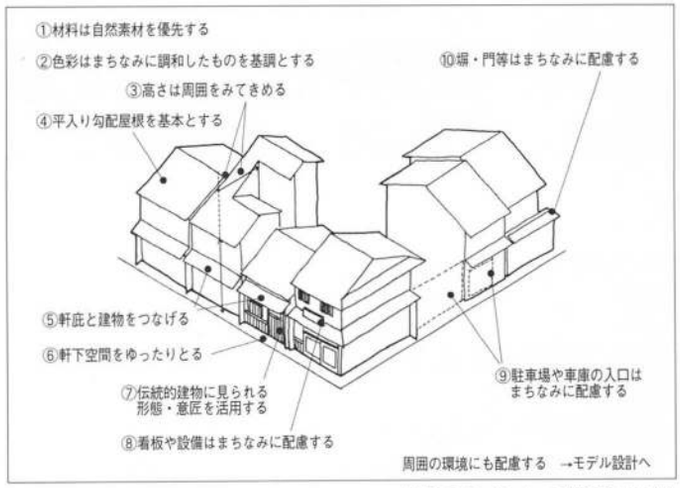
４．HOPEゾーン事業の内容

(1) 協議会活動助成

①「協議会ニュース」の発行、まちなみ勉強会やワークショップの開催、まちなみに寄与する建物への表彰活動等の協議会活動に対して、必要な助成を行っている。

②修景デザイン相談会の実施

建築デザインの専門家や学識経験者による住民向けの相談会を、定期的に実施している。



修景のポイント（平野郷の場合）

伝統的建物（店舗）の修景の例



修景前



修景後

(2) まちなみ修景補助（工事費等補助）

地区内の住宅等の新築、増築、改修等や塀・門等の設置に際して、伝統的な瓦屋根や道路に面した塗り壁、深い軒庇の設置、景観に考慮した看板の設置など、修景基準に適合する工事に対して、同一敷地内において200～500万円を限度に補助を行う。

(3) 地区内の公共施設の修景整備

地区内の道路や公園などの公共施設の一部についても、各地区のまちなみにふさわしい修景整備を、協議会をはじめとする住民の意見を聞きながら、平成13年度から着手する予定である。

（てらお　あきら）

※１）HOPEゾーンの「HOPE」は、「HOusing with Proper Environment」の略。「地域それぞれの文化的・歴史的・自然的、幅広い意味での環境を活かした住宅地づくり」という意味があり、「HOPE」という言葉本来の「希望」という意味も込めている。

西陣地域に見る草の根まちづくり

高木伸人
(財) 京都市景観・まちづくりセンター事業課長

1. 京都市のまちづくり

(1) 職住共存のまちづくり

京都市では、まちづくりの方向を「保全・再生・創造」の3つの概念で捉え、都心部は「調和を基調としたまちの再生地域」としている。その中でも、職と住が共存してきた地域について、平成10年に「職住共存地区整備ガイドプラン」を定め、小さな単位のまちづくりをそれぞれの地域の資源や価値を生かして住民主体で取り組んでいくとした。さらに京町家を職住共存地区の重要な資源・価値として捉え、平成12年に「京町家再生プラン」を策定し、京町家の保全・再生に取り組んでいる。

(2) 悪循環の現状

京都の都心部はこれまで、①多彩な人材、②多彩な生活文化、③多彩な地域産業、④コンパクトな都市、⑤高いコミュニティ意識などにより魅力的であったと言えるのではないか。

しかし、現在は、「地域産業の不振により、地域コミュニティの担い手であった地域産業従事者が家族ともども減少し、コミュニティが衰退し、地域としての魅力が低下する」という悪循環をおこしており、ガレージの増加、京町家の消滅・放置などの都市空間の変貌にもそのことが現れている。(職住共存のまちづくりの詳細については、本誌2001年6月号を参照されたい。)

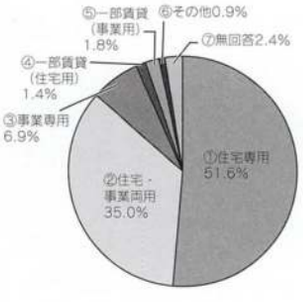
(3) 京町家再生プラン

「京町家再生プラン」によれば、明治末期に市街化されていた都心4区(上京、中京、下京、東山)の住宅敷地の約半数が、現在もなお京町家であり、その数は約2万8千にのぼる。職住併用率は約35%、居住継続意向は約70%と高い値を示し、職住共存の京町家の再生の可能性を伺わせるものである。

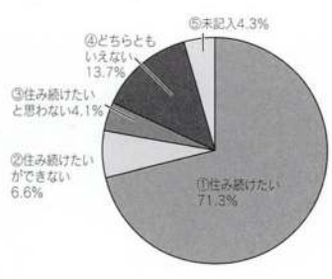
このプランでは、以下の3つを柱に、京町家の保全・再生を進める21のアクションプランを定めている。

・ひと　－　くらしの文化の継承・発展
・たてもの　－　空間の文化の継承・発展
・まち　－　まちづくりの文化の継承・発展

(http://www.city.kyoto.jp/tokei/todu/matiyaplan.htm参照)



京町家の利用状況



今後の居住継続意向

京町家の再生と言うと、外観を保存し町並みを再生するという面が強調されがちであるが、そうしたことを可能にするのは、そこに人がいて生活があればこそ、である。

そこで、京町家再生プランを実践する基本コンセプトとして「人と建物の再生による都心の再生」を掲げている。つまり、「低未利用の町家に新たな居住者や利用者を迎え、また、京町家を改修、復元を促進する」ことにより、「元気で多様な人材によるコミュニティや産業が再生する、生活文化が再生する、町並みが再生する」即ち、「都心が再生する」というものである。

2. 草の根まちづくり

こうした京都市行政のまちづくりの考え方に対して、現実の地域でどのようなことが展開されているのか、西陣の例をご紹介したい。

西陣はご存知のように応仁の乱において西軍が陣をおいたことから、御所の北西部一帯の地名として定着し、世界的なブランドにまで成長した西陣織を基幹産業に発展をしてきた地域である。数多くの工程にそれぞれ専門の職人が携わり、地域全体が工場と言えるものであった。そこには、織物産業を中心にした地域コミュニティが形成されていた。

しかし、地域の基幹産業である織物業は、言われて久しい着物離れにより年々厳しくなり、資金面を支えてきた地域の信用金庫が相次いで破綻するなど、厳しさは増す一方となっている。西陣織物工業組合の登録業者数は、1976年にピークの1,524社から2000年には約半数にまで落ち込んでいる。地価の高騰や騒音対策から生産の場は丹波や海外へと移り、工場跡地が駐車場やマンションに様変わりした。住まい手を無くした町家は空き家のまま放置されるか、取り壊され、駐車場や木造3階建ての建売住宅に変貌していった。西陣は空洞化し、少子化も手伝って小学校は4校が1校に統合され、地域の商店街は活力を失っていく。

(1) 町家倶楽部

知人であった西陣の住職に触発され、町家に住みたいという思いから、2ヵ月半もの間、西陣地域を歩き回り、平成7年当時は賃貸市場に出ることの稀であった空き町家を100軒探り出した男性がいる。写真家の小針氏。その中から、条件次第では貸してもいいという3人の大家に出会い、今は、職住共存の町家生活を楽しんでいる。

「当時その辺りの人は町家を若い人は嫌っていると思っていた。仕事が無くなって高齢者が増えていくまちに、よそ者が家族づれで、嫌われているはずの町家を自分で直しながら仕事を持ってきよった

…町家の生活を楽しんでいる自分のことが新聞に掲載されたら1,000件以上の問い合わせがあり、一人ずつに対応してもきりが無いので自分の体験談を話す会を開催しているうちに自分と同じように町家を借りる若い人達が現れてきた。ものづくりをする若い人達です。そうこうしているうちに町家を貸したいという大家から良い借主を紹介して欲しいと頼まれるようになり、借りたいという人をつなぐようになっていった…」

小針氏や住職らは、ネットワーク西陣を組成し、アーティストが町家で創作活動を行うことをプロデュースする活動を支援し始める。陶芸、絵画、音楽等々、様々なジャンルのアーティストが彼らに大家を紹介してもらい、西陣の町家で創作を始める。

「人をつなぐことがどんどん増えていって、もう少し手間を省こうということで、地域の方の支援を受けて情報発信をする団体を立ち上げました…西陣を語るとき、マスコミは和装産業が低迷で倒産が相次ぎ、空き家の増えているところに若者が住みついたと言う。決してそうではない。空き家があるのは住み手がいないからではなく、貸したくないから、若しくは不動産事業者が扱わないからです…」

町家倶楽部ホームページより（http://www.machiya.or.jp/）

西陣では約4年前よりネットワーク西陣（NWN）が中心となりプロジェクトを進めてきた結果、アーティスト達を中心にした人達が職住一体の機能（LIVE & WORK）を持った町家に興味を示し入居を始め、その数は30数件にも至りました。その後も町家入居希望者からの問い合わせが多くよせられ、町家を生かしたまま有効に利用活用するといった気運の高まりを感じていました。

そこで町家倶楽部は「町家の有効活用を支援する団体」として地域の方々のご賛同とご協力の下、1999年7月に発足しました。具体的な試みとして以下の活動を行っています。

- 町家の仲人の実施を通した京町家の物件紹介（町家の斡旋ではありません）。
- 西陣を中心にした町家有効利用紹介とネットワーク西陣の紹介
- 情報公開・コミュニティースペース「町家倶楽部」の運営
- インターネットを通じて、町家倶楽部や西陣を中心にした地域の情報を発信

こうして地域の人の応援のもとに設立された町家倶楽部によってこれまでにお見合いが成立した物件は、設立以前からのものを含めると約70件に及ぶ。アーティスト以外にもパン屋、和菓子屋、蕎麦屋といった飲食店舗を営む人も現れるが、いわゆる改造町家のテナントとは異なり、彼らは西陣の住民である。地域活動にも参加し、町内会の役もこなしている。地域との関わりは当たり前のことであり、何より自己実現を果たした西陣を楽しんでいる。

町家倶楽部に空き家を紹介する大家は、新聞記者の取材にこう答えている「西陣が現実に苦しい状況にある中、若い人が入ってくれたら町の活性化にはなると思います。でも私が貸すメリットを一番感じているのは、空き家だった家から家賃が入ってくることじゃなく、人の輪の広がりなんですよ」

（2）大宮通元誓願寺界隈

西陣の中でも、南に位置する大宮通元誓願寺界隈は、写真家の水野氏が自前で町家を改修したことに端を発し、最近、町家再生ラッシュとなっている。



Machiya de ほっ

江戸期の町家「Machiya de ほっ」もその一つ。着物の絵師でもあり、住設業を営む南氏が、漫画家である妻のギャラリーとして再生したものである。改修のモデルハウスとしても注目され、多くの人が訪れる。近所にも好評で、改修の相談を受けることもある。

南氏の姉はこの改修された町家に触発され、はす向かいに織工場を入手し、南氏のプロデュースにより「focal point」という喫茶店をオープンさせる。料理好きで人をもてなすことが好きだった専業主婦が自分流に暮らすために再生したものである。

通りを少し下がったところにある町家写真館は、「Machiya de ほっ」を手がけた大工を南氏が紹介し、再生された。南氏は、町家を活用したい人と町家の所有者や大工をつなぐことを始めている。こうして人と人をつなぎ、今後は、界隈の情報を発信していくことが南氏の夢である。

その他にもこの界隈には、町家を再生した医院、デイサービスセンターなどがあり、再生された町家で埋め尽くされる日もそう遠くないと思えるほどである。

3．おわりに

彼らが町家を再生するのは、創作のためであったり、脱サラのためであったり、家族の思い出のためであったりと、実に個人的理由である。しかし、そうした個人的な理由によって再生された町家に生活が始まり、地域社会との交流が始まる。結果、地域のコミュニティは、より活性化し、まちが再生されていく。

ご紹介したことは、地域社会の一部分でしかないが、京町家再生プランを実施する基本コンセプトを確信させてくれるものである。

最後に、小針氏に西陣を勧めた住職の話をご紹介する。「例えば、町家の町並みを行政が資金を投入して作れば町並みはできます。お店が入れば観光客が来て活性化するでしょう。しかし、一歩、道を入ったところには何の影響もないのです。町並みを作ることは簡単なことですが、それよりも人材が大切です。商売という一面では活性化となっているかもしれませんが、お年寄りや子供たちが元気でコミュニケーションをとれているのかを考えると、それはまちづくりになっていないのではないでしょうか」　（たかき　のぶと）

参考資料：京都新聞（2000年11月30日）、産経新聞（2001年5月30日）、1998京都ミニゼミ記録、京町家再生プラン、－21世紀のまちづくりフロンティア・京都の秘密－記録集、京まち工房12号、13号

地域の保存・再生の試み——神戸旧居留地地区の事例——

倉橋正己
神戸市都市計画局アーバンデザイン室長

1．神戸外国人居留地の経緯

神戸外国人居留地は神戸開港（1868年）とともに設けられた外国人のための居住や通商の場である。当時の混乱した時代背景もあって、兵庫の市街地から東へ3.5km離れた神戸村・旧生田川西岸川尻の約26haの砂地と田んぼに居留地が造成され、以後、近代神戸の中心として栄えていくことになる。

居留地の建設は、当時の西欧近代都市計画技術によって、イギリス人J. W. ハートの設計に従い、格子状に配置された歩車分離の街路・街路樹・公園・下水道・遊歩道・街灯などがつくられ、126区画のゆったりと、かつ整然とした敷地割りには木造2階建てのバルコニーを持つコロニアルスタイルの外国商館が建ち並んだ。街路形状や地番は現在でも当時のまま使用されている。

明治32年（1899年）に、居留地制度が解消された後も外国商館の繁栄が続いたが、第1次世界大戦によって大きな打撃を受け衰退する。以来、代わって日本の海運会社、商社、金融機関などが進出、近代洋風建築が数多く建てられ、神戸の中枢業務地を形成した。その後もその地位は基本的には変わっていない。

昭和58年、神戸市が都市景観条例に基づく景観形成地域に指定したのをきっかけに無電柱化・歩道の整備が行なわれ、地元でも「旧居留地連絡協議会」が設立され、街づくりの取り組みが始まった。

そのような中で昭和60年代に入ると、地区内に点在する近代洋風建築の持つ価値が見直されだした。「威風堂々とした石造りの近代洋風建築にはコンクリートとガラスで造られた現代建築にはない、重厚さと安定感があり、そのレトロムードがファッションと絶妙にマッチする」として、これらを活用して高級ブティックや飲食店がビルの低層階に進出するなど、都心業務地としての性格に加え、新しいショッピングの街として従来とは趣を異にする賑わいを見せ、最も神戸らしいハイカラな街になった。

平成7年1月の阪神・淡路大震災では、地区内約100棟余りの建物のうち22棟が解体せざるを得ないほどの大きな被害を受けた。

この中には、居留地時代から唯一残されていた15番館（国指定重要文化財）をはじめ4棟の近代洋風建築物も含まれていた。そして現在も、この試練を乗り越え、復興に向けて街ぐるみで取り組んでいる。

2．歴史的環境に配慮したまちなみ形成の取り組み

旧居留地地区では、地域の企業が集まって「旧居留地連絡協議会」を結成し、都心（まち）づくりに取り組んでいる。

震災後、同協議会はすぐに復興に立ち上がり、平成7年10月には地区の今後の方向性を示した『神戸旧居留地／復興計画』を策定し、引き続いてそれを受けたガイドラインを同9年3月にまとめた。

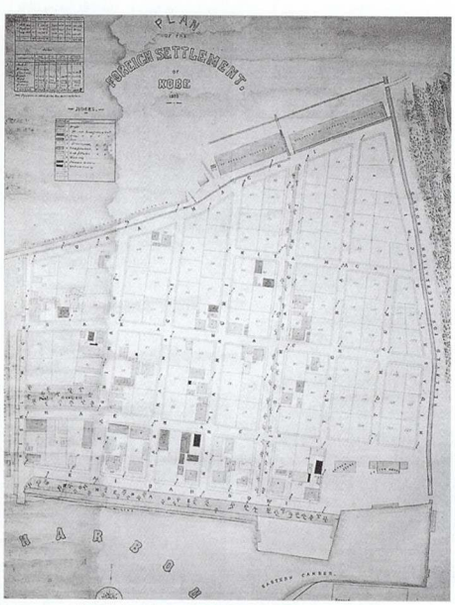
「神戸旧居留地　都心（まち）づくりガイドライン」の概要を以下に述べる。

街の方向として『にぎわいと風格ある中枢業務地』を目指し、まちなみ形成には、近代洋風建築によって形づくられたまちの雰囲気を残しながら『まちの変化・成長に、旧居留地の蓄積を活かす』ことにより、一層洗練されたまちに変革をとげていく。

そのために、継承すべき景観要素として

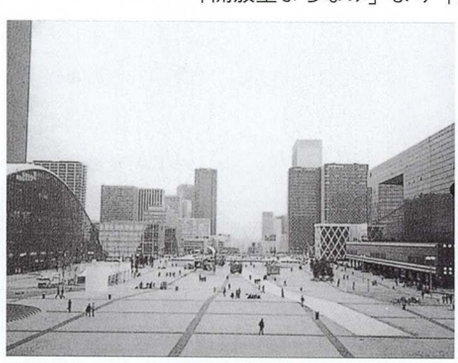
①街区形態（道路と区画割り）
②道路空間における囲まれ感
③ゆるやかに統一されたスカイライン
④建築物の風格ある意匠・材質

に留意していくことになっている。



神戸外国人居留地設計図書（1870年）

「開放型まちなみ」より「囲まれ型まちなみ」の形成を


「開放型まちなみ」の事例／デファンス地区（パリ郊外）


「囲まれ型まちなみ」の事例／パリ旧市街地



中層階のスカイライン

具体的には、旧居留地時代の標準1000㎡だった敷地割りに基づくボリューム感をまもるため、敷地の細分化を避けるとともに、統合化された大規模な敷地では建物の視覚的分節化を図る。

また、「囲まれ型まちなみ」を継承するために、中・低層の壁面線の位置は道路端から１mで揃え、中層階のスカイラインを揃える。

一方高層部では、重圧感などを避けるため、道路から出来るだけ後退させる。

外壁は自然石など、時とともに風格を増す素材を使用することが推奨されている。

ガイドラインではこの他、まちなみづくりのキーワードとして「にぎわい」「伝統」「風格」「もてなし」をあげ、建物の用途、街角広場、近代洋風建築物の保全・活用、ポルティコやパティオなどの建物内の広場空間、夜間景観、広告物、緑や飾花などについての留意点も整理している。

これらのうち、最低限のルールが「地区計画」や「景観形成基準」で定められており、新築、増改築などの際、特に配慮が求められる。

３．近代洋風建築の保全・活用

戦災や震災により、また、効率が悪いという理由から数多くの近代洋風建築が姿を消し、現在９棟（外壁だけ保存された海岸ビルを含む）が残っている。建て替えられた建物も歴史を継承する努力がなされている。

そのいくつかのパターンについてみる。

①全面保存（復元）型

・旧神戸居留地15番館は震災で全壊した。南にバルコニーを持つコロニアルスタイル・木造２階建ての、唯一残された居留地当時の商館で、部材を最大限再使用して復元された。現在はレストランとして利用されている。

・現在の神戸市立博物館は昭和10年、銀行として建てられた。昭和57年に博物館として改修。

・商船三井ビルは大正11年建設の事務所ビル。渡辺節の設計で曲線の柔らかさと石積みの重厚さが特徴。現在は低層部は家具インテリアの店舗に。旧居留地38番館は昭和４年、ヴォーリズ建築事務所設計の銀行ビル。改修し、ブティックに。チャータードビルは昭和13年、銀行として建てられた。平成13年、内部改修され、ブティック、レストランに。その他、神港ビル、同和火災海上ビル、日本毛織ビルは主に事務所として現在も利用されている。

②外壁保存型

・新海岸ビルは震災で大きな被害を受け建て替えたもの。もとの建物の外壁を修復・保存している。隣接する商船三井ビルと並び、海岸通り側からの景観が再現された。

③イメージ保存型

・近代洋風建築が建て替えられるに際し、以前のビルのデザインを新しいビルに取り入れ、イメージとして再表現している事例として、神戸朝日ビルディング、新クレセントビルがある。

４．今後の都心（まち）づくりの課題

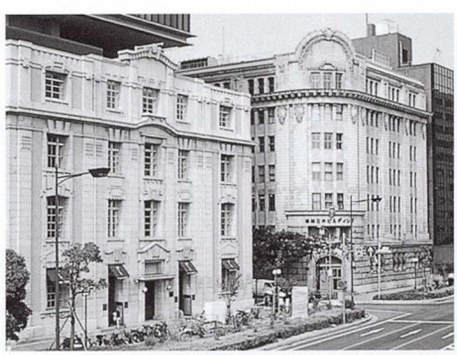
旧居留地のまちづくりは順調に行っているが、残された課題は、

①ベースとなる業務機能が神戸経済の弱さを反映し、空き床率が高い。

②街としての一層の魅力を高めるため、文化機能（貸しホール、ギャラリー、ミニシアターなど）の付加・導入が望まれる。

などがある。

（くらはし　まさみ）



新海岸ビル（手前）と商船三井ビル



旧神戸居留地15番街



神戸市立博物館



神戸朝日ビルディング

NTTの所有する近代建築の再生——京都新風館——

河田　正／佐藤　敦、横田和伸
NTT都市開発　　NTTファシリティーズ

開発計画と背景

NTTの歴史を遡ると、電電公社、電気通信省、逓信省へと行き着く。

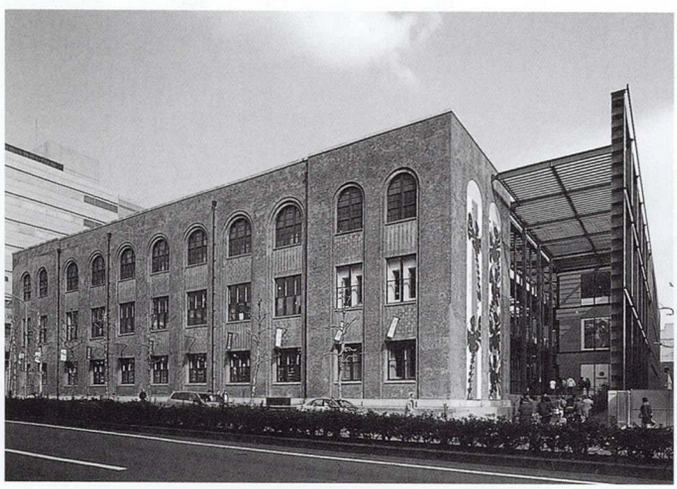
各時代から引き継がれた建築物は、多数に及ぶが、中でも歴史的価値の高さを考慮した場合、逓信省時代の、大正後期から、昭和初期にかけて作られた建物群を外すわけにはいかない。

昭和53年から昭和54年にかけて，当時の電電公社では、電話需要構造の変化と技術革新により老朽電話局舎が空き施設となり、その存廃問題が起こりはじめたのを契機として「史的建造物（当時の社内呼称）」に関する資料の収集、保存方法の検討、を計画的に実施する事とし、全国的な調査を行った。その記録によると、関西地区では「京都中央電話局西陣分局（設計：岩本禄　大正10年竣工）*1」、「京都中央電話局新上分局（設計：吉田鉄郎　大正13年竣工）*2」とともに本建物「旧京都中央電話局（設計：吉田鉄郎　大正15年建設（第一期）昭和６年（第二期）完成」も重要度Ａランク「極力全体保存か部分保存を望む」として評価している。その意を受け、昭和58年に京都市文化財登録への依頼に対し、「京都市登録文化財指定第一号」として登録を行っている。しかし、昭和60年日本電信電話株式会社（NTT）への移行後、民営化の流れを受け、関西地区における不動産会社が設立される事となり、本敷地はその新会社へ移管される事となった。この時点において従来以上に経済原理の洗礼を受ける事となり、当建物の保存方法の見直しが行われ、平成２年、北・西側の外壁保存とともに他の部分の撤去・更地化を前提とした内容に登録文化財の届け出変更を行なっている。その後、構造強度·外壁面タイルの劣化度調査、その調査に基づく外壁補修工事を行った上で、平成３年７月に北·西両壁面を含む奥行き１スパンのＬ型状に建物を残す形で撤去工事が行われ、不動産会社へ移管された。

平成11年、商業企画会社を通じて既存の建物の再生を前提とした商業事業者からの利用計画が提案され、具体的な検討を開始する事となった。幸い、我々としてもこの建物を部分保存ではなく全体を生かした利用計画として実現する事が社会的にも、京都市の当敷地周辺地域にとっても望ましいと認識しており、その場合の利用方法を事前に検討していた。*3

建物のファサードと基本的ヴォリュームを周辺の街並みに貢献する重要な要素として積極的に保存する事、北側入口部の意匠の保存及び、烏丸通側の大アーチと基壇を極力残す事、大梁ハンチの意匠を活かすため天井を貼らず、二重床を設ける事により下からの空調等を行う事、外気取入れ等を考慮して中庭を設け通路状のバッファスペースを巡らす事、構造補強は柱を太くするより壁を厚くする事等の示唆を得ており、これらを元に、設計者に対する事前要望を行った。我々は、商業事業者からの申し出を受けつつも新たな空間については、社会的責任を持つべき立場である事から、設計協同メンバーにヨーロッパでのレストウロ（資源としての古い建物を再生し活用する）実績を持つ「リチャード ロジャース パートナーシップ ジャパン」を選定し、外観及び既存建物のコンテクストを活かしつつ新旧建物をバランス良く際立たせるデザインと空間構成を求める事とした。しかし、この構想を実現に導く為にクリアすべき条件が更に有った。即ち事前の構造強度調査の結果が思わしくなく、かなりの補強工事を施す必要が有り、その結果補強工事費がかさむ事になれば事業収支の面でこのプロジェクトを断念せざるを得なくなる事が予想されたのである。

そもそも逓信省では関東大震災の教訓から震災後の建物は鉄筋コンクリート造で設計する方針となり本建物も前記＊１＊２に継いで鉄筋コンクリート造が採用されているが、上記の調査結果の事もあり構造調査を改めて行った。その結果、幸いにも躯体の劣化・コンクリートの中性化・鉄筋の腐食は比較的軽微であり構造耐力に影響



烏丸通からの外観（撮影　木田勝久／木田写真事務所）



屋上（北西）から中庭（夜景）（撮影　同左）

を及ぼさない程度であった。またコンクリートの一軸圧縮強度は一期工事部分が平均23N/mm²、二期工事部分が17N/mm²、鉄筋は降伏点平均が306N/mm²、引張強さ平均が441N/mm²と、予想以上の強度の発現が確認できた。この調査結果及び敷地境界線までの余裕が全く無い事などの諸事情を勘案し、RC耐震壁をバランス良く配置することによる補強方法を選択した。また中庭部分に増設した歩廊を全くの別構造とし、更に旧建物の腰壁（ウォールガーダー）を残すために窓台レベルまで床を上げる等、既存建物に極力負担がかからない経済的且つ合理的アイディアが設計者から提案された事もあり、この時点でようやく本計画の具現化が可能となったのであった。完成した建物のデザイン、並びにその空間構成についての評価は、識者のご判断に委ねる事として、我々にとっては当初商業事業者から「旧建物の存在」こそが、このプロジェクトの魅力の源泉であるとの申し出が有った事に端を発し、テナントからの入居の引き合いも旧建物部分に多く集まるなど、「再生保存」の手法が実社会に対して効果を発揮する事実を確認する事ができた点は大きな収穫であった。また、今後の保存を巡る判断材料の事例として皆様に参考としていただける部分が少しでもあれば幸いである。

更に、ご賢察のとおり、与条件次第で、ボリューム保存の方針を堅持する事が必ずしも容易でなかった（外壁保存を選択する）という事実も、併せてご理解いただければと思う次第である。

（執筆：かわた　ただし／執筆協力：よこた　かずのぶ）

※3　東京芸術大学の野口昌夫助教授による既存建物の有効活用の意義と活用手法の提案

「旧京都中央電話局」日本電信電話株式会社関西建築総合センタ発行
平成11年2月NTTファシリティーズ「京都烏丸保存建物（旧京都中央電話局）の保存・再生に関する報告書」監修：東京芸術大学野口昌夫助教授

建築計画

大正末期に建てられた旧京都中央電話局建物は、本施設計画の発想の原点である。長い年月で建物の随所には傷みが目立ち、解体によりその大半が失われたものの、建物が経てきた時間は何物にも代え難く、本物としての存在感をもっている。風化してもなお人々に存在感を与える本物である以上、単に修復というかたちをとったものであってはならない。そこで我々は、この重厚な歴史的意匠をもった旧い建物に対し、常に新しく生まれ変ることを意識した建物を付加することで、「伝統」と「革新」の対比と融合をテーマとしたデザインを模索した。施設構成としては、L字型の既存建物に対してコの字型に増築建物を組合せ、中庭をロの字型に囲む配置とした。中心性・求心性をもった商業空間を生み出すため、各店舗は全て外側に閉じた構成となっており、ヒューマンスケールで静寂な雰囲気をもつ外観から一歩入ると、その内側には一転して活気に満ちた空間が展開する。

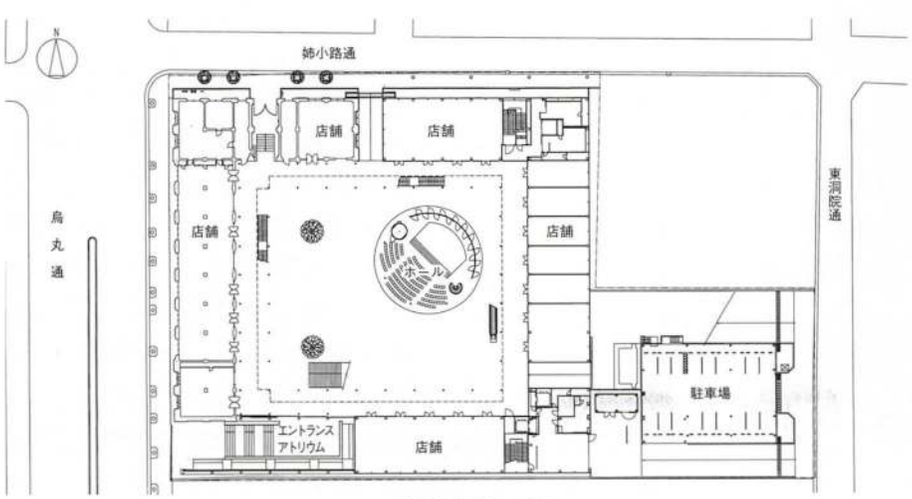
重厚な既存建物に対し、付加される増築建物は、軽さを強調したフレームで構成され、対比的な新旧2つの要素が中庭を挟んで対峙する事により施設全体の建築空間と、ボリュームに対する整合を図っている。

外観デザインも、ニュートラルに保つことで、既存建物を引き立たせるとともに、従来の街並との調和を図っている。また、外壁及びサッシは最低限の補修とクリーニング程度にとどめ、歴史の積み重ねをそのまま表現した。烏丸通りに面する既存建物に手を加えること無く、3層吹抜けのフレームで構成されたボイド空間を南側に挿入し、施設のメインエントランスとした。また、姉小路通りの外装は、ALCパネルに格子フレームとエキスパンドメタルの皮膜を重ねあわせ、できるだけボリューム感を消すことにより、伝統的街並景観との調和を試みた。

施設の中心となる中庭では、新と旧、動と静、プライベートとパブリック、クローズとオープン、仮と常といった対比が交差する。これらのハイブリッドな空間を軽やかにつなぐ歩廊と半屋外型の円形ホールを設け、融合のシンボルとし、線的なフレームと色彩により、視覚的に浮かび上がるようにしている。

既存建物の有効活用に際して最も大きな課題となったのは、耐震性能の確保と空調・電気設備のルート確保である。これらを解決するため、店舗間間仕切を耐震要素として利用するとともに、既存床の上に新たに床を設定し、各種設備の配管スペースとした。かつて交換機を収容するための機械室として使われていた大空間は、このような経緯を経て、当時の意匠と空間の特徴をそのまま活かした、最先端の店舗空間として転用することが可能となった。

（執筆：さとう　あつし）



1階平面図1：1200



鳥瞰

総合監修　NTT都市開発
設　　計　NTTファシリティーズ
　　リチャード ロジャース パートナーシップ ジャパン
所 在 地　京都市中京区烏丸通姉小路下ル場之町586-2
敷地面積　6,385.41㎡
建築面積　3,381.49㎡
延床面積　8,233.60㎡
構造規模　既存棟：RC、増築棟：S、B1F、3F
工　　期　2000年4月～2001年1月

大阪市民のシンボル的建築の保存再生

―大阪市中央公会堂―

橋本健治
坂倉・平田・青山・新日設　設計共同企業体
坂倉建築研究所

1．大阪市中央公会堂の歴史

大阪で生まれ育った一市民、岩本栄之助氏の発意と熱意、そして実現に肝心な資金の提供によって、大阪市民が誇る類いまれな宝物、「民都大阪」の時代精神がまさに面目躍如する、「大阪市中央公会堂」の歴史が始まりました。

大正７年（1918）11月17日、創建お披露目の市民観覧当日における公会堂正面の様子（写真１）は、時代を超えた都市と公共建築と市民との関係性をうかがわせます。この大正から昭和の初めにかけての近代大阪の形成期はもとより、大阪空襲を幸いにもくぐり抜けた戦後の復興期を経て今日に至るまで、公会堂は市民のためのパブリックホールとしてさまざまな役割を果たしてきました。その約80年間に延べ5000万人もの来場者を迎え、多様な要求に応え続けることができた気丈夫な性格は、その創成期から形成されました。

その設計は、明治45年（1912）の日本建築界最初の指名懸賞競技により、俊秀13人の応募案の中から選出された岡田信一郎（29歳）の案に、建築顧問辰野金吾（1854～1919）・建築監督片岡安（1876～1946）が経費その他の都合から、その意匠をそのまま採用できず多少の取捨配合が加えられました※1。工事は、財団法人公会堂建設事務所の直営工事方式により、大正２～７年（1913～1918）の５年４ケ月にもおよび、おりしも第一次世界大戦中の工費暴騰状況下、各請負者の苦心経営に支えられながら、職工延人数18万４千人を擁してこの一大事業が成し遂げられたのでした。

「大都市の公有記念建築は永遠に其の生命を保たしむるが為に堅牢質実なる永久的建築とせざるべからず、且つ外観は都市の重要なる建築としての威厳及品位なかるべからず。」※2という当時の建築関係者の高い志と有言実行が、大阪市中央公会堂の現在を裏付けています。

その主体構造は耐火耐震構造として、松杭に鉄筋コンクリート造基礎、鉄骨結構に煉瓦造・鉄網コンクリートを被覆、見えない屋根裏鉄骨架構にモルタル塗り捲き、屋根全体に葺き下砂漆喰を施し、木造小屋組み屋根天井下地すべてに塗装が施され、将来の改造・修理に対する費用の削減にも気配りされました。

その外観は赤煉瓦の中之島公会堂として永く親しまれ、その評価は「弐拾世紀日本赤煉瓦建築番付」※3における西の横綱としての登場や、新聞社による保存のための「赤煉瓦基金」をはじめ、市民や団体からの浄財寄付の活動の盛り上がりに現れています。



写真１　大阪市中央公会堂観覧当日の群集
大正７年（1918）関西建築協会雑誌代巻14号　口絵

2．秘められた「再生力」の実力

その「保存・再生」の使命とは、先人の知恵と労力の賜物である歴史的文化遺産としての公会堂の現在をじっくり把握し、その価値をこれまで以上に生かせるよう修復保全しながら、新たな活用整備を加えることによって次代に繋いでいくことにあります。

これまでの「保存」があってこそ可能な「再生」であるのは当然ですが、秘められた「再生力」の実力に助けられて「保存力」が高められるのだと考えられます。建築が社会に求めたい建築の改新という今日的課題は、その「再生力」に着目することで切り開かれることになります。大阪市中央公会堂の場合は、創建時代の基本的な構造はもとより内外の意匠や素材が全体的に良く保存されてきている事実があり、そしてなによりも、公会堂としての役割をこれまで以上に変わることなく果たしていけることが貴重です。

この建築が保持している貴重な大正期の空気やイメージは、これまでの度重なる改修・補修による改変部分を見極めて慎重に取り除き、創建時の姿に近づくことによって、公会堂としての現代に出会わせることができます。

その創建時に近づく工事とは、日々の発見や考察を通して、建築するということの軌跡、その存在の断面に立ち会う作業といえます。表面から容易には見えない痕跡や過去の記録の存在はきわめて切実な保存再生のよすがとなります。当初の素材やディテールや色彩を覆い隠している、幾重にも重ねられた時代の層ともいうべき厚い塗膜や重い汚れを落とすことで、元の表面を解放します。そこに元の色彩の光を与え、失われた造形の回復がなると、かつて設計者が考え、職人達が実現し、当時の市民が浸った空間が、目の当たりに出現し、予測を超えたその実像が明らかになってきます。磨けばさらに輝き出す資質「再生力」を備えているからだといえます。

3．コラボレーションが生んだ意匠の幅と奥行き

中央公会堂はネオルネッサンス式ともフリークラシックとも辰野式とも言われる欧風歴史様式の建築ですが、分離派から近代建築へ転換していく時代の風も感じられる簡潔な直線性、当時の現代建築としての合理性、先見性も兼ね備えています。創建時に関わった三人の建築家をはじめ、参画した意匠家たちによるコラボレーションが生んだ意匠の幅と奥行きが特徴となっています。優れた技術者や職人の技量、良い材料の存在が、それらを支えています。

品質の良い化粧煉瓦と最上の仕事といえる覆輪目地、擬石モルタル洗出しの緻密な造形、大アーチ頂上の銅板にて打出したる神像、貴重なサッシバーや金物類、構造体が漆喰塗り仕上げの直天井・梁型・壁・柱型、木組下地に漆喰塗りや折り上げ格縁板張り天井、木彫と石膏型が織なす繰り型・装飾造形と随所の金箔押し・要所相応の柱頭飾り、プロセニアムの伎楽面、見事な擬大理石塗りの柱・腰壁、重厚で良質な木造作、油絵の大天井画・壁画、多彩な刺繍装飾、独創的で効果的なステンドグラス、類なき装飾灯具、華麗な飾り幕、精緻な鍛造手摺、堅牢な木造床組みの寄木床、貴重な天然アスファルト塗り床、随所にみられる換気の工夫等々。よく考えぬかれた構造・意匠・設備のモノたちが、「ホゾンサイセイスルホカナシ」と見るものに迫ってくるようです。

そこに、現代の建築に要求される水準の耐震性能・空調・照明・音響・昇降機・舞台機構・給排水衛生電気の諸設備を導入する「保存再生」は、いわば生身の体に新しい骨・血管・神経を挿入するがごとき困難な手術にも似ています。その術後の表層に見える側と見えない背面側との新旧が併存する断面の様相は、保存再生建築が未来的存在となる状況を暗示しています。

4．「建築の改新」の時代のさきがけ

「保存」とは文字どおり「たもって、失わない」ことですが、現代の都市に立脚しながら建築物が目的どおり永く生き続けるには、「保存」とその魅力を活用する「整備」とが共生する保存再生に取り組むほかありません。中央公会堂の保存・再生工事は、外観及び内部の主要な部屋や共用部分の保存修復を基本としています。その上で、損なわれた改変部分の復元整備及び現代が求める性能改善や諸室の再構成等の活用整備を加え、それらが全体として違和感のない並存関係やほどよい緊張関係を保ち、全体が保存再生というひとつの新たな現代建築としての創生となっています。(図1)

中之島の再開発構想から30年、保存運動、市の永久保存表明、委員会の答申、公募型設計プロポーザル、免震構法の技術革新等々、時代の風に乗って保存再生の機会到来を掴むことができた時運の流れは、これまでに述べた中央公会堂自身がもつ建築力、それを支えた民都大阪という都市力あってこその結果といえるでしょう。望ましき建築の持続的ありようがごく普通になるような社会の到来を図ることを建築の改新と呼ぶとすれば、2002年秋に完成予定の「大阪市中央公会堂　保存・再生プロジェクト」が、その「建築の改新」の時代のさきがけになるのではと予感しています。　(はしもと　けんじ)

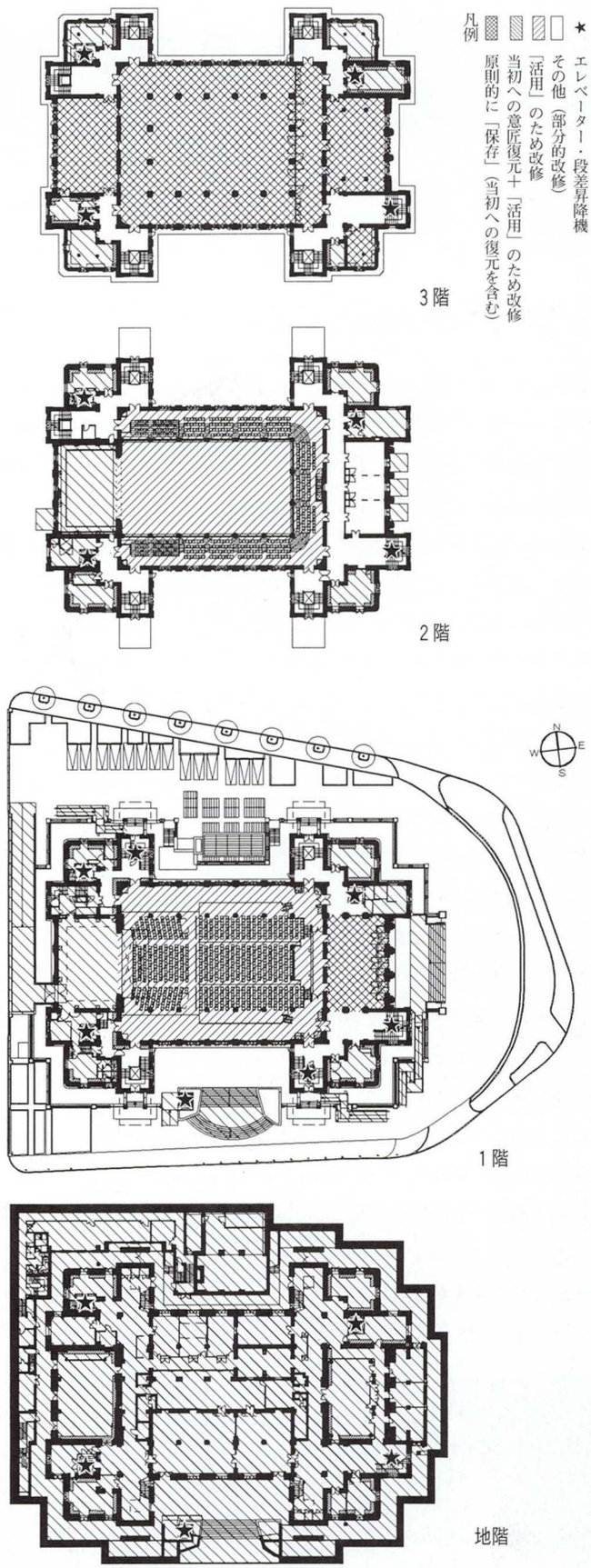


図1　保存・再生工事の全体概要
平成13年（2001）「大阪市中央公会堂保存・再生プロジェクト」パンフレット「大正浪漫を次世代に」

※1　大正4年（1915）建築雑誌339号　大阪公会堂工事概況
※2　大正7年（1918）関西建築協会雑誌第1集14号
「大阪市中央公会堂ー建築工事に就いて」谷民蔵
※3　平成12年（2000）勧進元：赤煉瓦ネットワーク

関連資料掲載：
①平成11年（1999）「建築と社会」2月号　計画概要
②平成12年（2000）「ビルディングレター」4月号　免震レトロフィット

古民家の移築再生の技法

木下龍一
一級建築士事務所アトリエRYO

1．移築対象民家との出会い

民家の移築再生は、まず建築行為の中では、必要以上に頻繁に発生するものではない。出来れば、民家はその存続する場所で修理再生されるのが原則であり、例外として何らかの必然性を伴う場合のみ、場所を移して再建されるべきものだと考える。

1976年、私が最初に遭遇した事例のように、国道拡幅のために取り壊される運命にあったものや、伊香造民家の多い滋賀県湖北地方での民家建て替えの際、同一敷地に2つの主屋を持ってはならないという禁忌の存在により発生する例、相続税支払いのため、民家の底地が分割され保存不可能になったものなど、やむを得ない事情で新築が条件づけられる場合に限って発生する。そこにおいても、代々愛情を持って保存してきたが、どうしても壊さざるを得ないので、「嫁」にもらってほしいなど、現住者の保存の意思、温かい心があり、それを受ける新しい建主の気持ち、受け入れる環境があってこそ、移築再生が成立する。

しかしながら実際に移築が計画され、実測調査、解体作業などのプロセスを体験すると、民家を現地で再生する場合と比較して、もう一段別次元の出来事、民家建築の存在の本質に真近く接近し、より深い認識が生まれる事態が発生することになる。つまり調査記録し、番付をうって、組んだ順番と逆に解いていくと、木の骨組みのそれぞれの仕口、継ぎ手の強さ、仕組みあるいは壁下地（竹小舞や貫）の抵抗、込み栓やホゾのきき具合などが体感され、家の構造が総合的に理解できるようになる。建物の状態を診断し、健康を回復するために、どの部分を補修し組み直していくか、修復の技法を学習するまたとない機会でもある。

「一度解いてまた組む」双方向の体験は、木材の質料、断面の大きさ、長さなどと結節点の仕口の種類、組み方、架構法などがまとまった固有のバイブレーションを持つ有機体として、人に直感されることを可能にすると考えられる。従って職人、建築家、居住者など誰にとっても民家移築の機会は、時間を超えた建築体験の希有な出来事として、共有される貴重なものだ。解体の途中で民家の新しい機能や空間のあり方を発見することもよくあり、自然を対象とした先達の創造的建築技術が言葉を介することなく、じかに我々の身体に伝承され得る貴重な場と考える。

2．調査・記録

私は民家を調査する中で、木の骨組みの詳細を測定することの他に、住み手（現住者）のヒアリングを大切にし、調査表にまとめることにしている。家名、家の歴史、出自、建物の歴史、部屋の呼称、使われ方、家の祭祀、共同体との諸関係、年中行事など家や家族の社会文化的背景について出来るだけ情報を採集すべきだと思っている。

単純な平面での空間のそれぞれの部位は多目的な使われ方をしていて、その重なりや分節の状態を詳しく聞いておくことは、再生のプログラムにとって重要な意味を持つ。集落の行事や家の由来、部屋の呼称などについて興味ある意見は、家の年長者ほど豊富に楽しそうに物語られることが多く、家族と共同体、そして出来事の記憶はその場でこそ鮮明に想像されるようだ。また移築した後も、案内があれば必ず訪問されて思い出話をされることが多々あり、「嫁」に出した古民家には、必ず元住民を招待するという慣習は今後も続けていきたいと思う。



移築前：旧平井家主屋（滋賀県伊香郡）



移築後：ビラ・ド・カンパーニュ（山梨県）

3．解体

実測調査し平面図をおこし、その記録を基に解体現場で民家の木造骨組み１本１本に番付を打つ。京都周辺では東南隅より桁行方向に１、２、３……、梁行方向にイ、ロ、ハ……の通り名をつけ、交差点の柱をイ－１、ロ－２などと木札に墨書して釘止めする。原則として、柱や梁の南面の見え掛かりに化粧部をはずして番札を打つ。各他方で大工の番付方法が違っている場合があるが、その場所で当初より採用されている方式に従うか、または常に作法的に一貫して行うことも考えうる方法である。

木構造の骨組みを解体することを解（ほど）くというが、基本的に大きな断面の柱に梁や胴差しが大入れ（追入れ）になったものを、鼻栓を抜き柱を開かせて徐々に抜いていく。柱面から突出する４、５寸もあるホゾの長さや横架材の荷重を支え、圧縮と引っ張りに抵抗し、ネジレを拘束する太柱に刻まれた三重の仕口の精密さは、その解きづらさによって反対にその構造的機能をよく証明している。ホゾや仕口が破損していると楽々と解くことが出来る。壁を取り除いた後、木軸や架構だけで水平に重機で何トンもの力で引っ張っても、耐えうる抵抗力が存在している事実は、各接点の複合的に柔剛接された総合耐力として理解出来る。

構造材としては、建物の内側によるほど大きな部材を用いること、民家の平面形式において大きく分割される土間と板敷きの境界に全体の荷重の重心が座っていて、大きな水平力に抵抗する柱梁組みがその周辺で何重にも組まれていること、とくに大黒柱や小黒柱を中心で貫く胴差しが、柱の四方、三方あるいは両側に継がれる時、仕口は柱を一尺以上貫通して差し違え、上方からシャチ栓止めされているのがほとんどの事例で判明している。そこでは、柱断面の大きさと横架材の水平距離が比較的に短いため、頭部の重い民家架構も柱が座屈することなく、頑丈に垂直から水平方向への流れを変え、周辺部の短柱に力を細分伝達する。そこではラーメン構造のように剛接されながら、摩擦で拘束された接点の角度を柔軟に擦りたわませ、変化する力を周辺部に分配していると考えられる。一本の柱が礎石から外れると、その周辺の柱が全体を支え、外れた柱を逆吊りに支持することもある。柱が礎石からずれたり傾いたりすると、力の流れが変化する構造体は、ほとんど生き物のようにとらえられたりする。極度の縦振動には、飛び上がって免震するという最近の振動実験結果も、この民家解体の際に堅固な一体感の強い構造体として検証される。それは主要な垂直、水平架構と補助材が見事に配分組織され、緊密に連結されている結果と考える。

民家架構の美しさは、ただ部材の大きさや銘木としての輝きよりも、構造的な力の流れ、均整のとれた木割工法にその源泉があると考えられる。解体作業のプロセスや搬送、保管する補助作業の中でも十分に、仕口の仕様や古材の質量、形状などが伝達されていく。解体後、長期的に保管する場合は、土や埃は落としても、長年染み着いた煤はそのままにしておいた方が良いのだが、修理や再架構の場合は、清掃し植物油などで油拭きをする。この時、部材一本一本の形状や仕口、ホゾの様子が再確認出来る。不要になった仕口の痕跡を埋木したり、またそのまま化粧で表したりすることも、民家再生の手法として、新しい木の架構では表現出来ない時間の表象として認めることが出来る。

実測調査の結果を記録するのは、平面図、断面図、軸組図、矩計図を基本的に１/30、１/50の縮尺で記録し、樹種、破損状況、痕跡など同時に記録する。古民家には、長年の住まい方の変遷により改造が加えられており、内装や間仕切りが取り払われた時、様々な痕跡が発見される。後世に追加された柱や壁、建具などが取り払われると、大体民家の創建当初の姿が創造出来るようになる。この原形を復元して平面図と架構図を記録しておくことは、再生計画への橋渡し作業として貴重な行程となる。場合によって原初形よりも変遷途中の最盛期の形を再生計画の基本形に採用する場合もあるが、一度は復元した姿に戻して比較検討することが重要である。その民家固有の価値を描きだすために、歴史的変化のプロセスを新しい建主、各職方とともに認識しておく必要がある。民家の調査では、棟札により建築の年代が確定出来るもの、棟札がなくて部材の裏面の墨書を発見できるもの、他の文書古物類から建築年代を推定しておくことも必要な準備作業と思われる。

4．再生計画

建主が出現し、立地条件と要望、予算などが提示されると調査記録された民家をベースに現代の機能的条件と環境的条件などを配慮したプログラムを建主と共同で制作していく。プログラムソフトが空間へと構造化する契機は、調査記録された対象民家の構造の中に種々な様態で存在していると思われる。私達の民家構造の理解は、プログラムの指標のとり方によって、様々な空間の形を生む母体＝ディナミスととらえることが出来ると思う。古民家の存在が既存の事物でありながら、私達の空間創造力を刺激し続けていると感じられるその根拠は、人間自身の存在に深く関与しているからに相違ないと思わざるをえない。したがって民家の材料やディメンションは限定されるが、地球上のあらゆる事象と開かれた関係が成立すると考えられる。もちろん、環境工学的技術やエコロジー、ハイ／ローテクノロジーとの共存の可能性は疑う余地もない。

風土に対応し、地域独自の形態で飾り付けを持っていたものを他所に移設する場合には、まず気候条件、周辺の景観的条件、新しく負わされる建物の任務、性格との関係を考慮し、創造的にデザインすることが肝要と思われる。もちろん、その中に伝統の形を復元することも一つの選択肢と考える。

建築基準法第22条のかかる地域への移築は、とくに注意する必要がある。現在では、伝統的材料を代替する不燃性の適材は未だ開発されていない。したがって他の伝統的不燃材料（日本瓦、銅板など）や現代的屋根材料（新金属材、スレート屋根材など）を採用するほかないが、その場合、材質に応じた勾配や形態を選ぶ必要があり、当然建物の用途、小屋組架構や内部空間との関係を再検討し、総合的にデザインすることが要求される。

（きのした　りょういち）

「建築雑誌」2000. Vol.115（P24～P27）より抜粋

舞鶴市赤煉瓦建築物の保存・再生

―赤煉瓦倶楽部・舞鶴―

馬場英男

非営利活動法人 赤煉瓦倶楽部・舞鶴　理事兼事務局長

1．はじめに

赤煉瓦倶楽部舞鶴は、1990（平成２）年に発足、10年間の活動を経て昨年８月に京都府から特定非営利活動法人いわゆるNPO法人に認証された。今回、当倶楽部が目指している舞鶴市での「赤煉瓦を生かしたまちづくり」活動を広く知っていただく絶好の機会ととらえ、投稿させていただいた。

振り返ってみると、高度経済成長の時代、全国で貴重な歴史的建造物が取り壊された。保存に向けた各地の運動も、大きな波に飲み込まれてきたのが現状である。事実、舞鶴市でも、港湾、道路等の公共事業の名の下、貴重な建造物が取り壊されてきた。

しかし、舞鶴市では十年ほど前から、それまで見向きもされなかった、明治から昭和初期にかけて多く建てられた赤煉瓦建物を、まちづくりに生かそうという市民運動の高まりが行政を動かした。取り壊しを予定していた２棟の赤煉瓦建物を、見事にユニークな博物館として、また、市民の憩いの場として再生したのである。

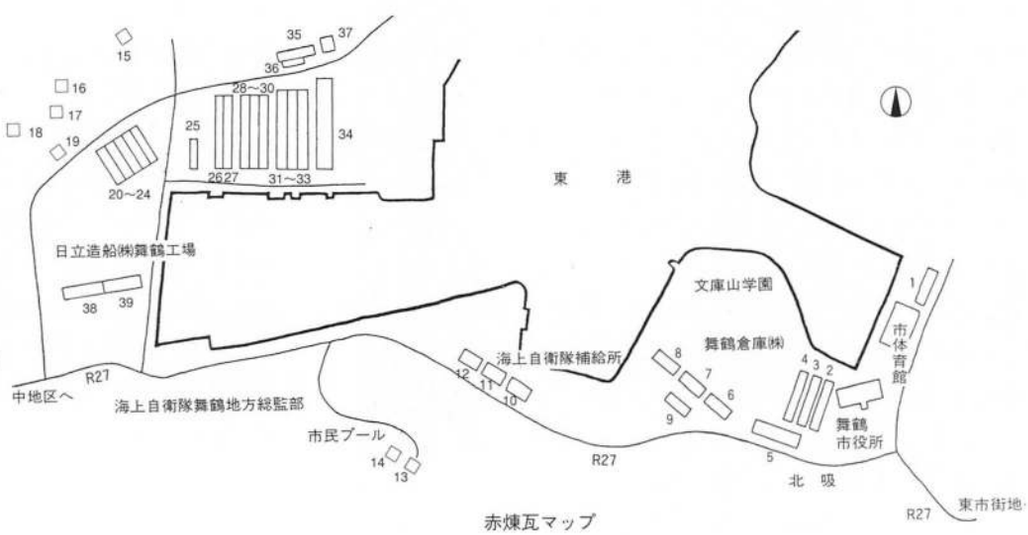
2．「まいづる建築探偵団」の誕生

事の起こりは、1988（昭和63）年、舞鶴市の将来像を策定しようと、市職員の自主研究グループ「まちづくり研究会」が発足したことに始まる。筆者所属の「都市の個性化」分科会は、従来と異なる市のイメージ形成の研究を進めていたが、翌年の３月に、先進地視察に横浜市を選んだ。まず、「横浜市まちづくり研究会」を訪ね、先駆的なまちづくり事例の視察をお願いした。情報交換の中で、新港埠頭にある赤煉瓦倉庫をメインとした再開発事業「赤煉瓦パーク構想」について興味をもち、翌日の視察地に赤煉瓦倉庫の見学をお願いした。この赤煉瓦との出会いが、以後の活動の大きなヒントとなった。舞鶴に多数存在する赤煉瓦倉庫をまちづくりに生かせるのではないだろうかと。

まず、その年のクリスマス前に市所有の赤煉瓦倉庫のライトアップを企画した。当時、建物をライトアップする珍しさも手伝い、市民の反響は予想を超えるものであった。注目されだすと、舞鶴の赤煉瓦についての歴史的・建築学的裏付けが必要となり、様々な調査研究を目的に「まいづる建築探偵団」を発足させた。1990（平成２）年４月のことである。この調査の過程で特筆すべき出来事があった。市の最西端に位置する神崎地区で、ドイツ人が考案したというホフマン式輪窯を発見（現在わが国に４基しか現存していない。後に国の登録有形文化財に登録）したことで、ますます調査に拍車がかかることとなった。

3．「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」

また、横浜とは視察が縁となり交流を深め、全国の赤煉瓦に縁のある都市を繋ぐ組織づくりを真剣に考えていた。とうとう、同年11月、舞鶴と横浜で進めていた赤煉瓦ネットワーク準備会等の主催で「第一回赤煉瓦シンポジウムin舞鶴」を開催することとなった。一方、これに合わせ、市内に約60の赤煉瓦建造物を赤煉瓦マップにして紹介しようと作成を急いだ。当日、全国19都市から約50名が参加したのは意外であった。会場は多くの市民の参加で、かつてない盛り上がりとなり、赤煉瓦の保存とまちづくりに関して熱っぽく語り合った。翌日には、市内の赤煉瓦建物の見学会を実施したことによ



1　赤れんが博物館（M36）
2　市政記念館（M35）
3～8　舞鶴倉庫㈱倉庫（M35～T7）
9～12　海上自衛隊倉庫（M34～T10）
13～14　北吸配水池（M34）
15　舞鶴設計所（M35）
16～19　日立造船㈱倉庫（M35～T7）
20～24　日立造船㈱工場（T9～T10）
25　ニチゾウテック工場（日立造船㈱内）（M36）
26～35　日立造船㈱工場（M36～T12）
36～39　日立造船㈱倉庫（M36～T8）

※（　）内は建築年、M＝明治、T＝大正

赤煉瓦マップ

り、その存在が広く知られるようになった。

シンポジウムで要望の強かった市民参加による組織が、1991（平成３）年６月に会員約150名の参加で発足した。「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」と名づけ、活動内容の主なものは、季刊報の発行、講演会の開催、各地の視察やイベントの開催、さらに同年10月に発足した「赤煉瓦ネットワーク」との交流とした。特にユニークなのは、1991年から毎年夏に赤煉瓦倉庫群野外特設会場で開催している赤煉瓦ジャズ祭で、今では、市の恒例のイベントとして定着し、赤煉瓦のPRに一役買っている。本年11回目を迎え、多くの聴衆で賑わった。

４．赤煉瓦建築物の再生

こうした市民の盛り上がりに注目した舞鶴市は、長年放置されていた国所有の赤煉瓦倉庫（明治36年建設）の調査を行った。結果、わが国最古級の鉄骨煉瓦造で、歴史的・構造学的に大変貴重なものであることが判明し、一転して保存の方向に舵をきることになった。

さっそく、この赤煉瓦倉庫を改修して「赤れんが博物館」（フランス積二階建、延床面積842㎡）に再生活用することを、市制50周年記念事業のメイン事業に決定した。

1992（平成４）年10月に起工し、翌年の11月に完成オープンした。煉瓦をテーマにしたものとして世界に類の無いユニークな博物館といわれている。これまでに、国内では銀座れんが街、東京駅など、国外では、門外不出の万里の長城の特大煉瓦、エジプトの日干し煉瓦など世界四大文明発祥の地の煉瓦をはじめ、ガウディー設計コロニア・グエル地下聖堂、ハンプトン・コート宮殿の煉瓦など36カ国、約850点（平成13年７月時点）もの煉瓦が集まっている。入場者は日平均約190人で、本年５月に50万人目を迎えた。

さらに翌年の1994（平成６年）10月には、第二弾として、舞鶴市役所の書類倉庫であった赤煉瓦倉庫（明治35年建設）を「市政記念館」（イギリス積二階建、延床面積1,204㎡）として改修オープンした。この記念館には、一階に市民サロン、200人収容の多目的ホール、喫茶コーナーを、二階にはギャラリー、近代の歴史展示コーナーを設けている。市民のふれ合いと交流の場として、利用が高く、人気スポットの一つとなっている。

５．まちのイメージが変った

さらに、民間倉庫会社や海上自衛隊もこうした動きに敏感に反応し、所有の赤煉瓦倉庫をライトアップしたりと、舞鶴の様々な企業や関係団体が、赤煉瓦をキーワードとしたまちづくりに向けて一丸となり始めた。もちろん、地元の商人もこうした動きを見逃さなかった。次々と赤煉瓦に関係する名前を冠したお菓子やお酒など多数誕生している。

このように、当初、市民の意識に根強く潜んでいた、暗い、灰色の街というマイナスイメージから、ほんの８年間の活動を通して、赤煉瓦の街のプラスイメージへの転換が少しづつ進んできている。服飾デザイナーのコシノジュンコさんは舞鶴に縁があり、「まいづる大使」に任命されている。市内を視察された舞鶴の印象として、「舞鶴の色は」との問いに「赤煉瓦の色」と即座に答えられた。

６．おわりに

1996（平成８）年、財団法人日本ナショナルトラストの観光資源保護調査が実施された。調査の結果、煉瓦建造物の総数が一気に114件となった。調査報告書には、「全国でも屈指の質と量を誇る『赤煉瓦建造物群』が現存している。舞鶴市は２棟を転活用する保存・活用を進め、市民も『赤煉瓦ジャズ祭』を行うなど積極的に『赤れんがのまちづくり』を推進している。（中略）調査が進むにつれて、舞鶴に現存する赤煉瓦建造物が実に多種、多様にわたり、その技術的水準の高さも驚かされることが多くあった。」と記されている。そして、将来像として、「赤煉瓦地域博物館（フィールドミュージアム）構想」を柱として、保存活用に努め、地域（舞鶴市）全体を赤煉瓦建造物の博物館としては、と提言している。まさに、当会が追い求めてきた「赤煉瓦のまち・舞鶴」が現実のものになる日も決して遠くないと確信している。

この報告が、都市に訳あって現存してきた各時代の宝物を再発見し磨きをかけ、次の世代に引き継いでいく建築の再生事例として、参考になれば幸いである。

（ばば　ひでお）



赤煉瓦倉庫群野外特設会場での「赤煉瓦ジャズ祭」



赤煉瓦倉庫を改修した「赤れんが博物館」

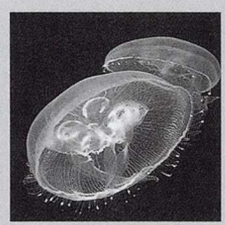
器 UTSUWA

Shiomi Kouichiro
塩見 浩一郎 KAJIMA DESIGN KANSAI

膜

形なきもの

テフロン膜は単体では形を保てず、建築材料としては極めて不定形な素材である。にもかかわらずそれが屋根材として用いられる場合には、れっきとした構造材としての役割を果たす。ワイヤーや鉄骨架構によって膜面全体に適切な張力を入れることによって、純粋幾何学の法則に沿った三次曲面にその形を委ねる。厚みわずか0.8mm、重さ1.3kg／㎡という材料特性が、重力という本来構造材が逃れることのできないシガラミからこの素材を解放し、自由な形態への発想を可能とする。ガラス繊維をテフロンコーティングするという技術によって屋根としての恒久使用が定着はしたものの、元来遊牧民族の“包（パオ）”を起源とする膜構造は「形をもたない」という素材自身の性質同様、ゆらめく一瞬を捉えた仮の姿というイメージがついてまわる。そこにこの素材の面白さがある。

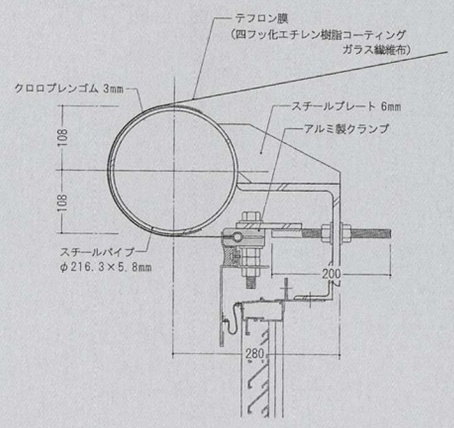


第三の光

テフロン膜で覆われた空間は屋外感覚に近いとはいうものの、あくまで屋外的な光環境の擬似であり、山や空、川や大地といった無限の配色から発せられた光の集合体を浴びる屋外とは明らかに異なる。むしろ白い天井一面を光らせる間接照明に似た、影を生じる事のない全方位的面光源である。さらにテフロン膜というフィルターは自然光に匹敵する光量を透過するにもかかわらず、自然の持つ時間的要素—「移ろい」「ゆらぎ」といった不確定性や曖昧性—は濾過してしまうようである。つまりわれわれは「色」や「動き」が排除された「明るさ」という極めて純粋な静的成分のみを享受することになる。太陽光はテフロン膜への透過と反射によってその特性を変え、自然光（有機的）でも人工光（無機的）でもない第三の光となって我々に降りそそいだとも言い換えることができよう。

「快楽」の空間

大空間はひとつのシステムである。合理的な架構システムは同時にデザイン的にも美しい。テフロン膜で形づくられる大空間はいずれもその架構システムが膜材という面光源を背景にクッキリと浮かびあがる。そのため空間を成り立たせる「用」「強」「美」のバランスが一度に把握できるという特徴をもつ。見事にバランスのとれた空間に身を置くとき、それを成立させているテクノロジーの総体が瞬時に見て取れる。精神的高揚感ともいうべき「快楽」中枢に直接信号が送られたような感覚を得るといっても過言ではない。こういった感覚はスポーツや祝祭といった古代から連綿と受け継がれた人類の営みとは決して無関係ではない。新しい素材が人間本来のアクティビティーを際立たせることもあるという、単なる「器作り」を超えた建築の可能性をも同時に示唆している。



膜尻の張力導入機構



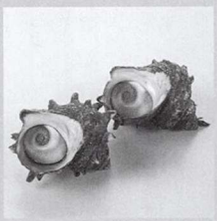
テフロン膜の内部空間

「素材と技術が生み出すdesign」は、相対する素材や存在を対比させることにより、多様な考え方を許容すると共に、そこから見い出せる新たな可能性を追求する。今回は、空間を包み込む外皮を「器」として提起した。建築に求める機能は時代と共に変遷する。今の時代に求められる内部と外部の接点となる境界部分とはどういうものだろうか。2つの事例を対比して、人と環境と建築の在り方を考えてみたい。

（「素材と技術が生み出すdesign」幹事会）

殻

デザイン・構造研究所　大氏（Ouji）　正嗣（Masashi）



コアなるもの

シェルターたる機能を唯一求められた時代から、多様な要求を一身に受けるようになった建築は、今や最小限の防御機能を備えるのみで、視覚的にも・精神的にも開放され続けている。建物の内外を繋ぐ行為は、私たちに満足だけでなく、この上ない苦痛を与えることもある。それは、多様な価値観を有することを認める社会が広がったことで、初めて主張することができる内容なのかもしれない。

建築を鉄やコンクリートの硬い殻により包み切る。その行為は、明るく柔らかな空間を意味するものではない。しかし、特定の状況下においてそれは重大な意味を持つ。硬い殻で覆われるからこそ意味を持つ空間がある。そして、その事実が生み出す空間の機微が私たちにも認知できるはずである。

射し込む光

夜は部屋のカーテンを閉める。それは、眠るという生理的要求に基づいた行為である。外部から光や音（完全ではないにしても）を遮ってくれる。カーテンがある故に朝、カーテンの隙間からこぼれる光は、何者にも代え難く鮮烈である。そして、目覚めたあとは日の光を家の中に導き入れることを私たちは想像する。しかし、昼間でも照明を必要とするような空間において、一面の窓から射し込む光にどのような意味があるというのだろうか。

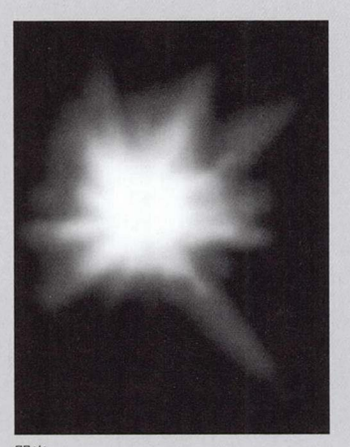
それよりは、何もかもを覆い尽くす外皮が存在し、そこに必要最小限の外部との連絡孔を取る。そこから差し込む光は、私たちのなじみ深い何もかもが緩やかに、いや曖昧に存在する空間の境界を、明確に暴き立てる。厳しいものかもしれない。しかし、それは緩やかでありながらも絶え間なき刺激を与えられ続ける私たちに、何よりも光という存在のリアリティを感じさせる。

定常に生きる非定常

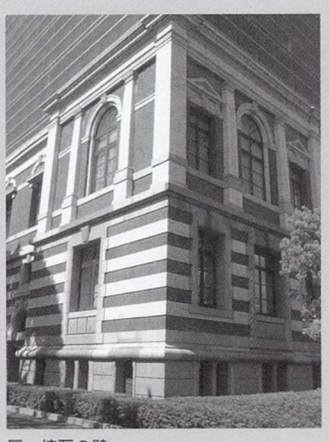
自然や社会は、つかみどころのない非定常な存在である。そうした社会に包まれている人間たちは、常に自分の位置を探し続けている。そのポジションは仕事との関わりで見つけられるのかもしれないし、あるいは家庭に見いだせるかもしれない。または自分自身の個の中にあるのかもしれない。

その定常たるベースと建築はどう関わるのか。そこには、不動の価値と不変の形が存在し、明確な定常があるからこそ、社会の非定常を澱みなく、真っ直ぐ捉えることができるのではないだろうか。

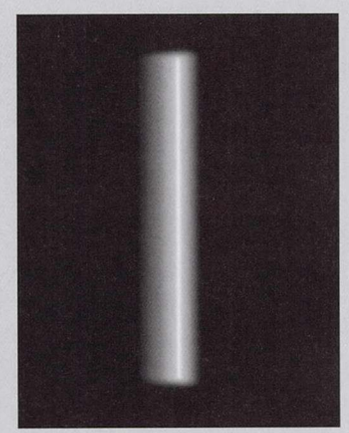
そして、情報の波に惑わされることの多い現代社会において、曖昧ではなく確実なものを作り出すことに、重要な意義が見い出せはしないだろうか。



閃光



厚い煉瓦の壁



隙間から差し込む光

建設リサイクル法「解体業登録制度」

神田孝志
大阪府建築都市部建築振興課建設業許可グループ主査

建設廃棄物は、産業廃棄物全体の排出量の約2割、最終処分量の約4割、不法投棄に至っては約9割を占めている。建築解体廃棄物については、昭和40年代以降に急増した建築物が更新期を迎え、今後発生量が急増することが予想される（**図1**）。また、最終処分場については残余容量が逼迫しており、残余年数が全国で3.1年、近畿圏では3.2年となっている（**表1**）。

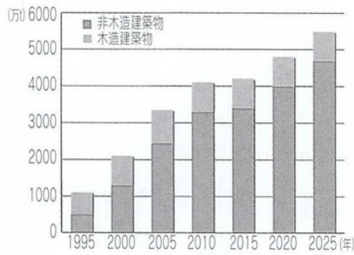


図1　建築解体廃棄物発生量の将来推計

表1　最終処分場の残存容量及び残余年数

区分	最終処分量（万t）	残存容量（万㎥）	残余年数（年）
首都圏	1,923	1,405	0.7
近畿圏	985	3,178	3.2
全国	6,700	21,004	3.1

出典：旧厚生省調査（平成10年4月1日現在）

このような状況の下、平成12年5月31日に「建設工事に係る資材の再資源化等に関する法律」が制定・公布された。いわゆる「建設リサイクル法」である。建設リサイクル法は、上記のような状況を打開するために、①コンクリート②コンクリート及び鉄からなる建設資材（鉄筋コンクリート板等）③アスファルト・コンクリート④木材一の4品目を特定建設資材として指定し、これらについての分別解体及び再資源化等を義務づけたものである。

この法律の目的を果たすための措置の一つとして、従来は建設業の許可が不要であった軽微な工事のみを請け負う者も、解体工事を請け負う場合には、解体工事業を営む者として登録を受けなければならない制度が平成13年5月30日に施行された。

解体工事業の登録制度

建設リサイクル法の制定により、解体工事業を営む場合は、建設業許可（土木工事業、建築工事業、とび・土工工事業の3業種）を取得するか、解体工事業の登録を受けるかのいずれかが必要となる。

解体工事業の登録を受けるためには、解体工事において分別解体及び再資源化等が適正に実施されるように技術上の管理をつかさどる技術管理者を選び、解体工事を行う区域を管轄する都道府県知事ごとに登録を受けなければならない（法第21条第1項）。登録を受けないで解体工事を行った場合は、1年以下の懲役または50万円以下の罰金が科せられる（法第48条）。

解体工事業の登録と建設業の許可との関係

建設業法では、1件の請負金額が500万円未満（建築工事の場合は1,500万円未満）の軽微な工事のみを請け負う者を建設業許可の対象外とし、解体工事は新築工事等に付随するものとして取り扱っており、解体工事業という業種区分を設けているわけではない。

これに対して、解体工事業の登録は、解体工事の適正な施工を確保するという目的のもとに解体工事業という建設業法上の業種区分（28業種）にはない業種概念を新たに設け、建設業法の許可が対象としない比較的小規模な解体工事業者について最低限の資質・技術力を確保するために登録を行うものであり、建設業法に基づく許可制度の特例的な位置づけをもつものといえる（**表2**）。

500万円（建築工事の場合は1,500万円）

建築物等の解体工事のうち軽微な工事のみを請け負う場合	土木工事業に属する解体工事 建築工事業に属する解体工事 とび・土工工事業に属する解体工事
⇩ 解体工事業の登録が必要	⇩ 建設業の許可が必要 （工事の種類に応じて土木工事業、建築工事業、とび・土工工事業のいずれかの許可が必要）

※軽微な工事とは解体工事を含む建築一式工事の場合は1,500万円未満の請負工事で、その他の解体工事は500万円未満の請負工事になる。
※解体工事のみを行う場合は「とび・土工工事業」の許可が必要。

表2　建設リサイクル法施行後の解体工事業の登録と建設業の許可

登録のための要件

解体工事業の登録を行うにあたっては、いくつかの要件が求められる。それは、技術管理者を選任することなど、下記にあるような事項に該当していないことである。また、登録申請書類等に虚偽の記載があったり、重要な事実の記載がなかったりしたときは、登録を受けることはできない（法第24条第1項）。

《登録拒否事由》

(1)解体工事業の登録を取り消された日から2年を経過していない者
(2)解体工事業の業務停止を命ぜられ、停止期間が経過していない者
(3)解体工事業の登録を取り消された法人において、その処分日の前30日以内に役員であり、かつ処分日から2年を経過していない者
(4)建設リサイクル法に違反して罰金以上の刑罰を受け、その執行が終わってから2年を経過していない者
(5)解体工事業者が法人の場合、役員の中に、上記(1)～(4)のいずれかに該当する者がいるとき
(6)解体工事業者が未成年で、法定代理人を立てている場合、法定代理人が上記(1)～(4)のいずれかに該当するとき
(7)法第31条に規定する者（技術管理者）を選定していない者

《技術管理者の要件》

技術管理者は、1）の実務経験者あるいは2）の資格を有していなければならない（**表3**）。

表3　技術管理者の要件

1）実務経験者

学歴＼実務経験年数	解体工事業登録	国土交通大臣指定講習受講者[注2]
一定の学科[注1]を履修した大学・高専卒業者	2年	1年
一定の学科を履修した高校卒業者	4年	3年
上記以外	8年	7年

注1）一定の学科とは、土木工学（農業土木、鉱山土木、森林土木、砂防、治山、緑地または造園に関する学科を含む）、建築学、都市工学、衛生工学または交通工学に関する学科
注2）講習については、㈳全国解体工事業団体連合会が実施する解体工事施工技術講習
注3）解体工事施工技士試験は、㈳全国解体工事業団体連合会が実施する試験

2）有資格者

●建設業法による技術検定 一級建設機械施工、二級建設機械施工（「第一種」、「第二種」）、一級土木施工管理、二級土木施工管理（「土木」）、一級建築施工管理、二級建築施工管理（「建築」、「躯体」）
●技術士法による第二次試験 技術士（「建設部門」）
●建築士法による建築士 一級建築士、二級建築士
●職業能力開発促進法による技能検定 一級とび・とび工、二級とび＋解体工事経験1年、二級とび工＋解体工事経験1年
●国土交通大臣が指定する試験 解体工事施工技士試験合格者[注3]

解体工事業の登録の有効期間は5年間で、5年ごとに更新しなければならない（法第21条第2項）。なお大阪府の登録申請は、大阪府建築都市部建築振興課建設業許可グループ（06－6941－0351）へ。

（かんだ　たかし）

高強度コンクリート使用ＲＣ部材における
曲げひび割れ時引張鉄筋応力ジャンピング問題

六車　熙
京都大学名誉教授

コンクリートの引張に対する抵抗力は、圧縮と比較して著しく小さい。そのため、コンクリート系構造については、コンクリートの引張抵抗力が直接問題となる場合を除き、これを無視して力学理論が組み立てられている。しかし、近年は高強度コンクリートの発達に伴い、コンクリートの引張抵抗力も著しく大きくなり、コンクリートのひび割れ発生による負担引張力の補強鉄筋への移行に関係する問題が顕在化してきた。その一つに、鉄筋コンクリート（以下RCと略記）部材の曲げひび割れ発生時の引張鉄筋応力のジャンピング問題がある[1)、2)]。ここでは、引張鉄筋応力のジャンピングとはいかなる現象か、何が問題となるのか、どうしたら解決できるのかを、RC長方形断面部材を例にとって述べる。

ジャンピングの発生原理

図１は、RC部材に曲げモーメントが作用した場合の任意の位置における曲げモーメントMー曲率ϕー引張鉄筋応力σ_{st}関係を示したものである。$M-\phi$曲線におけるA点は、断面引張側コンクリートに曲げひび割れが発生する直前にあたり、作用曲げモーメントは曲げひび割れモーメントM_{cr}である。このときの断面引張側に生じる引張力の大部分はコンクリートに負担され、引張鉄筋応力$_b\sigma_{st}$（A' 点応力）は無視しても差し支えないほどの大きさである。A点で曲げひび割れが発生すると、コンクリートはもはや引張力を負担できなくなって、それまで負担していた引張力は一挙に引張鉄筋に移行する。その結果、曲率はC点まで増大し、引張鉄筋応力はC' 点の応力$_a\sigma_{st}$まで急増する。ただしA点からC点への移行は、理論上は図中の点線ABCの経路をたどる。すなわち、ひび割れの伸展とともに曲率ϕは増大するが、断面抵抗モーメントはM_{cr}から下降し、再び上昇に転じてM_{cr}にもどり、C点に達して安定する。すなわち、曲線ABCはひび割れ発生直前のコンクリート全断面有効の応力分布状態から、ひび割れが伸展して安定な内部応力の釣り合いが保たれるまでの$M-\phi$関係の移行不安定領域である。これが引張鉄筋応力のジャンピング現象であって、高強度コンクリートを使用するほど、ひび割れ発生に伴うコンクリートの解放引張力が大きくなるので、同一引張鉄筋量の場合には、高強度コンクリートを使用するほど、ひび割れ発生時のジャンピング現象が大きくなって、ジャンピング後の鉄筋引張応力も大きくなる。したがって、あまりにも高強度のコンクリートを使用した場合や、高強度でなくても引張鉄筋量が少ない場合には、ひび割れ即引張鉄筋降伏といった考えてもみなかった現象が起こるのである。

なお、図１において点線ODおよびOD' は、コンクリートの引張抵抗力を無視した従来慣用の弾性解析式によるM－ϕ－σ_{st}関係計算結果であって、ジャンピング後のコンクリートの引張抵抗力を考慮したM－ϕ－σ_{st}関係と慣用式のそれとは極めて近い結果を与える。すなわち、ひび割れ発生後は、コンクリートの引張抵抗力を無視しても何ら差し支えないのである。

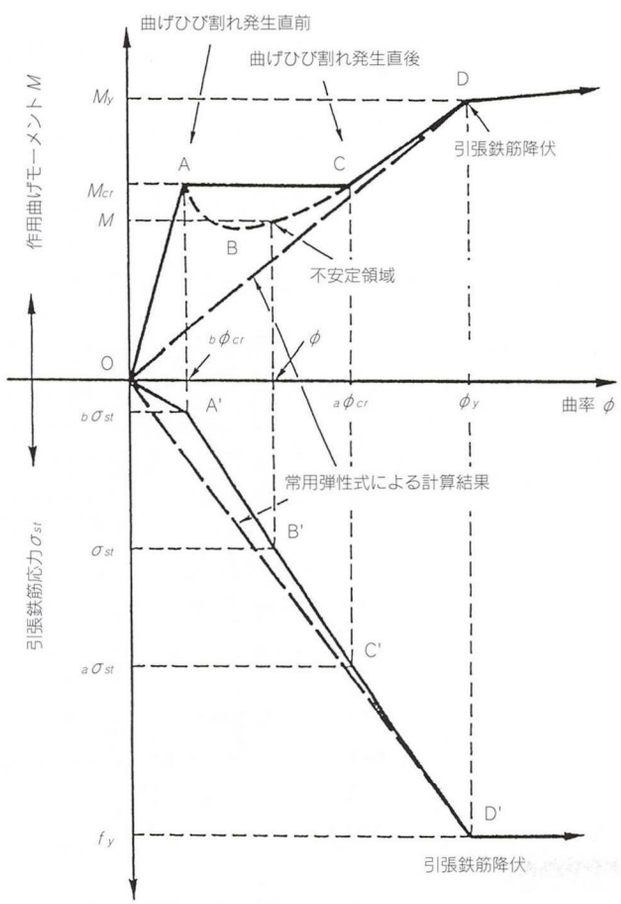
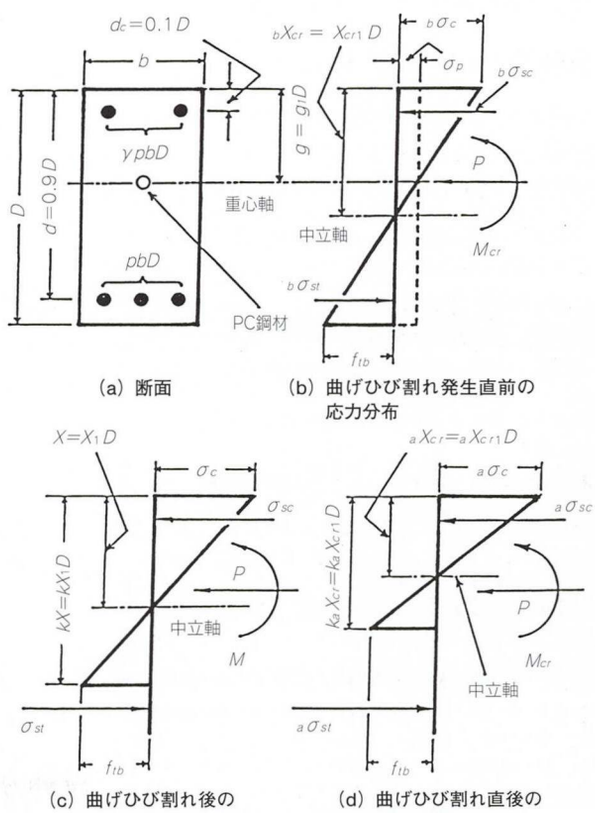


図１　曲げひび割れ時引張鉄筋応力σ_{st}のジャンピング現象説明図

ジャンピングの計算式

ジャンピングの計算式は、曲げモーメントまたは曲げモーメントと軸圧縮力とを同時に受けるRC部材断面のひずみおよび応力分布



(a) 断面　(b) 曲げひび割れ発生直前の応力分布

(c) 曲げひび割れ後の応力分布一般表示　(d) 曲げひび割れ直後の応力分布

図２　ひび割れ直前と直後の部材断面応力分布

表1　曲げひび割れ発生時引張鉄筋応力ジャンピング計算式（図2参照）

(1) コンクリートの引張抵抗を考慮したRC部材断面応力解析一般式〔図2 (c) 参照〕

コンクリートの圧縮合力：

$$C_c=\frac{bX\sigma_c}{2}-\frac{b(k-1)Xf_{tb}}{2} \quad (1)$$

中立軸に対するC_cの曲げモーメント：

$$M_c=\frac{bX\sigma_c}{2}\cdot\frac{2}{3}X+\frac{b(k-1)Xf_{tb}}{2}\cdot\frac{2}{3}X$$

$$=\frac{bX^2\sigma_c}{3}+\frac{b(k-1)X^2f_{tb}}{3} \quad (2)$$

圧縮鉄筋合力：

$$C_s=\gamma npbD\frac{X-0.1D}{X}\sigma_c \quad (3)$$

中立軸に対するC_sの曲げモーメント：

$$M_s=\gamma npbD\frac{(X-0.1D)^2}{X}\sigma_c \quad (4)$$

引張鉄筋合力：

$$T=npbD\frac{0.9D-X}{X}\sigma_c \quad (5)$$

中立軸に対するTの曲げモーメント：

$$M_T=npbD\frac{(0.9D-X)^2}{X}\sigma_c \quad (6)$$

軸方向力の釣合式：

$$P=C_c+C_s-T \quad (7)$$

(7) 式に (1),(3),(5) 式を代入整理。

ただし、関係式$f_{tb}=(k-1)\sigma_c$を適用。$P/bD=\sigma_p$。

$$\frac{\sigma_p}{f_{tb}}(k-1)X_1=\frac{1-(k-1)^2}{2}X_1^2+np(1+\gamma)X_1-np(0.9+0.1\gamma) \quad (8)$$

中立軸位置算定式：

$$X_1=-\frac{np(1+\gamma)-(k-1)\sigma_p/f_{tb}}{1-(k-1)^2}$$

$$+\sqrt{\left[\frac{np(1+\gamma)-(k-1)\sigma_p/f_{tb}}{1-(k-1)^2}\right]^2+\frac{2np(0.9+0.1\gamma)}{1-(k-1)^2}} \quad (9)$$

抵抗モーメント（中立軸に対して計算式誘導）：

$$M+P(g-X)=M_c+M_s+M_T \quad (10)$$

$$\frac{M}{bD^2f_{tb}}(k-1)+\frac{\sigma_p}{f_{tb}}(k-1)(g_1-X_1)$$

$$=\frac{1}{X_1}\left[\frac{1+(k-1)^3}{3}X_1^3+\gamma np(X_1-0.1)^2+np(0.9-X_1)^2\right] \quad (11)$$

計算方法：

上記計算式はパラメーターkの値を仮定し、(9) 式から中立軸比X_1を計算、これを (11) 式に代入して抵抗モーメントMを計算。

コンクリートの圧縮縁応力σ_cおよび曲率ϕ：

$$\sigma_c=(1-k)f_{tb} \quad (12)$$

$$\phi=\sigma_c/E_cX \quad (13)$$

(2) 曲げひび割れ直前のRC部材断面応力解析式〔図2 (b) 参照〕

中立軸位置：図2 (b) を参照して中立軸位置Xとパラメーターkの関係は、

$$X=D/k \Rightarrow\Rightarrow X_1=X/D=1/k \quad (14)$$

したがって、これを中立軸位置算定一般式 (9) に代入整理しXを求めると、次式を得る。

$$X_1=1/k=\frac{2\sigma_p/f_{tb}+1+2np(0.9+0.1\gamma)}{2[\sigma_p/f_{tb}+1+np(1+\gamma)]} \quad (15)$$

抵抗モーメント：

一般式 (11) に (14) 式および (15) 式を代入して抵抗モーメントを計算。計算された抵抗モーメントは曲げひび割れモーメントM_{cr}である。

コンクリートの圧縮縁応力${}_b\sigma_c$および曲率${}_b\phi_{cr}$：

一般式 (12) および (13) を使用。

(3) ジャンピング後のRC部材断面応力解析式〔図2 (d) 参照〕

計算式は (1) の一般式を使用。パラメーターkの値を種々に仮定し、(9) 式から中立軸比X_1を計算、それを (11) 式に代入して抵抗モーメントMを求め、(2) 項で計算した曲げひび割れモーメントM_{cr}と一致する中立軸比を求める。

X_1-M関係を図に画き、M_{cr}に対応するX_1を求めると便利。コンクリートの圧縮縁応力${}_a\sigma_c$および曲率${}_a\phi_{cr}$の計算は一般式 (12) および (13) を使用。

弾性解析式を、コンクリートの引張抵抗力を考慮して誘導すれば得られる。ここでは**図2** (a) に示す幅b、全高さD、有効高さ$0.9D$、圧縮鉄筋配置位置$0.1D$、引張鉄筋比$p=A_{st}/bD$（A_{st}；引張側鉄筋全断面積）、複筋比$\gamma=A_{sc}/A_{st}$（A_{sc}；圧縮側鉄筋全断面積）のRC長方形断面部材に曲げモーメントMが作用する場合についての曲げひび割れ発生前後の挙動解析式を誘導した。解析式の誘導には、柱部材にも適用できるよう一定軸圧縮力Pを同時に作用させた。なお、一定軸圧縮力Pは梁部材におけるプレストレス力導入による軸圧縮力とも見なすことができるので、ここでは、PC鋼材を部材断面重心軸に配置して軸圧縮力Pを作用させる図の表示とした。

図2 (b) は、曲げひび割れ直前の断面応力分布（図1のA点に対応）である。引張縁応力がコンクリートの曲げ引張強度f_{tb}に達したとき、部材には曲げひび割れが発生すると仮定してある。曲げひび割れ発生直前であるので断面各部の応力はすべて弾性範囲にある。次に、同図 (c) は曲げひび割れ発生後の断面応力分布を一般表示したもので、ひび割れ以後の弾性範囲内であれば、すべての場合に適用できるものである。蛇足ではあるが、この図に対するRC部材弾性応力解析式で$f_{tb}=0$とすれば通常のRC部材に対する弾性解析式が得られる。同図 (d) は曲げひび割れ発生によってジャンピングが起こった後の断面応力分布（図1のC点に対応）を示したもので、作用曲げモーメントは同図 (a) と同じく、曲げひび割れモーメントM_{cr}である。

以上の説明からわかるように、図2 (c) の応力分布に対する計算式を導けば、同図 (b) または (d) のいずれの場合もすべて計算できることになる。したがって、ここでは主として図2 (c) に対する解析式を**表1**に示した。ただし、誘導過程については記述を省略した。また、使用記号については図2を参照されたい。なお、図2 (b) および (d) については、図2 (c) の一般式からそれぞれの場合における条件を導入することによって計算式を誘導できる。表1には説明を簡略化して記述してある。

数値計算例によるジャンピングの検討

図3は、引張鉄筋比$p=0.4\sim2\%$、圧縮強度$f_{c'}=100$MPaの高強度コンクリート使用RC単筋長方形梁（複筋比$\gamma=0$、作用軸圧縮力$P=0$）の曲げひび割れ発生前後の$M-\phi-\sigma_{st}$関係を、表1の計算式を使用して求めた結果である。コンクリートの曲げ引張強度は友沢ほかの式[3]から、ヤング係数はACI 363委員会式[4]から求めた値

$$f_{ct}=0.444(f_{c'})^{0.679}=10.125\,\text{MPa}$$

$$E_c=3319.45\sqrt{f_{c'}}+6894.07=40088.57\,\text{MPa}$$

を用いた。鉄筋のヤング係数は$E_s=196133$MPaと仮定した。したがって、ヤング係数比は次のようになる。

$$n=E_s/E_c=4.8925$$

計算結果から明らかなように、引張鉄筋比が少ないほどジャンピングが大きくなる。本計算例によると、RC曲げ材の最小引張鉄筋比$p=0.4\%$（引張鉄筋比）をそのまま適用した場合には、曲げひび割れ発生直後の引張鉄筋応力は、

$${}_a\sigma_{st}=520\,\text{MPa}$$

に達し、曲げひび割れ発生と同時に引張鉄筋が降伏する場合があり得ることが理解できよう。ただし、引張鉄筋量を増大すればジャン

ピング現象は減少する。したがって、コンクリートが高強度になるほど最小引張鉄筋比を大きく規定する必要がある。図4は、参考までにf_c'=40～120MPaのコンクリートを使用した種々の引張鉄筋比を持つRC梁部材のジャンピング計算結果から、引張鉄筋比と曲げひび割れ発生直後の引張鉄筋応力との関係を図に画いたものである。コンクリートが高強度になるほど最小引張鉄筋比を大きくとらなければならないことが理解できよう。

蛇足ではあるが、最小引張鉄筋比規定値があまりにも大きくなり過ぎると、設計上必要以上の鉄筋を使用することになり、その結果、設計用曲げ終局強度に基づく必要引張鉄筋量の方が少なくなるということさえ起こりかねない。このような場合は、設計用曲げ終局モーメント要求値M_uの方が曲げひび割れモーメントM_{cr}を下回るのであって、曲げ終局モーメント要求値M_uにだけ基づいて必要引張鉄筋量を設計すると、曲げひび割れ即曲げ破壊という珍現象が起こることになる。このようなことが起こるのは、部材の曲げひび割れ強さが引張鉄筋量にはほとんど関係なく、コンクリートの曲げ引張強度によって決まるためである。すなわち、引張鉄筋はコンクリートにひび割れが発生する以前は、ほとんど機能していないのである。

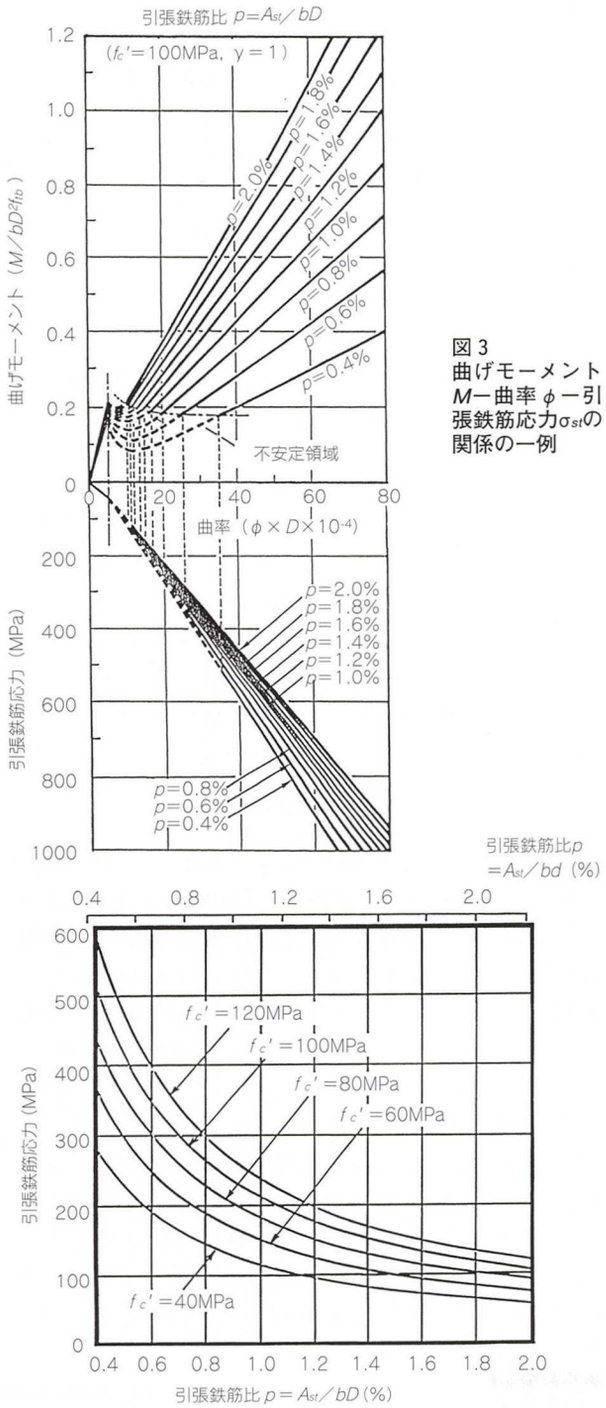


図3
曲げモーメントM－曲率ϕ－引張鉄筋応力σ_{st}の関係の一例

図4　引張鉄筋比と曲げひび割れ発生直後の引張鉄筋応力との関係（単筋長方形断面、$d=0.9D$）

ジャンピングの制御方法－結言に代えて－

すでに述べたように、引張鉄筋量を多くすればジャンピングを少なくすることができるが、それには限界がある。他の方法も二、三あるが、その中で最も簡便で実用的な方法はプレストレスの導入である。

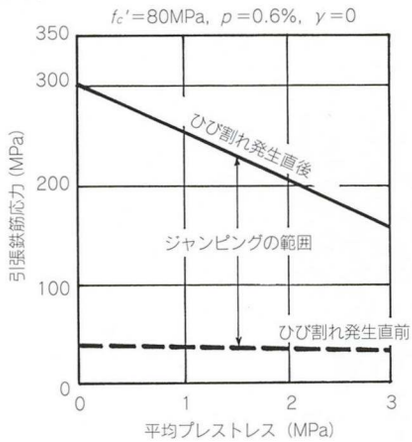


図5
ひび割れ発生後の引張鉄筋応力に及ぼすプレストレスの影響

図5はコンクリート圧縮強度f_c'=80MPa、引張鉄筋比 p=0.6%の単筋長方形梁断面に一様プレストレス $\sigma_p=P/bD$ =0～30MPaを導入すると、ひび割れ前後の引張鉄筋応力のジャンピングがどの程度抑えられるかを計算した結果である。導入プレストレスの大きさにほぼ比例してジャンピング量が著しく減少することがわかる。もちろん、このことは、PPC構造においてプレストレス導入により曲げひび割れ幅の制御が可能であることと全く同じ力学的基本に基づくものであり、高強度コンクリートを合理的にRC構造に利用するためには、プレストレス導入による引張鉄筋応力のジャンピングの制御（PPCではひび割れ幅の制御）が必要不可欠となろう。

参考文献

1）六車　熙、岸本茂規：鉄筋コンクリート曲げ材における最小鉄筋比、セメント技術年報、第23巻、pp.562-566、1969.5.

2）H. Muguruma, F. Watanabe & M. Nishiyama：Minimum Amount of Tenssile Reinforcement in Reinforced Concrete Flexural Members with High-Strength Concrete, Proc. of the FIP Symposium on Concrete 95 Toward Better Concrete Structures, Vol.1, pp.329-335, Brisbane, Australia, September 1995.

3）友沢史紀、野口貴文、小野山貫造：高強度・超高強度コンクリートの基礎的力学特性に関する実験研究、日本建築学会大会学術講演梗概集A（中国）、pp.497-498、1990.10.

4）ACI Committee 363, State-of-The-Art Report on High-Strength Concrete, ACI Journal, Vol.81 No.4, pp.497-498, July-August 1984.

（むぐるま　ひろし）

オープン化システム－BACnetとLonWorks－

藤村文雄
山武ビルシステム㈱事業企画部

中央監視システム（BAS：Building Automation System）において、近年その通信のオープン化が進み、センターマシンとリモートコントローラ及びコントローラ間の複数ベンダ（製品供給会社）による相互接続が実現されている。

本稿では、そのオープン化された通信の技術として国内で多く採用され始めたBACnetとLon Worksについて述べる。

BASの一般的な構成

BASの一般的な構成を図1に示す。センターは汎用のパソコンやサーバーマシン及び周辺機器で構成され、マンマシン、データ管理や全体統括制御機能を受け持つ。リモートコントローラは対象の設備に応じた専用の機器で構成され、情報の入出力や個別・連携制御の実行を受け持つ。このセンターとリモート間が通信により接続されており、これらの通信手段としてBACnet、LonWorksが採用されている。

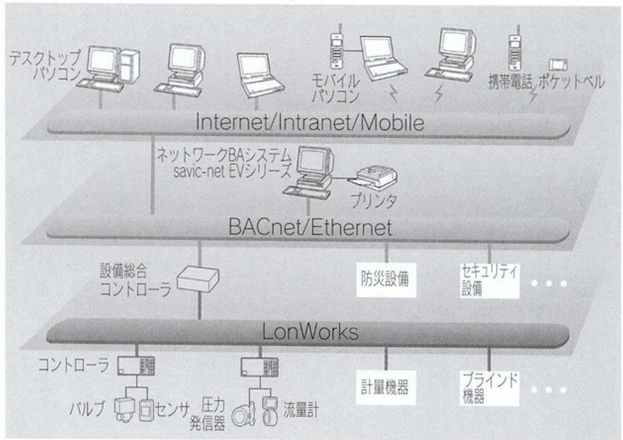


図1　BASの一般的な構成

異なるおのおのの通信要件を実現するために、センターの設備間統合のインターフェイスにBACnetを、そしてリモートの制御機器やセンサ間通信にはLonWorksが採用されている。

BACnet　BACnetはASHRAEの登録商標

●**BACnetとは**　A Data Communication Protocol for Building Automation and Control Networkの略で、ANSI／ASHRAEがBASのために標準化を進めてきた通信規約（プロトコル）である。

●**BACnetの目的**　「この標準の目的は、HVAC＆R（空調と熱源）や他のビル設備を監視、制御するためのコンピュータシステムにおけるデータ通信サービスとプロトコルを定義することである。さらに、それらの装置間で通信される情報の抽象的でオブジェクト指向の表現を定義し、それによって、ビル内でのデジタル制御技術のアプリケーションやその適用を容易にすることである」（電気設備学会訳）

●**BACnetの特長**　BACnetに接続される各装置の持つ情報をオブジェクトとして扱い、オブジェクトを構成する情報はプロパティ（属性）として定義され、装置間のデータ通信はサービスと呼ばれる予め定められた通信の手順でデータのやり取りをするためのメッセージなどが規定されている（図2）。

●**BACnetの動向**　ISOのTC205委員会のWG3「ビルディング制御システムデザイン」で、システム統合のための通信プロトコルとしてBACnetが審議されており、今年の9月には投票され、来春には制定される見通しである。また、国内においては電気設備学会（IEIEJ）もBAS標準化委員会で適用を検討してきており、ANSI／ASHRAE135－1995のBACnetに日本で必要な仕様の追加とローカル規約の範囲での日本独自の標準化を進めている。これが電気設備学会規約（IEIEJ／P）として登録されている。

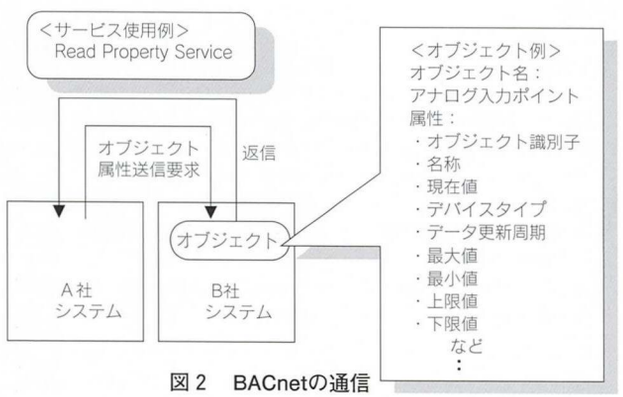


図2　BACnetの通信

LonWorks　LonWorks、LonはECHELON社の登録商標

●**LonWorksとは**　米国ECHELON社が開発したLon（Local Operating Network）：知的分散制御ネットワーク技術であり、ECHELON社から独占的に技術供与されている。

●**LonWorksの目的**　知的分散制御によりフラットな構成と、通信の標準化によるインターオペラビリティ（相互運用性）を確保し、マルチベンダ環境を実現する。その結果としてベンダ数が増加し、ベンダの選択幅が増すことによって競争によるコストダウンを促進させることにある。

●**LonWorksの特長**　通信の標準化を徹底していることにある。一つは、通信プログラムをチップ化（Neuron Chipと呼ぶ）することによって、ベンダが製品への採用、開発を容易にしている。さらに通信のインターフェイス部分に各種のドライバという標準化されたチップも提供されているため、ツイストケーブル、電力線や光ファイバーなどから伝送方式が選択できる。二つ目は、入出力の情報を標準ネットワーク変数（SNVT）として標準化し、さらにこれらの組み合わせを装置や機器という単位ごとに機能プロファイルとして定義し、製品に認定を与えている。

●**LonWorksの動向**　ベンダに利用しやすい環境が整っているため、Home Automation、FA、BAなどの分野で広く普及しつつある。

オープン化BASの今後

現時点でオープン化技術として採用されているBACnet、LonWorksのほかにもオープンな技術はあり、各分野で利用されている。今後、インターネット（IPv6）や無線（Bluetoothなど）などがより使いやすく、より全体コストを安くできる製品（通信チップ）が登場してくれば多くのベンダに採用され、それがBASにも利用されることも考えられる。

BluetoothはERICSSON社の登録商標

いずれにしても、通信はBASの手段の一部であり、常に最新の技術が採用されていくと思われる。（ふじむら　ふみお）

REPORT

空間性能による精神の可変性を研究してきて

藤井　明
藤井明建築空間研究所／日本建築協会会員

空間性能に伴う良質精神と環境の擁立を目指して

空間の精神に及ぼす影響は、設計をされている方には容易に結びつき、その関係を考慮して、空間に日々エッセンスを加えられていることと思う。

そのエッセンスの加え方を研究しながら、空間と精神の関連性を考えるにつれ、われわれの自己満足であってはならず、空間性能と移入された時の感覚偏差を分析、系統化→体系化できないものか。それをオープン利用することで、ひどくなる一方の人的社会環境から、人々、特に子供たちが、精神の安らぎ癒される優しい空間にまで、少しでも持ってゆけないか。そうした人的環境に危惧をもって、目的を定め、長年研究を推進するに至った理由である。

＊

まず、設計者の客観的指標の薄さなどから、居住者らの妥協・不満足、設計者の自己満足になっている建築はないか？　もしそのような建築があれば、少しでもより満足のゆく空間にしたい…。　他方、人～社会環境を観てみると、大人の育ちの弱さ、意識劣化と未認識に発する集団主義的な社会的規範崩壊、家庭の小規模孤立化・多様化。家族は心を外へ求め…、希薄な繋がりに。

今に至る精神世界の劣化（未成熟、自己未確立、自己中心性社会）は、空間に深刻な影響を与え得るものである。現在に至る精神の及ぼす空間を考えると、砕けとんだ意識の再集積の必要性、個と社会の融合を誘発する相互空間の融和等、様々なファクターが考えられる。それらの精神世界の劣化を解決するために、本質的に良質な精神への転換を促すための一因である精神と空間性能の繋がりと役割を解明した上で、空間のシステムを提供する。システムを指針とし、良質で安寧な精神へと導く空間性能そのものを準備ケア、サポート、個々に良質な空間に仕立て、良質な目的での多岐による意識での複合的利用を通し、生活意識改善～コミュニティの開放、心を育てる場の復権、再構築を誘導する“地”になればと考えている。

優しい心、優しい空間が、人の心を救う。まず第一歩は、心を癒すことから。空間に、より潜在力を挿入し、人・社会を少しでも癒したい。おのおのの自省社会への転換と優しさ、自発する創造性を持って自らの安寧な心を生み出してほしい。

しかし、個も、同じ場にいる他の個の心も、うつろで少しの変化で変わり得るものだ。何一つ一定のものはなく、不適合家族も増加している。多様化の中で良い子に育てたい、病人を安らげたい、ストレスを和らげたい、目的の精神の場を一時借りたい…と願い、いつでもどこでも劣化した精神の増長を押さえようとしている。誰でも、いつでも、良いものの中に居たいはずだ。それぞれが良質な自分を取り戻すことを願って、システムを開発。そしてそれは、社会的病理の治療を促す心療的装置の一つに。それは決して、他の者によって悪用されるものであってはならない。

コンセプトと方向性

精神空間との対応または誘導を、usuallyに可変する実体空間（＝安易、安価、自在な壁・天井・内外装・開口部の移動、置換、調整可変機能を持たせたもの）に移入された個々の精神によるシステムを反応させることによって、もたらせる。

＊

parts分析（base）←（空間性能と感覚の関連性）

〈目的の精神〉安らぎ、安寧、安心、癒し、高揚、希望等
- 〈被験者〉（年代別、性別、状態別）
- 〈初期的空間の状態から〉←assort
  長さ、高さ、面積、開口、環境
  形態、配置、色彩、texture等

←感覚偏差調査（初期data化）

←因果関係解明（data解析）　←仮想～実体空間による生理機能＝脳波（α波β波）等測定。生理的pattern、脳波分布形状を重ねる等、偏差性を調べる。

↓

pattern法則化→系統化・体系化

↓

system開放→open out　　※様々な建築の良質な空間操作の原点となるものに！

各人要望感覚から、個々に対応する目的空間の指標をbaseから探す。（各人の脳波等を測り、脳波形状に対応する目的空間の指標をbaseから探す）
それを指針とし、個々を癒す満足の高い空間に近づける。
→dataの積み重ね、より空間の精度を図り、発展を促す。

←建築家　support…各個化と協調の調整・良質な空間に限定・detailの成熟

←社会環境

←行政・法整備

↓

skeleton固定＆内外可変空間（安易、安価、usually、hand-madeな実体空間）に挿入

↓

個々の精神空間の解放・改変へ

↓

次期開発目標＝精神感知連動～選択systemによる治癒

◇変化、成長する物的事象、心的事象に追随する安寧な空間に。
◇心に様々な正の発揚感覚を与える目的を持った空間による、精神の良質な操作を。

ここ福岡で、この十数年、空間性能と精神のつながりについての研究を重ねてきた。今回、その研究の発表の場としたい。

紙面の都合により、導入データは割愛した。この研究に関する情報と実践協力を募ります。　（ふじい　あきら）

文化遺産としてのモダニズム建築展in芦屋〈関西のモダニズム20選〉

1920年代、"近代建築"と呼ばれる建物が日本各地に建てられた。特に関西では、住む人のライフスタイルに基づいて多くの近代的な建物が生まれている。その多くはすでに取り壊されているが、原形をとどめながら21世紀を迎えた優れた建築物も残されている。

関西を基盤に活躍する建築史家らが委員会を構成し、特に優れた建築物20点を選定して、それらが現代社会に生きている姿を、二人の写真家・築地仁、鈴木理策が撮り下ろした。

この関西のモダニズム20選の建築写真、図面、模型などが芦屋市立美術博物館で展示される。後援は、DOCOMOMO international、DOCOMOMO japan、日本建築協会、日本建築学会ほか13建築団体。

会期　2001年9月8日(土)～10月14日(日)
10:00～17:00（入館16:30まで）
月曜日休館（9／24、10／8は開館、翌火曜休館）

会場　芦屋市立美術博物館（芦屋市伊勢町12－25）

入場　大人500円、大高生400円、中学生以下無料

●出品作品

1．ヨドコウ迎賓館〈旧山邑邸〉（芦屋市、F.L ライト、1924　女良工務店）
2．本野精吾自邸（京都市北区、本野精吾、1924　岡田工務店）
3．辰馬本家酒造白鹿館（西宮市、竹中工務店、1930　竹中工務店）
4．朝日ビル（大阪市北区、竹中工務店、1931　竹中工務店）
5．大阪ガスビル（大阪市中央区、安井武雄、1932、大林組）
6．滴翠美術館〈旧山口吉郎兵衛邸〉（芦屋市、安井武雄、1932　竹中工務店）
7．神戸市立御影公会堂（神戸市東灘区、清水栄二、1933　大林組）
8．そごう百貨店大阪店（大阪市中央区、村野建築事務所、1935　大倉土木）
9．関西電力京都支店（京都市下京区、武田五一、1937 錢高組）
10．大阪中央郵便局（大阪市北区、逓信省（吉田鉄郎）、1939　大林組）
11．大阪市立大学校舎群（大阪市住吉区、大阪市建築課、1934　鹿島組）
12．浦邸（西宮市、吉阪隆正、1956　横田建設）
13．新朝日ビル〈フェスティバルホール含む〉（大阪市北区、竹中工務店、1959　竹中工務店）
14．京都会館（京都市左京区、前川國男建築設計事務所、1960　大成建設）
15．大和文華館（奈良市、吉田五十八、1960　大林組）
16．宮本邸（大阪市、坂倉建築研究所、1960 大林組）
17．東大阪市旭町庁舎〈旧枚岡市庁舎〉（東大阪市、坂倉建築研究所、1964　三井建設）
18．京都国際会館（京都市左京区、大谷幸夫、1966　大成建設）
19．シトー会西宮の聖母修道院（西宮市　村野・森建築事務所、1969　竹中工務店）
20．神戸商工貿易センター（神戸市中央区、日建設計、1969　鹿島建設）

問い合わせは、芦屋市立美術博物館学芸課・河崎晃一（TEL 0797-38-5432）へ。

■関連事業

講演会「関西のモダニズム建築探検」

講師　藤森照信氏（建築史家・東京大学教授）

日時　2001年9月8日（土）18:30～20:30

場所　ルナホール〈芦屋市民センター〉自由席400席
芦屋市業平町8－24　TEL 0797-31-4995

聴講　一般1500円、大高生1200円（当日受付にて）

「日本におけるイタリア2001年」にちなむ展覧会－ATCで－

今年9月は「日本におけるイタリア2001年」。イタリアにちなむ二つの展覧会が開催される。入場無料。

会期　2001年9月13日(木)～9月30日(日)
10:00～18:00　水曜休館

会場　ATC・ITM棟10階（大阪市住之江区南港）
大阪デザイン振興プラザデザインギャラリー

■ステファノ・ジョバンノーニのデザイン・スーパーマーケット展

――アレッジ社やマジス社からのポップでユニークな作品で著名なイタリア人デザイナー、ステファノ・ジョバンノーニ（1954～）のデザインスタイルに焦点を当て、そのデザインプロセスをVTRの上映など様々な切り口で紹介する。

■イタリアとマナブ展

――デザイン・建築・絵画に彫刻。イタリアで学んだデザイナーからのメッセージや、イタリア滞在当時の作品を展示。

・参加デザイナー

合川通子／淺野泰弘／梅田正徳／小倉ひろみ／河合早苗／上林壮一郎／喜多俊之／久保田章敬／佐藤和子／佐藤康三／清水文夫／高市忠夫／中嶋吾／中須智子／西森陸雄／橋本昌也／藤田寿伸／船田徹夫／松本剛／三浦英夫／村澤一晃



・イタリアの教育機関

アカデミアリアチ、ドムスアカデミー、ベネトンファブリカ、ミラノ工科大学ほかのパネル展示

・映像によるメッセージ

伊藤節／宮城志信／梅田菜々絵／久保雅彦／菰田和世／蓮池槇郎／細江勲夫／水ともこ／森ひかるによる、リアルタイムなイタリア情報

前沢知子個展

1972年長野県に生まれ、東京造形大学を卒業後、国内外で活躍する前沢知子。ダイムラー・クライスラー・グループによるプログラム『ガスコーニュ・ジャパニーズ・アート・スカラシップ』に選出され、大阪での『〔国立国際美術館〕への6人のオマージュ』展や、セゾンアートプログラム『アートイング東京2000 16×16』にも参加している。

非認識から認識へと意識が切り換わる瞬間である境界を、世界に偏在する隙間として顕在化させる前沢知子は、例えば気付かれることすらないギャラリー空間の釘穴やひび割れに糸を詰める。目を凝らすことで「空間そのものが作品」であることを悟らせる。

会場　Masataka Hayakawa Gallery
東京都渋谷区恵比寿西1－16－1－301
TEL 03-5457-7991、FAX 03-5457-7997

会期　2001年9月4日(火)～10月13日(土)
11:00～19:00　日・月・祝日休み

四国・高松に「HONANE」

「栗林公園」の近く、高松市内の中央通りに7月12日、全面ガラス張りの明治生命高松ビルが完成した。高さ52mの白く直線的なアトリウムに、黒御影色の丸い抽象彫刻を最後に入れることにより大空間全体が引き締まり、まさに「画龍点睛」にふさわしい造形だと、施主の明治生命保険相互会社は誇らしげだ。

この彫刻「HONANE」（讃岐弁でまた会いましょう）は、地元香川に在住の世界的に著名な彫刻家・流政之氏の新作で、上下左右見る方向によって変幻自在にフォルムを変え、本磨であるためその表面にアトリウムの全空間が映り込んでくる。また、手で触れるとゆっくりと回転する。

アトリウムは半公共的な空間であるため、高松市民も訪れ、彫刻に触れ（「手で触ることは手で見ること。目で見ることは目で触ること」－流政之）、市民に開かれたアートギャラリーとなっている。



■所在地
高松市藤塚
1-10-30
■設計監修・工事監理
石本建築事務所
■設計・設計監理
清水建設一級建築士事務所
■施工
清水・大日本土木・鉄建・合田建設共同企業体

秘土巡礼展－土はきれい、土は不思議－

生物を育み、いのちを循環させてきた「土」。干して固めただけで壁になり床になり、焼いて道具になり、屋根にもなってきた。
「焼いた土」「焼かない土」「土壌断面標本」の3つのアプローチから、身近な「土」の多様な特性と美しさを発見しようというINAXギャラリー大阪の企画。
在野の土の研究家・芳村俊一氏は土の焼成実験を50年近く行い、土の力を引き出すことを訴えている。一方、美術家・栗田宏一氏は日本各地の崖や窪地から1万点あまりの土を採取し、土の持つ美しい色を引き出してきた。森林総合研究所及び農業環境技術研究所所有の「土壌モノリス」（土壌断面標本）からは、土の成り立ちやルーツを知ることができる。
会場ではこれらの実物を展示する。入場無料。
会期　2001年9月7日(金)～11月23日(金)
10:00～18:00　水曜日休館
会場　INAX大阪ショールーム2階
大阪市西区新町1-7-1　TEL 06-6539-3518

2001年児童画展『こんなお店があったらいいな』

大阪府内の幼稚園や小学校、絵画教室の児童・生徒を対象に毎年、まちや住まいをテーマに絵画を募集して18回目を迎えた「児童画展」（主催・大阪建築士事務所協会）が、大阪市立住まい情報センターで開かれる。また、この児童画展と併催して、これから巣立っていく大学・高校・専門学校の建築科の学生と一般市民とが天満・天神橋筋地域を歩き、意見交換をするタウンウォッチングも実施される。
期　間　2001年9月22日(土)～23日(日)
10:00～17:00
会　場　大阪市立住まい情報センター3階ホール
大阪市北区天神橋6-4-20
催し物　(1) 児童画展示・表彰式（9月22日）
(2) 天満・天神地域タウンウォッチング十フリートーキング
(3) 住まいのなるほどセミナー「欠陥住宅の見分け方（購入時の注意点）」
(4) 建築無料相談会
問い合わせは、㈳大阪建築士事務所協会（TEL 06-6946-7065、FAX 06-6946-0004）へ。

A/E/C SYSTEMS JAPAN 2001

建設業界の先進的なIT利用に関する製品・技術情報と実務動向を一堂に集めて、16回目の「建築新技術展／国際セミナーA/E/C SYSTEMS JAPAN 2001」が開かれる。「ecobuild」展も併催。
会　期　2001年9月19日(水)～9月21日(金)10:00～17:00
会　場　東京・池袋サンシャインシティ文化会館
2～4階
入場料　一般1000円、学生500円（「ecobuild」共通）
出　展　建築アプリケーション、CAD、CG・アニメーション、業務アプリケーション、土木アプリケーション、GIS／マッピング／景観システム、ネットワークシステム、データ入出力機器／その他情報化支援システム
詳細は、A/E/C SYSTEMS JAPAN組織委員会事務局（デルファイ研究所内、TEL 03-3222-5041）へ。
http://www.delphi.co.jp/aec/に最新情報を掲載。

「ニューアース2002」（地球環境技術展）出展募集

来年10月16日(水)～19日(土)の4日間、大阪南港のインテックス大阪で開催される「ニューアース2002」（地球環境技術展）への出展者を募集している。
㈳大阪国際見本市委員会、㈳日本産業機械工業会、㈶地球環境産業技術研究機構が主催する本展は1993年に始まり、世界各国から多くの出展者・来場者を迎え、2002年で4回目の開催となる。
ビジネス環境保全機器関連の展示に加え、「ニューアース2002」ではエコプロダクツゾーンや中小企業コーナー（業種を問わず、従業員300人以下または資本金3億円以下の企業）を設ける。この「中小企業コーナー」への出展料は1/3以上が免除される（例：1小間33万円→20万円・税別）。
出展の問い合わせは、㈳大阪国際見本市委員会業務第2部（TEL 06-6612-1042、FAX 06-6612-8585）へ。

「建築・設備総合管理技術者」講習会

"総合的な観点から建築物の維持保全計画をまとめ、実施に責任をもつ建築物のナビゲーター"である「建築・設備総合管理技術者」の制度を推進するため、㈳建築・設備維持保全推進協会（BELCA）は11月に講習会を開催する。
受講申込書受付は9月20日（木）まで。受講料は77,700円（テキスト代・消費税含む）。受講資格等詳細問い合わせはBELCA（TEL 03-5252-3873）へ。
●大阪講習　2001年11月6日(火)～9日(金)
会場　千里ライフサイエンスセンター（定員40名）
豊中市新千里東町1－4－2
●東京講習　2001年11月13日(火)～16日(金)
会場　飯田橋レインボービル（定員80名）
新宿区市谷船河原町11

船場げんき提案募集

大阪・船場には、現在「空きビル」「空きスペース」「空き地」が多く見受けられるが、これらの"まちスペース"（「街」「待ち」「match」の意味を込めて）はまちの魅力を高め、まちを元気にする大切な資源となる。
この船場の多様な蓄積に着目して、船場の活性化につながるアイデアやプログラムを、「船場げんき提案募集企画委員会」（座長：鳴海邦碩大阪大学大学院教授）が募集している。
課題　大阪都心・船場の多様な蓄積を活用し、より活発化するような新たな事業やイベント、まちづくりなどの提案を。だれに、何を、どのようにして、そしてそれをどのような場所・空間で提案するものか、構想にまとめる。
資格　応募資格はプロ・アマ不問。企業や研究団体に属する人も、原則として「個人」で応募する。
部門　●事業プログラム部門
――構想から実施計画までを提案。その提案に沿って実行することが可能な提案。
●アイデア部門
――構想のみの「げんき提案」。実行するには様々な検討を加えることが必要なもの。
審査　"実現してみたいという面白さ、魅力にあふれているもの""イベントや事業に発展する可能性・拡張性があるもの""「アイデアの内容」「実現手法」に創造性・独創性があるもの""「行ってみたい」「住んでみたい」「参加したい」という魅力を船場に与える効果が期待できるもの"の観点で提案を審査する。
応募　・インターネット
http://www.semba-genki.net/
上記ホームページから「エントリーシート」「応募シート」をダウンロードし、必要項目を埋めて応募する。
・郵送先
〒542-0081　大阪市中央区南船場3-1-8・3F
船場げんき提案募集企画委員会事務局
TEL 06-6243-1358、FAX 06-6243-9480
締切　9月28日（金）必着
賞金　プログラム部門（入賞5点予定）賞金各10万円
アイデア部門　入賞賞金3万円

近代建築ナイトツアー参加者募る

見学先は、①外壁の一部が保存された大正の名建築②新ビルの一部に残されたイオニアオーダー③大阪に残る最古のビルディング④インターナショナルスタイルの名建築⑤昭和戦前に建てられた倶楽部建築。
日時　2001年9月12日（水）18:30～
案内　明治建築研究会（柴田正己代表）
集合　大阪デザイナー専門学校正面玄関（北区堂島）
連絡先は大阪デザイナー専門学校(TEL 06-6348-0558)。

公開講演会「部屋の空気と私たちの暮らし」

市民を対象とした㈳空気調和・衛生工学会の14回目の公開講演会のテーマは、化学物質による室内空気汚染。化学物質とは何か、その化学物質によって引き起こされるシックハウス症候群とは何か、その問題の発生状況やそれに対する取り組みを、より分かりやすく解説する。事前申し込み不要。入場無料。定員100名。

テーマ　「部屋の空気と私たちの暮らし－室内空気中の化学物質汚染について－」

日　時　2001年9月29日（土）13:30～17:00

会　場　大阪市立大学文化交流センター（大阪駅前第3ビル16階文化教室大ホール）

プログラム

・シックハウス問題に関する保健所などの機関によるさまざまな取り組み／塩津弥佳（国立公衆衛生院）

・インターネットで探る住まいの化学情報／東　賢一（住まいにおける化学物質研究家）

・シックハウス問題の相談事例・対策およびいわゆる品確法について／吉田茂雄（㈶住宅リフォーム・紛争処理支援センター）

・シックハウス問題に対する建築・設備的対応／坊垣和明（建築研究所）

・上記メンバーによるパネルディスカッション

「京の建具文化の魅力を再認識する！」

日本建築を支えてきた様々な職種の専門家から、日本建築の「和の文化」のこころ・原点を学ぶ関西木造住文化研究会（KARTH）シリーズセミナー。

その第2回では、京建具・数奇屋建具の第一人者・徳田敏昭氏が、建具の持つ役割と洗練された意匠、材料・工法を語る。

日　時　2001年9月15日(土・祝日)13:30～16:30

会　場　関西木造住文化研究会（KARTH実験住宅KN1）
京都市上京区上立売通り浄福寺西入る姥ケ東西町632。角地。（バス停千本今出川または今出川浄福寺より北へ徒歩10分）

講　師　徳田敏昭氏（株式会社トクダ）

参加費　1000円（当日会場で支払い）

9月8日までに所要事項を記入し、FAXかEメールで関西木造住文化研究会（KARTH）へ。

TEL 075-411-2730、FAX 075-411-2725

E-mail:tamura@mrh.biglobe.ne.jp

第10回国際デザイン・コンペティション入賞作品決定

大阪で隔年に開催される国際デザイン・コンペティション（主催：㈶国際デザイン交流協会）の、第10回コンペは「intermediation／次世代へつなぐメッセージ」をテーマに作品募集をし、61カ国1093点の応募があった。7月17日からの3日間の最終審査（審査員：田中一光／ロバート・ピーターズ／デビッド・クスマ／デスモンド・ローブシャー／鶴田剛司）を経て、大賞1点、金賞1点、大阪府知事賞1点、大阪市長賞1点、銀賞1点、銅賞3点、奨励賞4点が決定。

あらゆる分野のデザインを対象とするこのコンペの、第10回大賞（内閣総理大臣賞）には、ドイツのステバン・ノーワーク、ドミニク・ムィチェルスキ、アレキサンダー・ピア、ペトラ・クニリム、フィリップ・トイペルの5人の共同作品「パイロン（歩行者用未来型位置確認システム）」が選ばれている。

これらの入賞作品および第一次審査通過作品は、「第10回国際デザイン展」で一般公開される。

日時　2001年10月20日(土)～24日(水)10:00～18:00

会場　アジア太平洋トレードセンター・ATCホール
大阪市住之江区南港北2-1-10

入場　大人1000円、学生700円

ギャルリー・タイセイ展覧会

「モダニズムの風が吹くときール・コルビュジエ、カーン、ドーシのアーメダハッドー」展が開催される。

西インドの都市アーメダハッドは、ル・コルビュジエ、ルイス・カーン、バルクリシュナ・ドーシらが建築作品を残したところで、インドの近代建築を考える上で重要な街である。また、アーメダハッドは今年1月26日の大地震で大きな被害を受け、貴重な建築遺産も被災し、ドーシ氏がディレクターを務めるヴァスツ・シルパ財団が文化財修復活動をしているさなかでもある。

アーメダハッドでの、ル・コルビュジエの繊維業者会館（1954～56）、サラバイ邸（1955）、サンスカル・ケンドラ美術館（1956～57）、ショーダン邸（1956）、ルイス・カーンのインド経営大学（1962～74）、バルクリシュナ・ドーシのドーシ自邸（1980）などが、写真・模型・図面などによってインド伝統建築との対比の中で紹介される。入場無料。

会期　2001年10月9日(火)～12月21日(金)
10:00～17:00　土日祝日は休み

会場　ギャルリー・タイセイ　TEL 03-5381-5510
東京都新宿区西新宿1　新宿センタービル17F

住宅性能表示基準の講習会

平成11年6月に「住宅の品質確保の促進等に関する法律」が制定され、平成12年秋に住宅性能表示制度がスタートした。表示基準及び評価方法基準に基づく住宅性能表示制度は、指定住宅性能評価機関が住宅の9つの性能に関して公正、的確に評価を行うものであり、住宅の評価を申請する際に評価機関に提出する設計評価申請図書等（自己評価書等）作成のために理解を深めておくことが望まれている。

㈶日本建築センターと㈶ベターリビングは、国土交通省住宅局住宅生産課担当官を講師に迎え、

①「住宅の品質確保の促進等に関する法律」の目的及び法律概論

②日本住宅性能表示基準概論及び評価方法基準概要

を平成13年8月改訂版の『必携　住宅の品質確保の促進等に関する法律』『日本住宅性能表示基準・評価方法基準の解説』をテキストに使って、講習する。

受講料　20000円（テキスト代含む。当日会場払い）

申込先　官製の往復ハガキに、氏名、講習会名、受講地、勤務先とその住所・電話番号を、返信用ハガキには郵便番号・住所・氏名を記入して、㈶日本建築センター講習会係
〒105-8483　東京都港区虎ノ門3-2-2
TEL 03-3432-0716、FAX 03-3434-7229
まで郵送する。各会場とも先着順受付。

開催地／開催日／会場／定員　＊9月19日以降を掲載

●大阪第1回／9日19日（水）／ヴィアーレ大阪（中央区安土町3-1-3）TEL 06-4705-2411／200名

●福岡／9月27日（木）／福岡第一ビル・大ホール（博多区綱場町2-2）TEL 092-291-8366／200名

●名古屋／10月3日（水）／ATビルディング大会議室（中区錦1-18-22）TEL 052-221-8627／200名

●広島／10月11日（木）／広島国際会議場ヒマワリ（中区中島町1-5）TEL 082-242-7777／150名

●東京第3回／10月18日（木）／日本教育会館（千代田区一ツ橋2-6-2）TEL 03-3230-2831／200名

●札幌／10月24日（水）／メルパルク札幌（中央区南1条西27-1-10）TEL 011-642-4321／150名

●仙台／10月31日（水）／斎藤報恩会館（青葉区本町2-20-2　TEL 022-262-5506）／150名

●大阪第2回／11月7日（水）／ヴィアーレ大阪（中央区安土町3-1-3）TEL 06-4705-2411／200名

第10回国際デザイン・アオードは三宅一生氏に

デザインを通じ産業や文化の振興に寄与した個人や団体の優れた活動や研究の業績を顕彰する国際デザイン・アオードは、㈶国際デザイン交流協会により1983年から2年ごとに実施されている。

第10回は、世界14カ国・地域の著名な28名のデザイン関係者からすいせんを受けた23件の候補を審査（泉眞也／榮久庵祥二／川添登／木村重信／豊口協）し、受賞者をデザイナー・三宅一生氏（日本、63歳）に決定した。

一枚の布をメディアとして、人間性を美しく軽やかにメッセージするその創作活動が、常に進歩的で、広くデザインやアートの世界に強い影響を与えており、多様な文化が共存する21世紀における「ものづくり」の、指針として高く評価されたもの。

日本建築協会

月間の動き

【平成13年 7 月分】

正副会長会議

第1回正副会長会議
23日　3時～4時15分・於本会会議室
出席者　金多会長ほか5名
議　事（1）新執行体制における会務運営等について
（2）「協会21世紀検討委員会」の進捗状況等について
（3）会員の増強（会勢理事会の開催）
（4）協会の財政状況ほか

21世紀の協会検討委員会

第1回21世紀の協会検討委員会（全体会議）
16日　3時～5時・於本会会議室
出席者　金多会長ほか13名
議　事　「協会21世紀を考える委員会」答申の具体的実効策について
第2回21世紀の協会検討委員会（全体会議）
31日　3時～5時15分・於本会会議室
出席者　川口副会長ほか15名
議　事（1）「協会21世紀を考える委員会」答申の具体的実効策について
（2）分科会での検討について

青年技術者選考委員会

第48回青年技術者応募規定検討会
3日　4時～6時15分・於本会会議室
出席者　宮田選考委員長ほか7名
議　事　応募規定の見直し

編集委員会

第4回編集委員会
4日　6時～8時・於本会会議室
出席者　宮田委員長ほか4名
議　事（1）8月号「環境―近未来に向けて今できること―」特集・「大建設計」特集経過報告
（2）9月号「建築の力　都市の力―建築、都市の再生・転生・創生―」特集経過報告
（3）10月号「建築と緊張」特集経過報告
（4）作品作風小委員会関係報告
（5）14年1月号～12月号表紙改訂案検討
（6）収支状況報告
第4回広告企画小委員会
4日　5時～6時・於本会会議室
出席者　宮田委員長ほか9名
議　事（1）8月号「環境―近未来に向けて今できること―」特集・「大建設計」特集経過報告
（2）9月号「建築の力　都市の力―建築、都市の再生・転生・創生―」特集経過報告
（3）10月号「建築と緊張」特集・「都市基盤整備公団」特集経過報告
（4）作品作風関係報告
（5）独自特集企画
（6）収支状況報告
第4回設備分科会
3日　6時～8時15分・於本会会議室
出席者　近藤国夫幹事ほか5名
議　事（1）8月号「環境―近未来に向けて今できること―」特集経過報告
（2）「設備の頁」の企画
（3）新シリーズの企画
第4回法令分科会
10日　2時～4時・於本会会議室
出席者　中島幹事ほか2名
議　事　「法令コーナー」の企画
第5回構造分科会
13日　6時～8時30分・於本会会議室
出席者　木下幹事ほか3名
議　事　10月号「緊張」特集の企画
第3回施工材料分科会
26日　5時～6時30分・於本会会議室
出席者　太刀川幹事ほか2名
議　事　来年度特集について
第4回作品作風小委員会
26日　7時～9時・於本会会議室
出席者　赤木副委員長ほか3名
議　事（1）作品の選定
（2）作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
（3）「gallery」掲載報告・予定
（4）「Sketch Book」欄の掲載予定
（5）11月号特集会員作品「私の空間作法」について

事業委員会

第3回事業委員会
17日　6時～8時・於本会会議室
出席者　川村委員長ほか9名
議　事　各小委員会からの報告と検討
第4回若い会員の集い小委員会
3日　7時～9時・於本会会議室
出席者　杉本副委員長ほか5名
議　事（1）今後の企画について検討
（2）「30's　EYE出版」について
第3回情報小委員会
11日　6時～7時30分・於本会会議室
出席者　小笹幹事ほか5名
議　事　実施報告と今後の予定について
第3回見学会小委員会
12日　6時～8時10分・於本会会議室
出席者　福島副委員長ほか9名
議　事　実施報告と今後の予定について

出版委員会

第4回出版委員会
19日　6時～7時・於本会会議室
出席者　山田委員長ほか9名
議　事（1）＜プロのノウハウ＞と特装本の経過報告
（2）今後のテーマと執筆者選定
第2回結露のトラブルと解決策小委員会（仮称）
5日　6時～7時30分・於本会会議室
出席者　中川主査ほか6名
議　事（1）結露のトラブルと解決策に関して（委員報告）
（2）今後の作業予定等について

建材委員会

第4回建材委員会
11日　4時～5時・於本会会議室
出席者　和田委員長ほか7名
議　事　建材委員会の活性化と今後の方針

支部総会

平成13年度中国支部通常総会
5日　5時～　・於広島東急イン
議　事（1）平成12年度事業報告・収支決算報告
（2）平成13年度事業計画（案）・収支予算（案）
平成13年度京都支部通常総会
18日　5時～　・於京都ブライトンホテル
議　事（1）平成12年度事業報告・収支決算報告
（2）平成13年度事業計画（案）・収支予算（案）

建築クラブ

第351回朝食会
10日　8時～9時30分・大阪全日空ホテル
演　題　「IT革命の功罪―インターネット社会の光と陰―」
講　師　水本　雅晴氏（大阪電気通信大学総合情報学部教授）
参加者　37名

入会者(敬称略)

［団体会員1社］
㈱教育施設研究所大阪事務所
［個人会員3名］
重見　慶子（㈱リビング・デザインセンター）　太田　栄治（高松建設㈱）　茂籠　一之（高松建設㈱）

◀会員の訃報
名誉会員　野田　清三氏　平成11年5月31日ご逝去
名誉会員　宮田　禮彰氏　平成12年ご逝去
名誉会員　森　定夫氏　平成13年2月10日ご逝去
名誉会員　香取　禮三氏　平成13年7月26日ご逝去
正会員　谷本　博計氏　平成13年8月3日ご逝去



「日本建築協会80年史1917-1996」

増刷頒布中　頒価　3,000円

1999年７月に発刊した「日本建築協会80年史1917-1996」は、各方面から好評をいただいておりますが、このたび、皆様の強いご要望により、増刷・頒布することにいたしました。大正６年３月30日に関西建築協会として誕生した日本建築協会の80年の歴史を、様々な事業や委員会活動を通じて、また、本会設立者の片岡安、武田五一以降現在までの会員たちの社会活動を通して知ることができる記念誌として、A4判・240頁にまとめています。

とくに、協会草創期の大正・昭和初期の片岡安ら協会のメンバーと当時の大阪市長・関　一との交流を物語る一文は、大阪の都市計画史、あるいは関西の建築人物誌ともなっています。本会の歴史を知るだけでなく、建築を通して、それぞれの時代の雰囲気を身近に感じることができる大変貴重な資料となるものです。

購入ご希望のかたは、下記要領でお申し込み下さい。

＊

申 込 先　社団法人　日本建築協会
〒530-0001　大阪市北区梅田1-1-3-2100
TEL 06-6348-0635　FAX 06-6348-0634

頒　　価　１部3,000円（税・送料込み）

※増刷部数には限りがございますので、お早めにお申し込み下さい。

「日本建築協会80年史」

A4判・240頁・並製本

●日本建築協会の沿革／委員会活動／「建築と社会」の変遷／大正時代から現在までの本会主催の博覧会・展覧会・講演会／よろず相談住宅展／青年建築家・青年技術者顕彰／工高生デザインコンクール入選者etc.

●日本建築協会創立者と会を支えた38人のプロフィール（片岡　安・設楽貞雄・武田五一・池田　宰・波江悌夫・竹腰健造・尾崎久助・東畑謙三・塚本猛次・福田朝生・佐野正一・葛野壮一郎・横濱　勉・松本禹象・宗　兵蔵・園部文雄・日高　胖・野村一郎・古宇田　實・松室重光・松井貴太郎・安井武雄・中澤誠一郎・坂　静雄・今林彦太郎・井上新二・松本儀八・池田宮彦・錢高輝之・中西六郎・大林芳郎・鴻池藤一・伊東五郎・竹中錬一・鷲尾健三・松村雄吉・横尾義貫・足立　孝）

●座談会「戦中から戦後初期の協会活動」―尾亀清四郎・大林芳郎・小西　岬・佐野正一・横尾義貫・三品哲夫の6氏による終戦前後の協会活動の証言―

＊

■執筆ワーキンググループ
坂本勝比古／安達英俊／石田潤一郎／植松清志／梅宮弘光／桐浴邦夫／酒井一光／橋寺知子／山形政昭／吉田高子／和田康由

■80年史編纂委員会
長谷部朔郎／安達英俊／近藤達夫／谷淳之介／十倉　毅／原見昌志／和田康由／吉田悦二



「日本建築協会の遺産と功績」（坂本勝比古）より



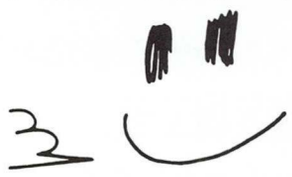
「草創期の人々」より片岡安の項

空調・衛生・クリーンルーム設備
(設計・施工)

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59　電話06(6302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

商品は空気です。



熱と空気のエンジニア
株式会社
大気社

●営業種目
空気調和設備　給排水衛生設備　塗装設備　公害防止関連設備の設計・製作・施工

本社・東京本店　東京都新宿区西新宿2-6-1　☎03—3344—1851(大代)　大阪本社☎06—6448—3603(代)
大阪支社　☎06—6448—5851(代)　名古屋支店　☎052—211—1535(代)　中国支店　☎082—247—5541
九州支店　☎092—431—2147(代)　営業所：北関東・横浜・神戸・京都・岡山・四国

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)6441-8231
東京本社　〒102-0071 東京都千代田区富士見2丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　社　名古屋・福岡
支　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

より快適な水環境をめざして
給排水衛生設備，冷暖房設備，消火設備の設計，施工

株式会社 西原衛生工業所 大阪本店

大阪本店　〒531-0071 大阪市北区中津六丁目8番4号
TEL 06-6458-3628(代表)
本　社　〒108-0023 東京都港区芝浦三丁目6番18号
TEL 03-3452-7441(代)
支　店　札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋・九州

空気調和設備　産業設備
給排水設備　水処理施設
電気設備　環境施設

三機工業株式会社

取締役社長　宅　清光
常務取締役関西支店長　本木　満

関西支店　大阪市中央区北浜2—2—21　電話 06(6202)7554
本　社　東京都千代田区有楽町1—4—1　電話 03(3502)6103
支　店　北海道・東北・関東・千葉・横浜・北陸・名古屋・京都・神戸・四国・中国・九州

人と都市の快適な環境をつくります

営業種目 設計・施工・監理
●電気設備
受変電・幹線
動力・制御装置
電話、放送、インターホン
防犯、防災
中央監視制御
システム計装
●空調・給排水・衛生設備
空気調和
工場配管
水処理
コージェネレーション
クリーンルーム
●プラント
プラント計装
システムエンジニアリング
●情報通信設備
情報通信ネットワーク
情報処理
通信システム
放送システム
●電力流通設備
受変電
架空送配電
地中送配電

まちと働力にあふれるクリエイティブカンパニーをめざす。
住友電設株式会社　大阪本社 〒550-0011 大阪市西区阿波座2-1-4 ☎(06)6537-3400
東京本社 〒105-0014 東京都港区芝2-2-17 ☎(03)3454-7311

空気調和設備
衛生設備 設計施工

三建設備工業株式會社

大阪支店　大阪市北区紅梅町3番5号　電話(6352)1131(代)
本　社　東京都中央区日本橋蠣殻町2—22　電話(3667)3431(大代)
支　社　名古屋・仙台・札幌・広島・福岡・金沢・新潟・横浜

CHOYO

人がいる多彩なフィールドで、
新しい限界に挑戦しています。

電気設備設計施工

朝陽電気株式会社

代表取締役　山本貴士

本　社　〒530-0005 大阪市北区中之島三丁目2-4(朝日ビル)
TEL 06(6385)1361(代)　FAX 06(6385)1050

空気調和・衛生設備・設計施工

株式会社三晃空調

本　社　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話06-6363-1671
東京本店　東京都新宿区西新宿　新宿住友ビル　電話03-3344-7911
大阪本店　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話06-6363-1371
支　店　仙台・横浜・名古屋・京都・神戸・広島・福岡

電気設備工事設計施工

東光電気工事株式会社
関　西　支　社

取締役支社長　伊藤義信

大阪市中央区高麗橋4丁目3番7号　電話大阪(6202)0325～9番
本　社　東京都千代田区西神田1丁目4番5号
支　社　北海道・東北・丸ノ内・新宿・神奈川・東関東・北関東・中部・九州

空調衛生・冷凍冷蔵・地盤凍結
よりよき環境へ技術で挑む

株式会社精研

本　社　大阪市中央区瓦屋町2丁目11番16号(オートセンタービル1・2階)
〒542-0066 電話 大阪 (06) 6768—5031代表
メンテナンス　電話　大阪 (06) 6768—1651代表
東京支社　東京都文京区小石川1丁目12番14号(日本生命小石川ビル7階)
〒112-0002　電話 (03) 5689—2351代表

電気設備設計施工

株式会社 三興社

代表取締役社長　上田正雄

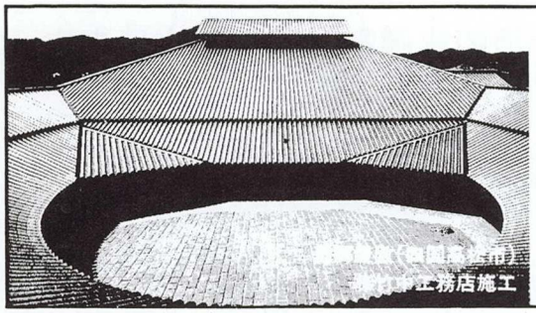
本　社　大阪市中央区北浜3—6—13 (日土地淀屋橋ビル)
電　話　06(6205)3671 (代)
支　店　東京都中央区日本橋茅場町2丁目17番3号
電　話　03(3666)1478 (代)
営業所　堺・泉州・泉南・滋賀

OKUJU
スペース クリエイター
建築に革命をもたらした技術がある
「大規模天井無足場工法」
内外装創作パネル・システム天井・間仕切
株式会社 オクジュー
本 社
大阪市北区西天満5丁目3番7号 〒530—0047
TEL(06)6312—4131 FAX(06)6312-7998
東京・九州・横浜・名古屋・南九州・京都

学校建築のトータルアドバイザー
二葉工業株式会社
黒 板・掲示板・家 具
電動黒板装置・サイン・スクリーン
〒547-0001 大阪市平野区加美北3—4—5
TEL06(6792)5858 FAX06(6792)2810

＊奉仕感謝の店
タイル及び規格石一式施工
株式会社 川岸窯業商店
本 社 大阪市西区西本町1の13の33
TEL.06—6532—0641(代表)
FAX.06—6535—5181
天理営業所 天理市丹波市新町49

●情報処理●企画・制作●編集●画像処理●印刷・製本
人と技術をクリエイティヴで結びます
日本データネット株式会社
本 社 〒530-0043 大阪市北区天満1-1-10 TEL.06-6352-7502 FAX.06-6355-2714
制作部 〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19 TEL.06-6352-0943 FAX.06-6355-5533
印刷工場 〒530-0043 大阪市北区天満2-5-15 TEL./FAX.06-6352-1551


〒556-0024
大阪市浪速区塩草一丁目二番三号
ファックス 六五六一～七四五四
六五六一～七四一六
ナニワ瓦株式会社
あらゆる屋根工事の相談は、

Digital Pri-Press
AOBA PRINTING CO.,LTD.,
代表取締役社長 依藤孝行
青葉印刷株式会社
〒534-0027 大阪市都島区中野町2丁目10番11号
Phone.06-6351-5428 Fax.06-6351-5299

デンカCSAファミリー製品
●デンカCSA（膨張性混和材） コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材） 鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント） コンクリート躯体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材） 地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材） コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に
電気化学工業株式会社
近畿地区販売店
浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・網野（07727）2—2220
舞鶴（0773）76—0133
金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）6332—6861
TEL 東京（03）3272—8501
小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）6443—6181
光洋物産株式会社
TEL 大阪（06）6252—6000
東郷化成株式会社
TEL 滋賀・守山（0775）83—2381
TEL 大阪（06）6877—1581

日本建築協会企画・販売

出版図書一覧

1917年３月に創設された日本建築協会（当時・関西建築協会）は、すでに昭和初期には大阪近辺で住宅博覧会や建築講演会を開く一方、当時は入手しにくかった建築の情報を図書の出版という形で会員に提供していた。

＊

以後、創立周年記念事業として、その時代の動きをとらえて単行本を出版している。

50周年、60周年、70周年、そして80周年に、図書の出版が企画され、現在も継続して発行・販売されている出版物は、以下のとおり。

＊

購入希望者は、㈱日本建築協会事務局（TEL06－6348－0635、FAX06－6348－0634）まで。

日本建築協会創立60周年記念事業

建築技術選書

Ａ５判・130頁～160頁　発行:学芸出版社　本体価格¥1,200～¥1,400

- 1 茶室の話　岡田孝男
- 3 マイコンによる構造設計のすすめ（改訂版）　魚木晴夫
- 5 すまいの語録　茶谷正洋
- 7 構造計画とやさしい力学１　須賀好富
- 8 建具の知識と意匠　山片三郎
- 9 エレベータ・エスカレータ 立体駐車場　木村利雄
- 10 構造計画とやさしい力学２　須賀好富
- 13 医院・診療所の計画と設計　池田有隣・船越暉由
- 14 設計のコンピューター手法　飯塚英雄
- 16 石垣と石積壁　窪田祐
- 17 基礎と地盤の手ほどき　中堀和英
- 18 ショッピングセンターの計画　西脇顕正
- 19 住宅設計とインテリア　福岡喜久雄
- 21 住宅の家具　光藤俊夫
- 23 設備技術者のための建築再入門　光安義光
- 24 鉄骨構造の話　金多潔・甲津功夫・西沢英和
- 26 建物と地震災害　竹内吉弘・島田耕一
- 28 建築金物の知識　立野一郎
- 30 住宅三備心得帳　平田純一
- 31 住宅のエレクトロニクス　監修　小林郁
- 32 建築塗装の手引き　児島修二
- 33 建築式典の実際　若林嘉津雄
- 34 建築設計と高齢者・身障者　吉田あこ
- 36 日本壁　山田幸一
- 37 身近な耐震設計法　前川陽一
- 38 住宅の照明　監修　大島博
- 39 建築を志す人びとへ　日本建築協会出版委員会

特装本
火災安全学入門　岡田光正

選書シリーズは、在庫図書を掲載

日本建築協会創立60周年記念事業「建築技術選書」姉妹篇

〈プロのノウハウ〉シリーズ

四六判２色刷り　発行:学芸出版社　本体価格¥1,600～¥2,500

- TQCから見た建設業　荒木陸彦
- 躯体工事監理のチェックポイント100　須賀好富
- 空調設備のトラブル50　建築設備トラブル研究会
- 衛生設備のトラブル50　建築設備トラブル研究会
- 現場マンのアイデア発想　合原一夫
- 建築基準法の実際　矢吹茂郎
- ニュー組積建築のすすめ　福島孝之　他
- 建築物の消防法を読みこなすコツ　高木任之
- 鉄筋工事・本音の現場学　荒川治徳
- 建築基準法の難解条文を読みこなすコツ　高木任之
- 工業化住宅・考 これからのプレハブ住宅　松村秀一
- 鉄骨工事の現場学　石田満裔
- 建築紛争の実際　岡本辰義
- 仕上工事監理のチェックポイント　日建設計監理業務研究会
- ゼロ災への道 建設現場の安全管理活動　表　一郎
- 木造住宅のしくみ 在来工法の基本と応用　浅野平八・東　敏博
- コンクリート工事のチェックポイント100　加賀秀治
- インテリアコーディネートの100ポイント　町田ひろ子監修／松本　茂・村元俊子著
- 新版 建築基準法を読みこなすコツ　高木任之
- 木づくりの常識非常識　上村　武
- 建築関連法規を読みこなすコツ　高木任之
- 都市計画法読みこなすコツ　高木任之

日本建築協会創立70周年記念事業

選書特装版

Ｂ５判　発行:学芸出版社　本体価格¥2,800～¥3,800

- 構造コストと経済設計　須賀好富
- 新・建築と設備の接点　宮脇　毅・南部　武
- 建築設備の健康診断　牧野　茂
- 外壁構法チェックリスト　飯塚五郎蔵
- 水にまつわるトラブルの事例・解決策〈建築篇〉　「建築漏水」編集委員会
- 建築・都市・住宅・土木ー情報アクセスブック　菊岡倶也
- 建築デザインのための構造計画　須賀好富
- 場所打ち杭の設計と施工　阪口　理
- 建築と緑　瀧　光夫
- 入門・建築積算　生島道春
- 水にまつわるトラブルの事例・解決策〈設備篇〉　「設備漏水」編集委員会

昭和生まれ　関西の建築家50　1987年

Ａ４判　企画・発行：日本建築協会　本体価格1,500円

日本建築協会建築クラブ朝食会300回記念

講演記録集　## 話のはなし　1997年

Ｂ６判５分冊　企画:日本建築協会建築クラブ　１セット10,000円（消費税含む）

民間（旧四会）連合協定

工事請負契約約款　Ａ４判のみ取り扱い

工事請負契約書・仲裁合意書・契約書使用上の留意事項

１部¥230（消費税含）送料　実費

日本建築協会創立70周年記念出版

住宅近代化への歩みと日本建築協会　1988年

Ａ４判　企画・発行：日本建築協会　本体価格1,500円

日本建築協会創立75周年記念出版

工高生デザインコンクール入選作品集　1992年

Ａ４判　企画・発行：日本建築協会　定価2,000円

日本建築協会創立80周年記念出版

建築を志す人びとへ

Ａ５判　日本建築協会出版委員会編著　本体価格1,800円

Takara standard
暮らし快適、高品位ホーロー。

タカラホーロー壁装材
Emawall
エマウォール

ALUMINIUM

Aluminum Curtain Wall
Aluminum Panel
Steel Stripes Plate
Stainless Steel Toplight
Steel Handrail

美しさいつまでも

豊富なカラー・デザイン

衛生的な抗菌ホーロー



ホーローならではの
艶やかな色調。
洗練された建築物は
街の美しい風景となります。

タカラスタンダード株式会社
本社／〒536-8536　大阪市城東区鴫野東1丁目2番1号
●資料のご請求は●
◆本社建材営業部　TEL06(6962)1505
◆横浜支店建材営業部　TEL045(435)8041

川鉄アルミニウム工業株式会社
建材営業部／〒550-0011　大阪市西区阿波座1-5-2
第4富士ビル7F
大阪支店／TEL06-6536-6511
FAX06-6536-6520

Vol.82 No.954号　2001年8月1日発行　毎月1回1日発行　昭和24年3月1日第3種郵便物認可　ISSN 0912-8182
定価1,200円（本体1,143円＋消費税57円＋送料共）正会員の購読料は会費に含めて徴収